

広島市佐伯区五日市町所在

平尾遺跡 発掘調査報告

1994・3

は し が き

広島市西部に位置する佐伯区は、昭和60年3月に広島市に合併する以前から広島市のベッドタウンとして急速に市街地化が進み、宅地造成、交通網の整備等による開発が盛んに行われ、大きな変貌を遂げている地域である。なかでも北東部にある石内地区は、隣接する安佐南区沼田地区とともに「住み」「働き」「学ぶ」「憩う」の4つの機能をもつ総合自立都市の建設を目的とした広島西部丘陵都市の建設対象区域となっており、多くの開発事業が進められています。この開発事業のひとつとしてシティリゾートタウンが建設されることになり、その用地内に所在する平尾遺跡について発掘調査を実施したものです。

調査の結果、竪穴住居跡、土壙墓、土器棺墓等が確認され、弥生時代後期に営まれた集落跡並びに石内川・八幡川流域において初の大規模な墳墓群であることを明らかにすることができました。また、多くの弥生土器が出土し、この地域の古代の人々の生活を知るうえで貴重な資料を得ることができました。

この調査報告書が地域の歴史学習の一助となり、郷土に対する理解と愛着を深めていただくことに役立てば幸いです。

最後になりましたが、調査にあたりご指導・ご助言いただきました諸先生方並びにご協力いただいた調査補助員の皆様方に心からお礼申し上げます。

平成6年3月

財団法人広島市歴史科学教育事業団

例 言

1. 本書は、広島市佐伯区五日市町大字石内字平尾におけるシティリゾートタウン建設に伴い、平成5年度に実施した平尾遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、株式会社中国そごう都市開発・日本鋼管不動産株式会社共同事業体から委託を受けて、財団法人広島市歴史科学教育事業団が実施した。
3. 本書は、I - 「 - 」 - V (2) を富田浩二が、I V ・ V (1) を幸田淳が執筆し、宮田が編集した。
4. 遺構の実測及び写真撮影は、幸田、宮田が分担して行った。
5. 遺物の実測及び写真撮影は、幸田、宮田、若島一則が分担して行った。
6. 図面のトレースは、幸田が行った。
7. 本書掲載の航空写真撮影は、スタジオ・ユニに委託した。
8. 第1図に使用した地図は、国土地理院発行の50000分の1の地形図「広島」を、第2図は、広島市発行の25000分の1の広島市平面図「N-5」・「N-6」を複製したものである。
9. 本書で使用した略記号は以下のとおりである。

H：竪穴住居跡	B：掘立柱建物跡	P：柱穴	T：テラス状遺構	D：段状遺構
S：土坑	X：性格不明土坑	K：土壙墓	P o：土器棺墓	

目 次

I	はじめに	1
「	位置と環境	3
」	遺構	7
IV	遺物	15
V	まとめ	26

揮 図 目 次

第1図	平尾遺跡周辺遺跡分布図	2
第2図	平尾遺跡周辺地形図	6
第3図	平尾遺跡遺構配置図	30
第4図	H 1 実測図	31
第5図	H 2 実測図	32
第6図	T 1 実測図	33
第7図	T 2 実測図	33
第8図	B 1 実測図	34
第9図	T 3 実測図	34
第10図	D 1・X 1 実測図	35
第11図	D 2 実測図	35
第12図	K 1 実測図	36
第13図	K 2 実測図	36
第14図	K 3 実測図	37
第15図	K 4 実測図	37
第16図	K 5 実測図	38
第17図	K 6 実測図	38
第18図	K 7 実測図	39
第19図	K 8・K 9 実測図	39
第20図	K 10 実測図	40
第21図	K 11 実測図	40
第22図	K 12 実測図	41
第23図	K 13 実測図	41
第24図	K 14 実測図	42
第25図	K 15 実測図	42
第26図	K 16 実測図	43
第27図	K 17 実測図	43
第28図	K 18 実測図	44
第29図	K 19・K 20 実測図	44
第30図	K 21 実測図	45
第31図	K 22 実測図	45
第32図	K 23 実測図	46
第33図	K 24 実測図	46
第34図	K 25 実測図	47
第35図	K 26 実測図	47
第36図	K 27・S 1 実測図	48
第37図	K 28 実測図	48
第38図	K 29 実測図	49
第39図	K 30 実測図	49
第40図	K 31 実測図	49
第41図	K 32 実測図	50
第42図	K 33 実測図	50
第43図	S 2 実測図	51
第44図	K 34 実測図	51
第45図	K 35・K 36 実測図	51
第46図	K 37 実測図	52
第47図	K 38 実測図	52
第48図	K 39 実測図	53
第49図	S 3 実測図	53
第50図	K 40 実測図	53
第51図	K 41 実測図	54
第52図	S 4 実測図	54
第53図	P o 1 実測図	54
第54図	P o 2 実測図	55
第55図	P o 3 実測図	55
第56図	P o 4 実測図	56
第57図	第1土器溜り実測図	56
第58図	第2土器溜り実測図	57
第59図	第3土器溜り実測図	57
第60図	H 1・H 2 出土土器実測図	58
第61図	T 1・T 2 出土土器実測図	59
第62図	T 3 出土土器実測図	60
第63図	T 3 及び調査区内出土土器実測図 ..	61
第64図	第2土器溜り及び 調査区内出土土器実測図	62
第65図	第3土器溜り 及び調査区内出土土器実測図	63
第66図	第3土器溜り及び 調査区内出土土器実測図	64
第67図	P o 1～P o 4 出土土器実測図	65
第68図	第1土器溜り出土土器実測図	66

付 表 目 次

表 1 平尾遺跡土墳墓計測表	1 4	表 2 平尾遺跡出土土器観察表	1 6
----------------------	-----	-----------------------	-----

図 版 目 次

P L 1	平尾遺跡全景（東から・調査後・航空写真）	P L 1 2 c.	K 2 6
P L 2	平尾遺跡近景（東から・調査後）	d.	K 2 7. S 1
P L 3	a. 平尾遺跡遠景（西から・調査前）	e.	K 2 8
	b. 平尾遺跡近景（東から・調査前）	f.	K 2 9
P L 4	a. H 1	g.	K 3 0
	b. H 2	P L 1 3 a.	K 3 1
P L 5	a. T 1	b.	K 3 2
	b. T 2	c.	K 3 3
P L 6	a. T 2 焼土	d.	K 3 4
	b. B 1	e.	K 3 5. K 3 6
P L 7	a. T 3（西半分）	f.	K 3 7
	b. T 3（東半分）	P L 1 4 a.	K 3 8
P L 8	a. D 1	b.	K 3 9
	b. D 2	c.	K 4 0
P L 9	a. K 1	d.	K 4 1
	b. K 2	P L 1 5 a.	S 2
	c. K 3	b.	S 3
	d. K 4	c.	S 4
	e. K 5	d.	X 1
	f. K 6	P L 1 6 a.	P o 1
P L 1 0	a. K 7	b.	P o 2
	b. K 8. K 9	P L 1 7 a.	P o 3
	c. K 1 0	b.	P o 4
	d. K 1 1. K 1 2. K 1 3	P L 1 8 a.	第 1 土器溜り
	e. K 1 4	b.	第 2 土器溜り
	f. K 1 5	c.	第 3 土器溜り
	g. K 1 6	P L 1 9	出土土器（1）
P L 1 1	a. K 1 7	P L 2 0	出土土器（2）
	b. K 1 8	P L 2 1	出土土器（3）
	c. K 1 9. K 2 0	P L 2 2	出土土器（4）
	d. K 2 1	P L 2 3	出土土器（5）
	e. K 2 2	P L 2 4	出土土器（6）
	f. K 2 3	P L 2 5	出土土器（7）
P L 1 2	a. K 2 4	P L 2 6	出土土器（8）
	b. K 2 5		

Ⅰ はじめに

広島市教育委員会（以下、市教委とする）は、１９９０（平成２）年１０月８日、株式会社中国そごう都市開発・日本鋼管不動産株式会社共同事業体（以下、共同事業体とする）より、広島西部丘陵シティリゾートタウン開発事業地内の埋蔵文化財の有無並びに取扱いについて協議を受けた。そこで、市教委は１９９１（平成３）年３月４日から５月２日までに試掘調査を行った結果、計画地内で埋蔵文化財包蔵地の存在を確認した。その後、市教委と共同事業体は埋蔵文化財の取扱いについて協議を重ねたが、現状保存は困難であり、記録保存もやむを得ないという結論に達した。これを受けて、共同事業体は財団法人広島市歴史科学教育事業団（以下、事業団とする）に発掘調査を委託して行うこととした。事業団は、１９９３（平成５）年４月から調査の準備を始め、５月１７日から１０月２０日まで実施した。

調査の実施に係わった関係者は、下記のとおりである。

調査委託者 株式会社中国そごう都市開発・日本鋼管不動産株式会社共同事業体

調査受託者 財団法人広島市歴史科学教育事業団

調査担当課 財団法人広島市歴史科学教育事業団文化財課

調査関係者 松原 明二 常務理事

山出 健志 文化財課長

稲葉 瑞穂 文化財課事業係主査

若島 一則 文化財課事業係主査

調査者 幸田 淳 文化財課事業係長

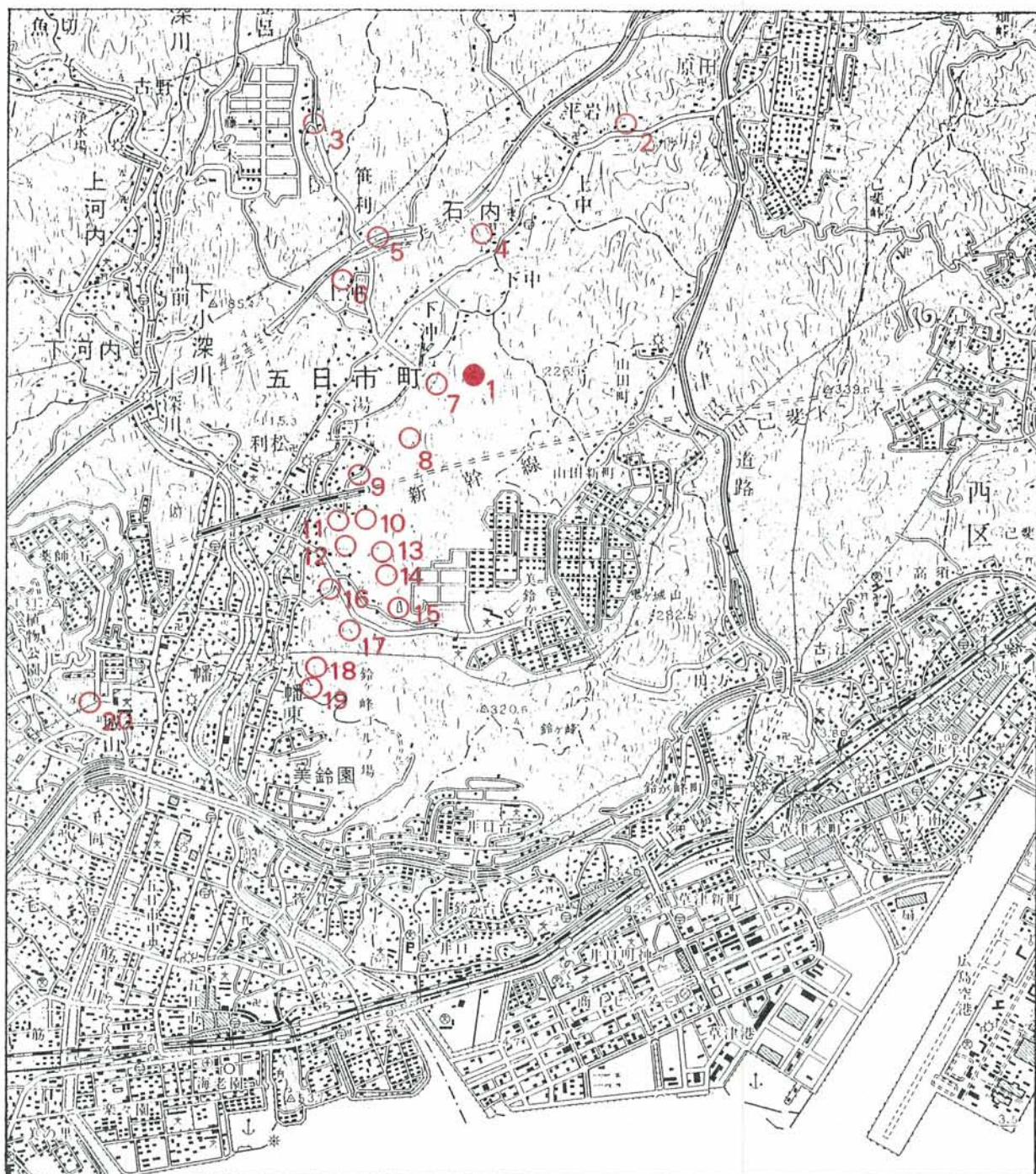
富田 浩二 文化財課事業係主事

調査補助員（順不同）

（発掘作業）阿武 盟子、石本 峯子、乾 操子、岩井 鈴江、岩本佐代子、植木 恭子、岡原ちか子、尾崎 千鳥、鴉田 愛子、木村八重子、小嶋 千恵、坂井 文子、田中 栄治、田中 義照、谷口 敏枝、長尾 明子、中島 新三、中本 俊憲、西本 秋穂、野崎 晃、浜中 美枝子、原田 千代子、広沢 英雄、福崎 聡子、藤本 朋子、舛田 愛子、松本千恵子、構手勇、村田 友子、八木 康子、山田 逸二、山田佐加枝、山本 利子、吉村 秀雄、渡辺サツエ、岡田 衣美、小野 圭、田中 大輔、磨平 貴子、長尾 元定、林 正敬、福崎和成、富地 健司、柳本 竜生、山内まゆみ

（整理作業）河合淳子、佐伯ひとみ、菅原 彰子、住川香代子、橋本 礼子

なお、株式会社中国そごう都市開発、日本鋼管不動産株式会社、広島市教育委員会、石内公民館ほか多くの方々には、調査を円滑に進めるため、多大な御配慮と御協力をいただいた。また、調査中、潮見浩広島大学名誉教授、広島大学考古学教室川越哲志教授、河瀬正利助教授、古瀬清秀助手から貴重な御指導、御助言をいただいた。さらに、報告書作成にあたっては、岡山県古代吉備文化財センター正岡睦夫氏ほか多くの方々から広範な御教示をいただいた。ここに記して謝意を表したい。



- | | | | |
|-------------|-------------|-------------|-----------|
| 1 平尾遺跡 | 2 串山城遺跡 | 3 笹利迫田遺跡 | 4 水晶城遺跡 |
| 5 浄安寺遺跡 | 6 長尾城遺跡 | 7 下沖3号遺跡 | 8 下沖5号遺跡 |
| 9 和田1号遺跡 | 10 利松住吉遺跡 | 11 利松遺跡 | 12 高井2号遺跡 |
| 13 城ノ下A地点遺跡 | 14 小林B地点遺跡 | 15 小林A地点遺跡 | 16 高井遺跡 |
| 17 早稻田遺跡 | 18 深山迫A地点遺跡 | 19 深山迫B地点遺跡 | 20 倉重向山遺跡 |

第1図 平尾遺跡周辺遺跡分布図

「位置と環境

平尾遺跡は、広島市佐伯区五日市町大字石内字平尾に所在し、石内川左岸の標高60～74mの低丘陵上に位置しており、石内川の中流域の沖積地を望むことができる。本遺跡の西側には谷を挟んで丘陵が延びているため、本遺跡の西ないし南西方向の視界は遮られている。

また、本遺跡の眼下を流れる石内川は、遺跡周辺で注ぎ込む笹利川をはじめ多くの小河川を合流させ、南西方向に細長く延びた沖積地を形成しながら、下流で八幡川に流れ込んだのち広島湾に注いでいる。石内川及び八幡川が形成する沖積地に向け迫り出した低丘陵上には、最近の発掘調査等から多くの遺跡が存在することが確認されている。特に石内川流域及びその周辺は、広島市域でも有数の遺跡の密集地域に挙げられており、弥生時代後期の集落跡も数多く分布していることが明らかになってきている。

まず、石内川左岸の丘陵上をみると、本遺跡の南西約300mに位置する下沖3号遺跡⁽¹⁾をはじめ、下沖5号遺跡⁽²⁾、和田1号遺跡⁽³⁾が分布している。下沖3号遺跡は、標高46mの丘陵尾根上に位置する弥生時代後期中葉から古墳時代初頭にかけて営まれた集落跡で、住居跡4軒等が確認されている。下沖5号遺跡は、標高35m前後の丘陵尾根先端部に位置する弥生時代後期前葉から古墳時代初頭にかけて営まれた集落跡で、住居跡18軒（建て替え分は除く）、掘立柱建物跡6棟等が確認されている。和田1号遺跡は、標高20～24mの微高地に位置し、弥生時代後期の住居跡1軒が確認されている。なお、同遺跡からは弥生時代前期及び古墳時代全期間にわたる住居跡も確認されていることから、弥生時代前期から古墳時代にかけて存続した複合遺跡と考えられる。

さらに、石内川・八幡川合流点付近にある石内川左岸の丘陵上に目を移すと、城ノ下A地点遺跡⁽⁴⁾小林A地点遺跡⁽⁵⁾、小林B地点遺跡⁽⁶⁾が分布している。城ノ下A地点遺跡は、標高80m前後の丘陵尾根上に位置しており、弥生時代後期前葉から古墳時代初頭にかけての住居跡23軒等が確認されている。小林A地点遺跡は、標高80m前後の丘陵尾根上に位置する弥生時代後期中葉から古墳時代初頭の時期の遺跡で、住居跡17軒（建て替え分は除く）等が確認されている。小林B地点遺跡は、標高110m前後の丘陵尾根の中程に位置しており、斜面から住居跡2軒等が確認された弥生時代後期中葉から後葉の時期の遺跡である。

また、石内川を挟んだ本遺跡の対岸にある丘陵上からも、山陽自動車道建設に伴う発掘調査によって浄安寺遺跡⁽⁷⁾、水晶城遺跡⁽⁸⁾、笹利迫田遺跡⁽⁹⁾が相次いで発見されている。浄安寺遺跡は、標高110m前後の丘陵の尾根先端部に位置する弥生時代後期中葉から後葉にかけて営まれた集落跡で、住居跡21軒（建て替え分は除く）が確認されている。水晶城遺跡は、標高110m前後の丘陵尾根上に位置する弥生時代後期中葉から後葉にかけて営まれた集落跡で、斜面から住居跡7軒等が確認されている。笹利迫田遺跡は、石内川支流の笹利川右岸にある標高110m前後の丘陵上に位置している。貝塚及び土壌内から弥生時代後期中葉から古墳時代初頭の頃の土器を多量に出土した遺跡で、住居跡1軒等が確認されている。

以上のことから、弥生時代後期における石内川流域では比較的大規模で継続的な集落がいくつか存在し、その周辺に数軒の住居から成立する小規模な集落が点在していることが窺える。

さて、今回の調査では集落跡とともに墳墓群を検出したが、石内川流域において墳墓を伴う弥生時代の遺跡をみると、小林A地点遺跡、小林B地点遺跡、浄安寺遺跡、水晶城遺跡などがある。これらの遺跡のなかで、注目されるのが小林B地点遺跡である。小林B地点遺跡では、丘陵頂部にある平坦面の東西約11m、南北約10mの狭い範囲から土壌墓6基、溝状遺構3カ所が確認されている。この土壌墓群が存在する範囲において自然地形を加工し方形に地山を整形しているほか、土壌墓群の西端を取り囲むように尾

根と直交する溝状遺構が確認されている。これらの施設は、墓域を区画するためのものと考えられている。また、この土壙墓群は弥生時代後期中葉から後葉の時期に営まれたと考えられており、先述した集落が廃絶した後に成立した可能性が示唆されている。小林A地点遺跡からは、弥生時代後期の遺構と考えられる土壙墓1基が確認されているが、小林B地点遺跡同様に尾根を直交する溝状遺構と土壙墓を取り囲むように一辺7m程度の地山整形面も確認されている。これらの施設も墓域を区画するためのものと考えられている。浄安寺遺跡では、土壙墓2基、土器蓋土壙墓2基が確認されている。土器蓋として使用された土器の特徴から2基の土器蓋土壙墓はいずれも弥生時代後期中葉から後葉の遺構と考えられるが、土壙墓2基については遺物が出土しておらず時期については不明である。水晶城遺跡で確認された土壙墓1基については、これに伴う遺物は出土していないものの表土等から弥生土器などが出土したことから、弥生時代の墳墓の可能性があると見える。

また、八幡川の右岸にある通称極楽寺山（標高663m）から南東に派生する丘陵上に位置する稗畑遺跡⁽¹⁰⁾からは、同一尾根上から7基の土器棺墓が確認されており、注目される。これらの土器棺墓のうち6基が使用された土器の特徴から、弥生時代後期中葉から後葉にかけての墳墓と考えられる。

以上のことから、石内川及び八幡川流域の弥生時代後期の遺跡から確認された墳墓は、土壙および土器棺の形態をとるものがほとんどで石棺は見られない。また、ほとんどの墳墓から遺物は出土していない。さらに、各遺跡の墳墓数をみると小林B地点遺跡の6基を最高にいずれも少数であり、45基の墳墓を検出した平尾遺跡は、石内川および八幡川流域初の大規模な墳墓群であるといえよう。

ところで、目を転じて太田川流域を見ると、大規模な墳墓群をもつ遺跡がいくつかある。

末光A-2地点遺跡⁽¹¹⁾では、土壙墓10基と土器蓋土壙墓1基と溝状遺構が確認されている。この溝状遺構は、尾根の狭小部分から尾根に直交するように検出されており、墓域を設定するためのものと考えられている。また、墳墓群の築造時期は、土器蓋として使用された土器から弥生時代後期中葉の時期に営まれたと考えられる。末光B地点遺跡⁽¹²⁾からは、土壙墓8基、土器蓋土器棺墓1基、箱式石棺墓1基が確認されているが、出土した土器の特徴から弥生時代後期中葉から後葉にかけての時期に営まれた墳墓群といわれている。

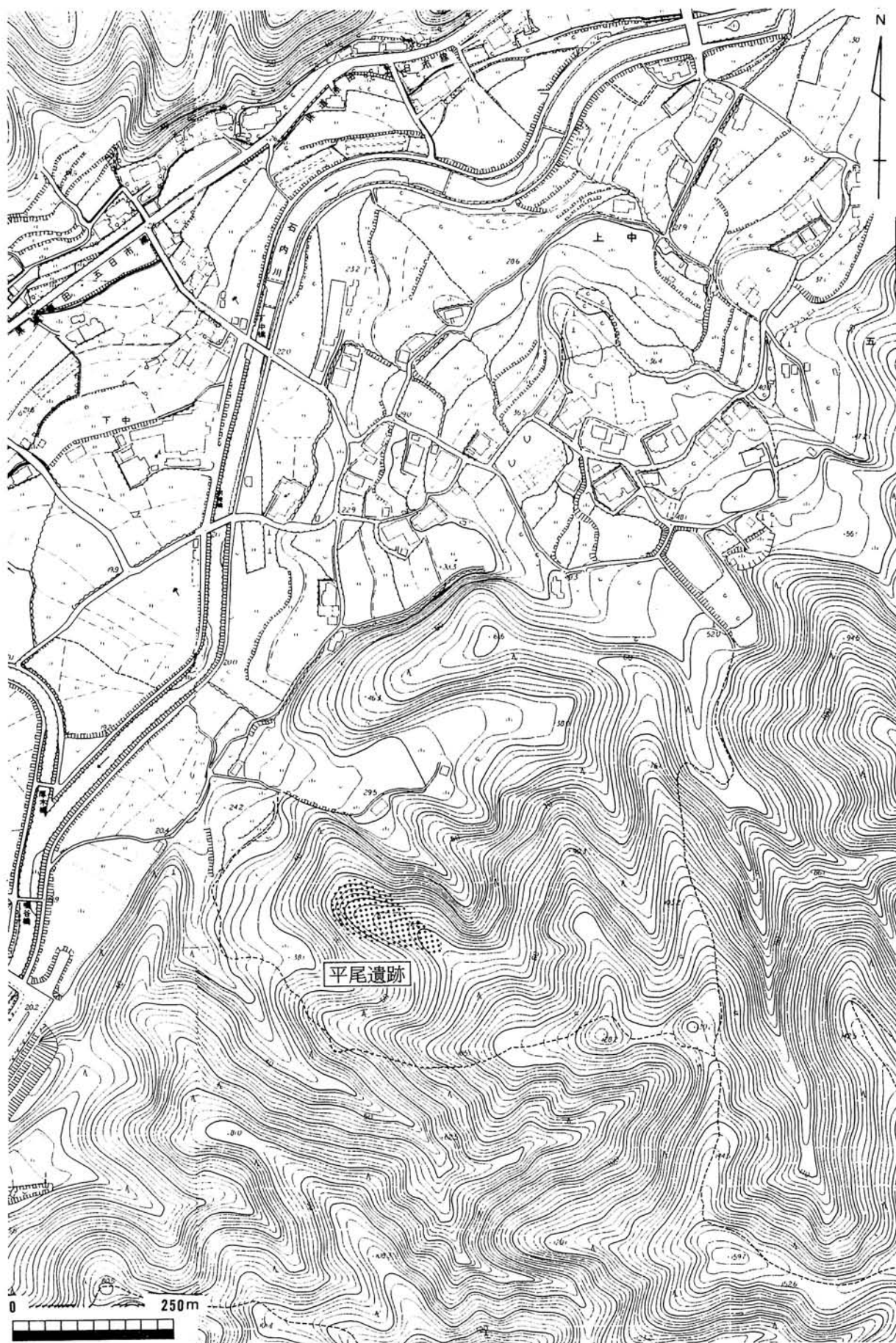
西願寺A地点遺跡⁽¹³⁾は、遺跡の最高所に位置しており、南北20m、東西10mの範囲内から42基の土壙墓が確認されているが、これらの大部分が尾根に直交するように掘り込まれている。この土壙墓群の営まれた時期については、表土から弥生土器の細片が出土した以外は遺物は検出されていないため明確ではないものの、西願寺遺跡群では最も古い時期に位置づけられている。また、遺跡内からは尾根と直交するものと南端にあって尾根に平行になるものの2つの溝状遺構が確認されている。尾根と直交する溝状遺構は、溝内に土壙墓が重複しているものの形状や位置関係等から当初は墓域を区画するために築造されたものと考えられる。

大久保遺跡⁽¹⁴⁾からは、土壙墓35基、土器棺墓4基が確認されたほか、土壙墓に伴う土器も出土している。これらの土器は、掘り方上面や覆土内からほぼ全形を復元できるように検出されており、供献された土器と考えられる。この墳墓群は供献土器及び土器棺墓に使用された土器の特徴から、弥生時代後期中葉から終末に至る時期に営まれたと考えられている。

以上のことから、石内川及び八幡川流域は太田川流域に比べると大規模な墳墓群をもつ遺跡の調査例が少なく、弥生時代後期の墓制のあり方について明確でなかったと思われる。しかし、今回の調査で45基の墳墓から成立する墳墓群が検出されたことから、石内川および八幡川流域での弥生時代後期の墓制について検討するための好資料を得たといえよう。

注

- (1) 広島市教育委員会「下沖3号遺跡」『一般県道原田五日市線（石内バイパス）道路改良工事事業地内遺跡群発掘調査報告』1988
- (2) 広島市教育委員会「下沖5号遺跡」『一般県道原田五日市線（石内バイパス）道路改良工事事業地内遺跡群発掘調査報告』1988
- (3) 広島市教育委員会「和田1号遺跡」『一般県道原田五日市線（石内バイパス）道路改良工事事業地内遺跡群発掘調査報告』1988
- (4) 財団法人広島市歴史科学教育事業団『城ノ下A地点遺跡発掘調査報告』1991
- (5) 広島市教育委員会「小林A地点遺跡」『小林A・B地点遺跡発掘調査報告』1990
- (6) 広島市教育委員会「小林B地点遺跡」『小林A・B地点遺跡発掘調査報告』1990
- (7) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センタ「浄安寺追跡」『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（Ⅰ）』1986
- (8) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センタ「水晶城遺跡」『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（Ⅰ）』1986
- (9) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『笹利迫田遺跡発掘調査報告書』1985
- (10) 財団法人広島市歴史科学教育事業団『稗畑遺跡発掘調査報告』1992
- (11) 広島市教育委員会「末光A一2地点遺跡」『末光遺跡群発掘調査報告』1984
- (12) 広島市教育委員会「末光B地点遺跡」『末光遺跡群発掘調査報告』1984
- (13) 執広島県教育委員会「西願寺A地点遺跡」『西願寺遺跡群』1974
- (14) 財団法人広島市歴史科学教育事業団『大久保遺跡発掘調査報告』1992



第2図 平尾遺跡周辺地形図

」 遺 構

1. 遺跡の概要

平尾遺跡は、石内川左岸にある山塊（標高250.2m）から北西にむけて派生する丘陵先端部の尾根上及び斜面（標高60～74m）に立地している。この尾根は頂部で標高74.6mあり、概ね西へ延びている。尾根上の平坦面は最大幅約7mと狭隆であり、尾根の北側ないし南西側にある斜面はいずれも急傾斜である。

この丘陵の北側および南西側には狭小な谷が湾入しており、最近まで石内川に流れ込む谷水を利用して水田がつくられており、当時もこの谷水田が生活基盤であった可能性が高いと思われる。なお、北側水田面との比高差は約40m、南西側水田面との比高差は約25mある。

調査の結果、本遺跡の遺構は尾根上の平坦面と尾根先端部周辺の斜面に分布していることを確認した。尾根上の平坦面からは、竪穴住居跡1軒、段状遺構2カ所、土坑4基、土壇墓41基、土器棺墓4基を、尾根先端部周辺の斜面からは、竪穴住居跡1軒、掘立柱建物跡1棟、土坑1基、そして尾根先端部を取り囲むようにテラス状遺構3カ所を検出した。本遺跡の遺物としては、遺構上及びその周辺、特に斜面から大量の弥生土器（壺・甕・鉢・高坏等）が出土した。

また、現況から、本調査区の東側にある同一丘陵の尾根上には、調査区内の尾根上と同様に狭隆な平坦面が続くことから、土壇墓および土器棺墓等の墳墓に係る遺構の存在が想定される。このことから、本調査区の東側にある同一丘陵の尾根上も本遺跡の範囲と考えられる。

2. 遺構

・H1〔第4図〕

H1は、標高70mの尾根上に位置している。本尾根は頂部から先端部にむけて緩やかに傾斜しており、本遺構は西向きの緩斜面を掘り込んで造られている。このため壁は東側のみ遺存し、壁高は中央部で最高63cmである。残存する部分から推定される平面プランは円形で、床径は約6mである。壁溝は残存する壁に沿って巡っているもののほか、西側の床面からも長さ2.4mのものを確認した。溝の規模は幅5～22cm、深さ2～6cmである。壁溝内には壁留材を支えた杭穴と考えられるピット3個がある。

床面から柱穴と考えられるピット12個を検出したが、柱穴の規模、壁との位置関係からいずれも主柱穴と考えられる。柱穴の規模は底径22～32cmで、深さは50～87cmである。12個の柱穴のうち、P1、P8を除く10個の柱穴については、P2とP3、P4とP5、P6とP7、P9とP10、P11とP12をそれぞれ近接する位置から検出したが、住居の構造上、主柱穴として近接する2個の柱穴を同時に使用したとは考えられない。このことから、H1は7本柱構造を呈する住居と考えることができ、少なくとも1回の建て替えが行われたと推定される。ただし、近接する2個の柱穴の新旧関係は不明確であり、柱穴の組み合わせについても明確に想定しえなかった。

なお、柱穴内の土層観察の結果、P3については柱の痕跡が確認でき、その規模は径11cmである。

また、床面中央付近からは深さ5～11cmの不整形な掘り込みを検出した。掘り込み内から炭化物を含んだ層と焼土層を検出したことやその位置から、この掘り込みは炉跡と考えられる。

本遺構に伴う遺物としては、床面から出土した弥生土器（1、2、3、4、5）がある。

・H2〔第5図〕

H2は、標高64mの尾根先端部の北側斜面に位置している。本遺構は北向き斜面を掘り込んで造られているため、北側の壁及び床面がほとんど流出している。このため壁は南側のみが遺存し、壁高は東側で最高57cmである。残存する部分から推定される平面プランは円形で、床径は約4.4mである。

壁溝は残存する壁に沿って巡っており、溝の規模は幅4～12cm、深さ2～10cmである。

床面から柱穴と考えられるピット3個を検出したが、柱穴の規模、壁との位置関係からいずれも主柱穴と考えられる。柱穴の規模は底径19～24cm、深さ34～56cmである。柱間距離はP1・P2間が3m、P2・P3間が2.6mである。3個の柱穴の配置から、H2は主柱を方形に配した4本柱構造を呈する住居と推定される。ただし、北東隅の柱穴は斜面のため流出している。

本遺構に伴う遺物としては、床面から出土した弥生土器（6、7、8、9、10、1）がある。

・T1〔第6図〕

T1は、標高62mの尾根先端部の南西側斜面に位置している。本遺構は斜面を最大92cm掘り込んで細長い平坦面を造りだしている。現状では幅が13.5m、奥行きが東側で最大1.9mある。なお、本遺構では柱穴、溝等の平坦面以外の遺構が確認できなかったため、性格については不明である。本遺構に伴う遺物としては、床面から出土した弥生土器（18、20、22、25、26）がある。

また、本遺構の北西側に位置するT1・T2間の斜面からも弥生土器（19、21、23、24）が出土した。

・T2〔第7図〕

T2は、標高63mの尾根先端部の斜面に位置している。本遺構は等高線に沿うように斜面を最大70cm掘り込んで広大な平坦面を造りだしている。現状では幅が14.8m、奥行きが5.6mで東側にある壁際から縁辺部にむけて緩やかに傾斜している。なお、本平坦面の南東端から5m辺りに約20cmの段差が認められた。

また、標高61～62mの本遺構南西側にある斜面からは、炭化物を多量に含んだ黒色土を2カ所検出した。東側のものがやや広く170cmX70cmの範囲で厚さが最大13cmで、西側のものが100cmX50cmの範囲で厚さが最大14cmであった。2カ所とも大量の炭化物を含んでいたことから火を取り扱った痕跡と考えられ、その位置から本遺構との関係が窺える。しかし、遺物が出土していないため本遺構と直接関係のあるものと断定することはできない。

本遺構における他の遺構としては、掘立柱建物跡（B1）がある。また、本遺構に伴う遺物としては、中央部の壁際から出土した弥生土器（14、16、17）がある。

ところで、本遺構の北東端部から斜面を掘り込んで造られたH2が確認された。本平坦面と同レベルであるH2の埋土上層面からは弥生土器（12、13、15）が出土したほか、中央部付近からは120cmX110cmの範囲で焼土を確認した。これらのことから、この面も遺構面と確認でき、本遺構の範囲と考えられる。

次に、本遺構とH2の新旧関係については、H2廃絶後にこの面が使用されていることから本遺構がH2の廃絶後も利用された可能性はあると思われるが、上述のことだけで両遺構の新旧関係を判断することは避けた方がよからう。

・B1〔第7図〕

B1は、H2の約8m南のT2上に位置しており、T2の中央やや南よりの壁際からピット7個を検出した。7個のピットは、その規模、形状からいずれも柱穴と考えられる。南側の梁行の柱穴をみると北側の梁行に対応する柱穴の痕跡が確認されなかったため、6本を主柱穴とする1間X2間の建物跡と考えられる。その規模は桁行3.6m、梁行2.8mで棟方向はN20°Eである。柱穴の規模は、上縁部の径40～66cm、底部の径17～28cmで、深さは20～48cmである。

なお、本遺構に伴う遺物は出土しなかったが、T2内に位置していることから、T2と同時期に築造された可能性が高いと思われる。

・T3〔第9図〕

T3は、標高65mのH1北側の斜面に位置している。本遺構は急斜面を最大102cm掘り込んで帯

状の細長い平坦面を造り出している。本遺構からは中央部にある幅9m、奥行き1.2mの平坦面をはじめとして5～20cmの段差をもって3つの平坦面が検出された。中央部の平坦面からはピット3個を検出したが、その規模、形状からいずれも柱穴と考えられる。柱穴の規模は底径20～25cm、深さ62～71cmである。3つの柱穴は壁際に沿って3m前後の等間隔で並んでいることから何らかの施設と考えられるが、その性格については不明である。

本遺構に伴う遺物としては、中央部平坦面と東側平坦面の境付近の壁際から出土した弥生土器（27、28、29、30、31、32、33、34、35、36、37、38）がある。

・D1〔第10図〕

D1は、標高73mの尾根上平坦面に位置し、緩やかに傾斜している尾根を削り込んで造られている。本遺構は尾根筋に直交し、南北に延びている。南側はわずかに西方向に曲がり、斜面に接する地点で終息している。北側については端部付近からX1を検出したため、終息する位置は明確にできなかった。残存する部分から規模をみると、長さ約5mで、壁高は中央部が最高で40cmで、X1との境付近で25cmある。

なお、本遺構に伴う遺物は出土しなかった。

・X1〔第10図〕

X1は、標高73mの尾根上に位置し、D1の北端から検出した土坑である。X1はD1と重複しているため、上縁部の規模については不明確であるが底面については径62～66cmで、円形である。深さは南側で30cm、北側で16cmである。土坑内には炭化物を多量に含んだ黒色土が充満しており、火を取り扱った施設と思われるが、その性格については不明である。

なお、土坑内からは土器の細片が出土したが、時期は明確にできなかった。

・D2〔第11図〕

D2は、標高68mの尾根上平坦面に位置し、緩やかに傾斜している尾根を削り込んで造られている。本遺構は尾根筋に直交し、北西―南東に延びている。北側はわずかに西方向に曲がり、斜面に接する地点で終息している。南側についてはK41と重複しているため、終息する位置は明確にできなかった。残存する部分から規模をみると、長さ約6.5mで、壁高はK41との境付近が最高で36cmで、中央部が27cmである。また、中央部と南側の壁際から2つの溝を検出した。中央部のものが長さ1.4m、幅10～14cm、深さ5～7cmである。南側のものが長さ1.4m、幅4～14cm、深さ3～6cmである。2つの溝の性格については不明である。

なお、D2から約50cm離れた西側の平坦面から弥生土器（43）が出土しており、本遺構に伴う遺物の可能性も考えられる。

・S1〔第36図〕

S1は、標高71mの尾根上に位置し、H1から南東へ約6.5m離れた地点にある。本土坑はK27と重複しているため、北側以外は3/4以上失われている。底部は径85～97cmで、西側が張り出ししているものの概ね円形で、底面は平坦である。深さは現状で北側が76cmある。断面形は不明確であるが、残存部の規模、形状から一応貯蔵穴と考えたい。

なお、本土坑に伴う遺物は出土しなかった。

・S2〔第43図〕

S2は、標高71mの尾根上に位置し、H1から東へ約3m離れた地点にある。上縁部は径105～122cmで、南東側がくぼんでいるものの概ね円形である。底部も径87～93cmで概ね円形であり、底面はほぼ平坦である。深さは東側が最も深く66cmである。断面形は若干袋状を呈しており、その形状から貯蔵穴と考えられる。また、その位置からS2はH1に伴うものと考えたい。

なお、本土坑に伴う遺物は出土しなかった。

・S 3〔第49図〕

S 3は、標高68mの尾根上に位置し、H 1から西へ約11・5m離れた地点にある。上縁部は径130～140cmで、南側が若干くぼんでいるものの概ね円形である。底部は長径129cm、短径112cmでほぼ楕円形で、底面は平坦である。深さは東側が最も深く57cmである。断面形は若干袋状を呈しており、その形状から貯蔵穴と考えられる。

なお、本土坑に伴う遺物は出土しなかった。

・S 4〔第52図〕

S 4は、標高63・5mの尾根先端部の北側斜面に位置し、H 2から東へ約2m離れた地点にある。本土坑は斜面に掘り込まれているため、北東側はほとんど失われている。底部は径95～107cmで概ね円形で、底面は南西側から北東側に緩やかに傾斜している。深さは現状で南側が50cmである。斜面に位置しているため、断面形は明確にしにくいだが、残存部の規模から貯蔵穴と考えられる。また、その位置からS 4はH 2に伴うものと考えたい。

なお、本土坑に伴う遺物は出土しなかった。

・K 1～41〔第12～42・44～48・50・51図〕

本遺跡からは、尾根上を中心として41基の土壙墓を確認した。各土壙墓の計測値等については土壙墓計測表に譲ることとし、ここでは土壙墓の概要について述べてみたい。

まず、土壙墓の規模についてみると、土壙底面の長辺が75cmと小規模なものから271cmと大規模のものまでが存在しており、規模においては偏りが見られない。また、分布状況をみても比較的小規模なものが特定の場所に密集していたり、一定の規則性をもって配置されているとは考えられず、尾根上に分散するあり方をみせている。これらのことから、土壙墓の規模の相違は単に埋葬される者の体格の違いを示していると考えられるため、小規模なものは小児用の埋葬施設で大規模なものは大人用の埋葬施設であるといえよう。

次に、土壙底面の形状をみると、溝状の掘り込みがあるものとなないものに大別できる。土壙底面にある溝状の掘り込みは小口板や側板を埋め込むために造られたものと考えられ、溝状の掘り込みがある土壙では木棺による埋葬が行われたと推定される。なお、K 21では土壙内の土層観察の結果、木棺の痕跡を確認することができた。ところで、底面に溝状の掘り込みがある土壙墓は19基にのぼり、そのうち小口溝と側溝の両方あるものが4基、小口溝だけあるものが14基、側溝だけあるものが1基である。小口溝をもつ18基の土壙墓については、小口板を埋め込みそれを支えにして側板を立てるタイプの木棺の使用が考えられる。

ところで、先述のとおり41基の土壙墓は尾根上を中心に点在しているが、2つの土壙墓が重なりあっているものを3カ所確認した。いずれも土壙墓内の土層観察により、新旧関係を明らかにすることができた。まず、調査区の東側にあるK 8とK 9についてだがK 8がK 9を切っており、それより西へ約15m程離れた位置にあるK 19とK 20ではK 20がK 19を切っていた。また、調査区の中央部でP o 4の南側直近にあるK 35とK 36ではK 35がK 36を切っていたことを確認した。

さて、各土壙墓については底面の両短辺に大きな差が認められないなどから頭位は明確にできなかったが、土壙墓の主軸の方位のとり方から次の3つに分けることが可能であろう。

Iグループは北東方向に主軸をむけている土壙墓で12基ある。(K 9、K 10、K 12～K 18、K 20、K 35、K 36)

IIグループはIグループより北方向に主軸をむけている土壙墓で14基ある。(K 5、K 8、K 19、K 21～K 24、K 28、K 30、K 31、K 34、K 39～K 41)

Ⅲグループは北西ないし西方向に主軸をむけている土壙墓で15基ある。ただし、K11、K25、K28を除く12基（K1～K4、K6、K7、K26、K27、K32、K33、K37、K38）については、尾根上平坦面の両端からやや下った緩斜面に位置し、等高線に沿うようにかつ尾根筋に平行になるように築造されている。このことから、立地の関係上制約があったものと考えられる。したがって、これらの土壙墓は主軸を意図的に決めて築造したとは考えにくく、実質的にⅢグループに含まれるのは上述のなかでK11、K25、K28の3基である。

これらの3つのグループの分布についてみると以下のとおりである。

IグループはD1の東側にある尾根頂部周辺に比較的集まっているといえるが、調査区中央部付近からも検出した。IIグループは調査区の東端に2基みられるものの、その多くがD1の西側にまばらに存在している。また、n Iグループは尾根上にあるものがD1を挟んでひとつずつと調査区東側にひとつある。このほか、緩斜面のものは調査区東側と中央部にそれぞれ6基ずつあり、尾根筋の両側に見られる。以上のことから、IグループはD1の東側に、IIグループはD1の西側に多く存在し、Ⅲグループについては、調査区東端付近とD1に近い西側に多く見られるという大まかな傾向は見て取れるものの、この状況から明確な傾向を求めることは非常に困難であると思われる。

また、土壙墓の主軸の方位のとり方の違いを時期差と捉えた場合についてみると、切り合い関係にある2カ所から検討を加えることができ、以下のとおりとなる。

IグループとIIグループが重複するものとしては、K8とK9、K19とK20がある。まず、K8とK9ではK8がK9を切っているため、成立した順序はI→IIとなる。これに対し、K19とK20ではK20がK19を切っているため、II→Iの順序で営まれていることがわかる。このことから、本土壙墓群内でI・IIのグループの相違を時期差と捉えることには無理があるように思われる。ただし、調査区東端で互いに近接する位置にあるK5、K8～K13については、K8・K9の切り合い関係からK9～K13が先行し、K5、K8が後から営まれた可能性も考えられよう。

以上41基の土壙墓について主軸の方位のとり方による分類を試みたが、これによる明確な傾向を導き出すまでには至らなかった。

また、K6以外の土壙墓からは、遺物は出土しなかった。K6では、甕形土器（57）が北西側の掘り方上面に張りついたかたちで出土した。検出状況から、この土器は上方から流れ込んでこの位置に到ったものではなく、この位置に置かれたものと推定されることからK6に対して供献された土器と考えられる。

・P o 1〔第53図〕

P o 1は、標高73・3mの尾根頂部の南側にある緩斜面に位置する土器蓋土壙である。本遺構は南側でK2と接しているほか、近接する位置からK11、K12、P o 2が検出されている。掘り方については確認できなかったが、土器の割れ口が当たる範囲において地山上に粘質土が盛られており、その上に2個の大型の壺型土器（58、59）が頸部を合わせるようにして据え置かれていた。この盛土は土器蓋として使用した土器の安定を図るためのものと考えられる。

南西側にある壺形土器（58）は口縁部を取り外して胴部を縦に半折し、その片方を利用して土器蓋としている。取り外した口縁部は割られ、2つの土器の接合部を挟むようにして置かれていた。

北東側にある壺形土器（59）は口縁部を打ち欠いて土器蓋としている。土器蓋土壙の規模が長さ98cm、幅41cmであることから、P o 1は小児用のものと考えられる。

なお、棺内からは遺物は出土しなかった。

・P o 2〔第54図〕

P o 2は、標高73・6mの尾根上平坦面の南端にあり、P o 1の北東へ約80cm離れて位置している土器棺墓である。本遺構の西側直近にK10がある。掘り方は西側のみ遺存しており、幅40cm、奥

行き20cm、深さ13cmである。この掘り込み内において土器の底面が当たる範囲の地山上には、粘質土が盛られ、その上に口縁部を打ち欠かれた大型の壺型土器（60）が据え置かれており、底部は西方向にむいていた。また、部分的ではあるが土器片が棺身である土器の底面と盛土の間に詰められていた。このことは掘り込み内の盛土とともに棺身である土器の安定を図るために行われたものと考えられる。なお、壺形土器以外の土器が出土しておらず、蓋と考えられる土器は使用されなかった可能性もある。P o 2は棺身としている壺形土器の大きさから小児用のものと考えられる。

なお、棺内からは遺物は出土しなかった。

・P o 3〔第55図〕

P o 3は、標高73.9mの尾根上に位置する土器棺墓である。本遺構は東側でK 20と接している。掘り方は上縁部が長径45cm、短径35cmのほぼ楕円形で、底部が長径35cm、短径30cmでほぼ五角形である。深さは北側が最大で4cmである。この掘り方内に大型の壺形土器（61）が据え置かれ、口は南西方向にむいていた。この土器の頸部が一部欠損していることや検出状況から、まず口縁部を打ち欠いて外し、胴部を置いた後外した口縁部を頸部付近にはめ込んだ可能性が高いと思われる。なお、壺形土器以外の土器が出土しておらず、蓋と考えられる土器は使用されなかった可能性もある。P o 3は棺身としている壺形土器の大きさから小児用のものと考えられる。

なお、棺内からは遺物は出土しなかった。

・P o 4〔第56図〕

P o 4は、標高71.1mの尾根上に位置する土器蓋土壙である。本遺構は北側でK 36と南側でK 37と切り合っており、南側は欠損している。現状では、掘り方は上端部で幅59cm、奥行き65cmのほぼ方形で、底部は幅26cm、奥行き50cmで南西側がくぼんではいるもののほぼ方形である。なお、底面はほぼ平坦である。深さは東側が最大で31cm、西側が20cmである。この掘り方内に大型の壺形土器（62）を割った破片を重ね合わせて土器蓋とし、遺体を覆っていたものと思われる。口縁部は割られ、掘り方内中央部付近にその一部が置かれており、その上に底部の残る土器片がかぶせてあり、はずれにくくしてあった。これにより、土器蓋の安定をはかったものと考えられる。土器蓋土壙の規模が長さ57cm、幅36cmであることから、P o 4は小児用のものと考えられる。

なお、棺内からは遺物は出土しなかった。

・第1土器溜り〔第57図〕

第1土器溜りは、標高73.5mの尾根上平坦面に位置し、近接してK 24、K 25がある。この土器溜りは1.0m×0.5mの範囲において、最大15cm×10cmから最小2cm×2cmまでの土器片が不規則に積み重なって出土した。これらの土器は器種も多様で10個体を越えていたが、ほとんどが細片のため、図示できたのはわずか壺形土器（63、64）2点であった。この土器溜りは、若干の掘り込みは見られるものの尾根上平坦面に位置しており、しかもこの周辺からはほとんど土器が出土していない。さらに、検出状況においても、土器片が不規則に積み重なっているうえ、細かな土器片も多くしかも底部のみあるいは胴部のみの土器片も見られた。これらのことから判断して、何らかの目的で使・用した後、人為的に細かく割られてここに投棄されたものと思われる。

・第2土器溜り〔第58図〕

第2土器溜りは、標高70.0mの尾根北側の斜面に位置し、D 1およびX 1の北東方向にある。この土器溜りから検出した土器は、壺形土器（45）のみである。この壺形土器は、斜面の途中でしかも原形を留めたかたちで出土していることから、尾根上平坦面から転落したものと思われる。

・第3土器溜り〔第59図〕

第3土器溜りは、標高67.0mの尾根先端部南西側の斜面に位置している。本遺構のある斜面下で標

高62.0mの位置からは、T1を確認している。本遺構からは、甕形土器・鉢形土器をはじめとして11個体の土器（46、47、48、49、50、51、52、53、54、55、56）が一括して出土した。しかも、それらの土器の多くが口縁部を上に向けて据え置かれた状態で、かつほぼ原形を復元できるかたちで出土した。このことから、出土した11個の土器はほぼ原位置を保っていた可能性が高いといえる。また、土器の外面に煤のついたものもいくつか見られることから、日常的に使用された土器をここに置いていたと考えられる。ただし、本遺構の性格については、明確にしえなかった。

表1 平尾遺跡土壙墓計測表

[illegible]

IV 遺 物

本遺跡から出土した遺物は、全て弥生後期の特徴を示す土器ばかりであり、その他の鉄器・石器等の遺物は、全く検出することはできなかった。また、土器は、概ねH 1以西の集落関連遺構に伴うものが多く、それも斜面へ流出した状態で検出したものがほとんどであった。このため遺構に明確に伴うものは60点余りであり、セット関係も明確ではない。各出土土器の観察結果については出土土器観察表に譲ることとして、本稿では集落関連遺構から満遍なく出土した甕について少し詳しく述べてみたい。

本遺跡出土の甕と各遺構との関係は次の表のとおりである。

右に示したとおり、甕は26点に及び、その器形、調整等から大きく二つのグループに分類することができる。Aグループは、H 2、T 1、T 2及び第3土器溜りから出土した一群のものであり、Bグループはそれ以外の出土のものである。

遺構名称	出土土器番号
H 1	1、2
H 2	6、7
T 1	18、19、20、21、22、23、24
T 2	12、13
T 3	27、28、29、30、31、35、37
土器溜り	46、47、49、50、51、52

Aグループの甕の特徴は、総じて口縁部は「くの字」状に外反するものが多く、端部は強くつまむことによって上下方向にやや肥厚し、2条ないし3条の凹線をもつもの、または、凹線をもたず端部を凹ませるものが殆どである。中には22のように外反の角度の緩いものもあるが、やはり端部はやや凹んでいる。さらに、口縁部と胴部の接合は、屈曲点内側に接合用の粘土を付けるためか厚手になり、20、22、46、47、50のように比較的平たい面を一段有しているものもある。外面肩部の文様は殆どものに屈曲点直下で見られるが、52のようにやや下がった所で見られるものもある。胴部は総じて張りが弱く、胴部最大径も比較的高い位置にあるものが多い。これらの特徴は、上深川Ⅰ式の特徴に類似した傾向をもっているものの、口縁端部の凹線の消滅や内側のヘラ削りがやや高い位置まで及んでいる点、肩部文様が屈曲点直下にまで及んでいるなど新しい傾向を示している。

Bグループの甕の特徴は、Aグループ同様口縁部は「くの字」状に外反するものの、屈曲点内側の厚みがやや減じ、さらに端部を肥厚させるものが見られず平坦に収めるなど、あたかも胴部から口縁部にかけの厚みを揃えようとする意図があるかのように見受けられる。また、胴部の張りはAグループに比較してやや張りが強く、胴部最大径もやや下がった位置に見られ、丸胴化の傾向が進んでいることを窺わせる。底部は31のようにほとんど丸底に近いものも見られる。これらの特徴は、次の上深川Ⅱ式の特徴である、口縁端部の処理技法や胴部の形態等につながるものと考えられ、Aグループとの間に時間的経過を想起させるものである。

以上の点から、本遺跡出土の甕については上深川Ⅱ式に比定されるものであり、さらに、少なくとも本遺跡出土の甕についてみれば2時期に分類することが可能であり、その際、第3土器溜りの一括資料をもって上深川Ⅱ式（古）と考えることができよう。なお、甕以外の遺物について見てみると、壺についてはH 1で1点出土するのみであり、鉢についてもA・B両グループの間に大きな差異が認められないなど、問題が残されていることを付け加えておく必要がある。

表2 平尾遺跡出土土器観察表

No.	出土位置	器種	法量(cm)	器形	調整・成形	備考
1	H1	甕	口径16. 6	口縁部はゆるく外反し、端部は平たく収める。胴部の張りは弱い。	外面；タテ方向のハケ目肩部に櫛歯状工具による押引きあり 内面；口縁部ヨコ方向のハケ目、頸部以下ヘラ削り	胎土；長石・石英砂粒を含む。 焼成；良好色；灰褐色胴部下半にスス付着
2	H1	甕	口径16. 8 胴部最大径17. 2	口縁部はゆるく外反し、端部は平たく収める。胴部の張りは弱く、鋭角的に底部に至る。	外面；タテ方向のハケ目肩部に櫛歯状工具による刺突あり 内面；口縁部はヨコ方向のハケ目、頸部以下はタテ方向のヘラ削り	胎土；大粒の長石・石英砂粒を含む。 焼成；良好色；淡黄褐色
3	H1	壺	口径18. 0	口縁部は「くの字」状に外反し、端部に至って上方にやや肥厚する。	外面；ヨコ方向のハケ目後ナデ肩部に櫛歯状工具による刺突あり 内面；ナデ	胎土；長石・石英砂粒を含む。 焼成；良好色；淡黄褐色
4	H1	長頸壺？	胴部最大径16. 0	胴部は、やや扁平な球状を呈し、頸部は内傾しながら上方に延びる。	外面；頸部ヘラ磨き、以下はタテ方向のハケ目後ヘラ磨き 内面；ナデ	胎土；金雲母・長石・石英細砂粒を含む。 焼成；良好色；外朱塗り内黄褐色
5	H1	高坏？	口径9. 6	平らに収めた口縁端部から、やや胴部が張り、丸く下方に向かう。高坏の坏部を想定させる。	外面；ヘラ磨き 内面；ナナメ方向のハケ目後ナデ	胎土；金雲母・長石・石英細砂粒を含む。 焼成；堅緻色；朱塗り
6	H2	甕	口径12. 4	口縁部は「くの字」状に外反し、端部に至って上下方向にやや肥厚しながら端部中央を凹ませる。	外面；胴部ヨコ及びナナメ方向のハケ目後ナデ 内面；頸部以下ヘラ削り	胎土；大粒の長石・石英砂粒を含む。 焼成；軟調色；黄褐色
7	H2	甕	口径17. 0	口縁部は「くの字」状に外反し、端部は器厚を減じつつ平たく収める。胴部は頸部以下張りが弱く、底部に向かって直線的に延びる。	外面；ナデ肩部に櫛歯状工具による刺突あり 内面；頸部以下ヘラ削り	胎土；金雲母・長石・石英細砂粒を含む。 焼成；良好色；外黄褐色内赤褐色
8	H2	鉢	口径16. 4	胴部からやや外反気味に立ち上がり、口縁部に至って外方に再度反る。端部はやや上方に拡張される。	外面；胴部タテ方向のハケ目 内面；口縁部ヨコ方向のハケ目、胴部ヘラ削り	胎土；長石・石英砂粒を含む。 焼成；良好色；赤褐色
9	H2	不明	底径2. 4	凹底を呈し、やや直線的に斜め上方に向かって立ち上がる。	外面；タテ方向のハケ目内面；ヘラ削り	胎土；長石・石英砂粒を含む。 焼成；軟調色；外淡赤褐色内黄褐色スス付着
10	H2	高坏？	口径11. 0	内湾気味に立ち上がる胴部は口縁部に至って器厚を減じつつ内傾して丸く収まる。	外面；ヨコ方向のヘラ磨き 内面；ヘラ削り後ナデ	胎土；金雲母・長石・石英細砂粒を含む。 焼成；堅緻色；外朱塗り内赤色顔料が僅かに残る
11	H2	脚付鉢	口径13. 2 器高11. 7 底径6. 2	内湾しながら立ち上がる胴部は、口縁部に至って器厚を増しながら外方に屈曲する。脚部は小さく、底部は凹底である。	外面；胴部タテ方向のハケ目後ナデ脚部に指頭による調整内面；ヘラ削り	胎土；長石・石英砂粒を含む。 焼成；良好色；赤褐色

No.	出土位置	器種	法量(cm)	器形	調整・成形	備考
12	T2	甕	口径13. 4	口縁部は「くの字」状に外反し、端部は上下にやや肥厚し端部中央を凹ませる。胴部の張りは弱い。	外面；ヨコ及びナナメのハケ自後ナデ 内面；口縁ハケ目後ナデ、頸部以下ヘラ削り肩部にヘラ状工具による刻み目あり	胎土；長石・石英砂粒を含む。 焼成；良好色；赤褐色体部外面全体にスス付着
13	T2	甕	口径16. 0 胴部最大径19. 0	口縁部は「くの字」状に外反し、端部は上下にやや肥厚し端部中央を凹ませる。胴部の張りは弱い。	外面；胴部ヨコ及びナナメ方向のハケ目後ナデ肩部にヘラ状工具による刻み目あり 内面；口縁部ヨコ方向のハケ目、頸部以下ヘラ削り	胎土；長石・石英砂粒を含む。 焼成；軟調色；赤褐色
14	T2	鉢	口径14. 0 器高8. 4 底径7. 4	平底の底部から直線的に斜め上方に立ち上がる胴部は、口縁部に至って器厚を増しつつやや外傾する。口縁部内面は凹状を呈する。	外面；胴部タテ方向のハケ目後ヘラナデ 内面；上半ヨコ方向のヘラ削り下半タテ方向のヘラ削り	胎土；長石・石英砂粒を含む。 焼成；良好色；外黄褐色内淡赤褐色
15	T2	不明	底径6. 0	胴部は、平底の底部からわずかに丸みをもって斜め上方に立ち上がる。	外面；タテ方向のハケ目後ヘラ磨き 内面；ヘラ削り	胎土；大粒の長石・石英砂粒を含む。 焼成；良好色；赤褐色
16	T2	不明	底径7. 4	胴部は、平底の底部からやや外方に反りながら斜め上方に立ち上がる。	外面；タテ方向のハケ自後ナデ 内面；ヘラ削り	胎土；長石・石英砂粒を含む。 焼成；良好色；外淡黄褐色内灰褐色
17	T2	手づくね	口径4. 8 器高7. 3 底径2. 0	肉厚の胴部は丸く、口縁部に至って内傾し、端部は丸く収める。	外面；指頭痕内面；ヘラ削り	胎土；長石・石英砂粒を含む。 焼成；良好色；外赤褐色内黒灰色でスス付着
18	T1	甕	口径10. 0 胴部最大径10. 5	ほとんど外反しない口縁部は端部に至って器厚を減じつつ丸く収める。胴部は張りが弱く底部へ至る。	外面；ヘラ磨き 内面；頸部以下ヘラ削り	胎土；長石・石英砂粒を含む。 焼成；良好色；外黒褐色内暗褐色外面全体にスス付着
19	T1	甕	口径15. 4	口縁部は「くの字」状に外反し、端部は平たく収める。	外面；タテ方向のハケ目後ナデ肩部に櫛歯状工具による刺突あり 内面；頸部以下ヘラ削り	胎土；長石・石英砂粒を含む。 焼成；良好色；明赤褐色
20	T1	甕	口径17. 6	口縁部は「くの字」状に外反し、端部は上下にやや肥厚し3条の凹線をもつ。	外面；肩部に櫛歯状工具による2段の刺突あり 内面；不明	胎土；長石・石英砂粒を含む。 焼成；良好色；淡赤褐色
21	T1	甕	口径17. 4	口縁部は「くの字」状に外反し、端部は上下にやや肥厚し端部中央を凹ませる。胴部はやや張り、丸みがある。	外面；タテ方向のハケ目肩部に櫛歯状工具による刺突あり 内面；頸部以下ヘラ削り	胎土；大粒の長石・石英砂粒を含む。 焼成；軟調色；淡赤褐色

No.	出土位置	器種	法量(cm)	器形	調整・成形	備考
22	T1	甕	口径17. 6	口縁部の外反は甘く、器厚は厚い。端部は上方にやや肥厚しながら平たくおさめる。胴部の張りは弱く、底部に向かって直線的に延びる。	外面；ナデ 内面；頸部以下ヘラ削り	胎土；長石・石英砂粒を含む。 焼成；良好色；外淡黄褐色内黄褐色
23	T1	甕	口径16・0	口縁部は「くの字」状に外反し、端部は平たく収める。胴部の張りは弱く、内湾しながら下方に延びる。	外面；不明 内面；頸部以下ヘラ削り	胎土；長石・石英砂粒を含む。 焼成；軟調色；外乳褐色内淡黄褐色
24	T1	甕	口径11. 8 胴部最大径11. 8	口縁部は「くの字」状に外反し、端部は平たく収める。胴部は丸みを帯び球状を呈する。	外面；タテ方向のハケ目後ヘラ磨き内面；；頸部以下ヘラ削り	胎土；大粒の長石・石英砂粒を含む。 焼成；良好色；黄褐色
25	T1	不明	底径4. 6	胴部は凸底の底部からほぼ直線的に斜め上方に立ち上がる。	外面；タテ方向のハケ目及びヘラ削り内面；ヘラ削り	胎土；長石・石英細砂粒を含む。 焼成；良好色；外淡褐色内灰色
26	T1	不明	不明	凹底の底部	外面；ヘラ磨き内面；ヘラ削り後ヘラナデ	胎土；大粒の長石・石英砂粒を含む。 焼成；良好色；淡黄褐色
27	T3	甕	口径12. 4 胴部最大径14. 7	口縁部は「くの字」状に外反し、端部は平たく収める。胴部は丸みを帯び、球状を呈する。	外面；タテ方向のハケ目後ナデ内面；頸部以下ヘラ削り	胎土；長石・石英細砂粒を含む。 焼成；良好色；淡黄褐色
28	T3	甕	口径11. 0 胴部最大径12. 0器高11. 4底径1. 5	口縁部は「くの字」状に外反し、端部は丸く収める。胴部は丸みを帯び、球状を呈し、小さい凹底に至る。	外面；タテ方向のハケ目及びヨコ方向のハケ目後ナデ 肩部に櫛歯状工具による刺突あり内面；頸部以下ヘラ削り	胎土；長石・石英細砂粒を含む。 焼成；良好色；淡黄褐色
29	T3	甕	口径18. 6	口縁部は「くの字」状に外反し、端部は平たく収める。胴部はやや強い張りをもつ。	外面；ナデ肩部に櫛歯状工具による押引きあり内面； 頸部以下ヘラ削り	胎土；長石・石英砂粒を含む。 焼成；良好色；淡赤褐色
30	T3	甕	口径16. 2 胴部最大径18. 2	口縁部は「くの字」状に外反し、端部は平たく収める。胴部は張りが弱く、倒卵型を呈する。	外面；タテ方向のハケ目肩部に櫛歯状工具による刺突あり内面；頸部以下ヘラ削り	胎土；大粒の長石・石英砂粒を含む。 焼成；軟調色；黄褐色外面全体にスス付着
31	T3	甕	口径16. 4 胴部最大径16.8	口縁部は「くの字」状に外反し、端部は平たく収める。胴部は張りが弱く倒卵型を呈し丸底の底部に至る。	外面；タテ方向のハケ目及びヨコ方向のハケ目 内面；頸部以下ヘラ削り	胎土；長石・石英砂粒を含む。 焼成；良好色；外淡赤褐色 内淡黄褐色 胴部外面下半にスス付着

No.	出土位置	器種	法量(cm)	器形	調整・成形	備考
32	T3	不明	底径3. 0	凹底の底部である。	外面；タテ方向のハケ目 内面；ヘラ削り	胎土；長石・石英砂粒を含む。 焼成；良好色；外赤褐色 内黄褐色
33	T3	鉢	口径12. 6 器高8. 3 底径7. 0	平底の底部から僅かに内湾しながら斜め上方に立ち上がる。胴部は、口縁部に至って僅かに器厚を減じ、平たく収める。	外面；ヘラ削り後タテ方向のハケ目 内面；ヘラ削り	胎土；大粒の長石・石英砂粒を含む。 焼成；良好色；外淡灰褐色 内赤褐色
34	T3	鉢	口径18. 0 器高n. 4 底径5. 5	平底の底部から僅かに内湾しながら斜め上方に立ち上がる。胴部は、口縁部に至って僅かに外傾し、端部を肥厚させながら丸く収める。	外面；タテ方向のハケ目及びナナメ方向のハケ目 内面；胴下半以下ヘラ削り	胎土；長石・石英砂粒を含む。 焼成；良好色；淡赤褐色
35	T3	甕	口径16. 6 胴部最大径24. 5	口縁部は「くの字」状に外反し、端部は平たく収める。球形を呈し、平底の底部へ至る。	外面；ナデ 内面；頸部以下ヘラ削り	胎土；長石・英砂粒を含む。 焼成；良好色；外赤褐色 内淡赤褐色
36	T3	脚付鉢	口径11. 0 器高8・3 底径7. 4	ほぼ直線的に立ち上がる胴部は、口縁部に至って肥厚し内側上力に拡張される。脚は短く、僅かにくぼむ。	外面；タテ方向のハケ目脚部に指頭圧痕 内面；ヘラ削り	胎土；長石・石英砂粒を含む。 焼成；良好色；黄褐色
37	T3	甕	口径19. 4 胴部最大径24. 8 器高35. 0 底径6. 7	口縁部は「くの字」状に外反し、端部は平たく収める。胴部の張りは弱く、腰高の倒卵型を呈し、平底の底部へ至る。	外面；胴上半タテ方向のハケ目及びナナメ方向のハケ目後ナデ肩部にヘラ状工具による刻み目あり 内面；頸部以下ヘラ削り	胎土；大粒の長石・石英砂粒を含む。 焼成；軟調色；黄褐色 胴下半にスス付着
38	T3	甕	胴部最大径14. 9 底径4. 8	胴部の張りは弱く、倒卵型を呈し、平底の底部へ至る。	外面；胴上半ヨコ方向のハケ目、胴下半タテ方向のハケ目後ナデ肩部にヘラ状工具による刻み目あり 内面；頸部以下ヘラ削り	胎土；長石・石英砂粒を含む。 焼成；軟調色；淡黄褐色
39	T3～H2 間の斜面埋土	不明	口径25. 8	ラッパ状に開く口縁部は、僅かに内湾しながら端部に至り平たく収める。	外面；タテ方向のハケ目及びナナメ方向のハケ目 内面；ヨコ方向のハケ目	胎土；大粒の長石・石英砂粒を含む。 焼成；良好色；外赤褐色内黄褐色
40	T3～H2 間の斜面埋土	甕形土器	底径8. 8	「ハの字」状に開く上半部は欠失している。下部に貼り付の突帯が巡る。	外面；突帯以上タテ方向のハケ目 内面；突帯以上ヘラ削り、突帯内側ナデ、突帯以下ヨコ方向のハケ目	胎土；長石・石英砂粒を含む。 焼成；良好色；褐色
41	T3～H2 間の斜面埋土	高坏？	底径9. 4	脚柱は短く、脚端部は大きく開く。	外面；ヘラ磨き 内面；不明坏部ヘラ削りよるかきあげ頸部のタテ方向のハケ目は口縁部接合時の貼り付粘土調整のため	胎土；長石・石英砂粒を含む。 焼成；良好色；外淡赤褐色脚内灰色 内黄褐色

No.	出土位置	器種	法量(cm)	器形	調整・成形	備考
42	H2下斜面埋土	高坏	口径22. 4 器高18. 0 底径11. 6	口縁部は大きく外反し、端部は丸く収める。坏部外面の段はやや不明瞭である。脚部の開きは小さく、端部は平たく収める。脚柱部に3ヶ所の円孔が内側から穿たれている。坏部と脚柱部の接合は差込む。	外面；坏部上半タテ方向のハケ目後ナデ、坏部下半タテ方向のハケ目及びナナメ方向のハケ目後ナデ、脚部ヘラ磨き 内面；坏部タテ方向のハケ目後ナデ、脚部ヘラ削り	胎土；金雲母・長石・石英細砂粒を含む。 焼成；良好色；赤褐色
43	D2	甕	口径16. 0	口縁部は「くの字」状に外反し、端部はやや上方に肥厚しながら平たく収める。胴部の張りは弱い。	外面；ナデ 内面；頸部以下ヘラ削り	胎土；長石・石英砂粒を含む。 焼成；良好色；明赤褐色
44	K16周辺のピット	甕	口径23. 4	口縁部は「くの字」状に外反し、端部は平たく収める。	外面；ヨコ方向のハケ目後ナデ口縁端部に1段肩部に2段のヘラ状工具による刻み目。肩部の刻みは上段が先行 内面；口縁部ヘラナデ頸部以下ヘラ削り	胎土；長石・石英砂粒を含む。 焼成；良好色；黄褐色
45	第2土器溜り	甕	口径19. 8 胴部最大径27. 0 器高30. 6 底径6. 0	口縁部は「くの字」状に外反し、端部は平たく収める。胴部は丸みを帯び、球状を呈し平底の底部へ至る。	外面；頸部タテ方向のハケ目胴中央叩き目、胴下半タテ方向のハケ目 内面；頸部以下胴上半ヨコ方向のハケ目、下半指に	胎土；大粒の長石・石英砂粒を含む。 焼成；良好色；外褐色
46	第3土器溜り	甕	口径16. 7 胴部最大径19. 0 器高21. 5 底径3. 3	口縁部は「くの字」状に外反し、端部は平たく収める。胴部の張りは弱いものの、全体に球状を呈する。底部は凹底である。	外面；胴上半タテ方向のハケ目後ナデ、胴下半タテ方向のハケ目後ヘラ磨き肩部にヘラ状工具による刻み目あり 内面；頸部以下ヘラ削り	胎土；大粒の長石・石英砂粒を含む。 焼成；良好色；淡黄褐色外面全体にスス付着
47	第3土器溜り	甕	口径15. 9 胴部最大径18. 2 器高21. 4 底径5. 4	口縁部は「くの字」状に外反し、端部はやや肥厚し2条の凹線を巡らす。胴部の張りは弱いものの全体に球状を呈する。底部は平底。	外面；ヘラ削り後タテ方向のハケ目後ナデ肩部にヘラ状工具による刻み目あり 内面；頸部以下ヘラ削り	胎土；長石・石英砂粒を含む。 焼成；良好色；淡赤褐色
48	第3土器溜り	無頸壺	口径12. 8 胴部最大径20. 3 器高18. 7 底径7. 4	ほぼ球状を呈する胴部は口縁部に至ってやや外方に反り、端部を丸く収める。端部外面に1条の凹線が巡る。底部は凹底である。	外面；タテ方向のハケ目後ナデ、底部粘土貼り付後ナデ 内面；ヘラ削り、底部指頭痕	胎土；長石・石英砂粒を含む。 焼成；良好色；淡赤褐色 胴下半にスス付着。
49	第3土器溜り	甕	口径18. 8 胴部最大径19. 8 器高25. 0 底径4. 5	口縁部は「くの字」状に外反し、端部はやや肥厚し2条の凹線を巡らす。胴部は腰高の倒卵型を呈し、底部は平底である。	外面；タテ方向のハケ目及びナナメ方向のハケ目肩部にヘラ状工具による刻み目あり 内面；頸部以下ヘラ削り	胎土；大粒の長石・石英砂粒を含む。 焼成；軟調色；淡赤褐色 胴部外面全体にスス付着。内面も熱による荒れが顕著

No.	出土位置	器種	法量(cm)	器形	調整・成形	備考
50	第3土器溜り	甕	口径21.6 胴部最大径23.4 器高24.3 底径5.6	口縁部は「くの字」状に外反し、端部はやや肥厚し2条の凹線を巡らす。胴部は腰高で丸みを帯び、底部は平底である。	外面；胴上半ヨコ方向のハケ目及びナナメ方向のハケ目後ナデ、胴下半タテ方向のハケ目後ナデ肩部にヘラ状工具による刻み目あり 内面；頸部以下ヘラ削り	胎土；大粒の長石・石英砂粒を含む。 焼成；良好色；淡赤褐色 胴部外面及び底部内面にスス付着
51	第3土器溜り	甕	口径13.0 胴部最大径16.5	口縁部は「くの字」状に外反し、端部は平たく収める。胴部の張りは弱い。	外面；タテ方向のハケ目後ナデ 内面；頸部以下ヘラ削り	胎土；長石・石英砂粒を含む 焼成；良好色；淡赤褐色 胴部外面片側にスス付着
52	第3土器溜り	甕	口径18.6 胴部最大径20.7 器高25.5 底径5.1	口縁部は「くの字」状に外反し、端部はやや肥厚し3条の凹線を巡らす。胴部は腰高の倒卵型を呈す。底部は平底である。	外面；胴上半タテ方向のハケ目及びナナメ方向のハケ目、胴下半ナナメ方向のハケ目後ナデ 内面；頸部以下ヘラ削り	胎土；大粒の長石・石英砂粒を含む。 焼成；良好色；明赤褐色 外面全体にスス付着
53	第3土器溜り	鉢	口径17.7 器高13.2 底径7.2	口縁部は「くの字」状に外反し、端部はやや肥厚し2条の凹線を巡らす。胴部は内湾しながら平底の底部へ至る。	外面；胴上半ナナメ方向のハケ目、胴下半タテ方向のハケ目後ヘラ磨き 内面；胴上半ヘラ削り、胴下半ナデ	胎土；大粒の長石・石英砂粒を含む。 焼成；良好色；赤褐色 底部外面にスス付着
54	第3土器溜り	鉢	口径17.2 器高12.8 底径6.4	口縁部は鋭く外反し、端部はやや肥厚する。胴部は半球状を呈し、平底の底部へ至る。	外面；ナデ 内面；胴部ヘラ削り、底部ナデ	胎土；長石・石英砂粒を含む。 焼成；良好色；淡黄褐色
55	第3土器溜り	脚付鉢	口径14.0 器高11.2 底径9.6	短い脚部から斜め上方に直線的に立ち上がる胴部は、口縁部に至って器高を増し、丸く収めている。	外面；口縁部ナナメ方向のハケ目後ナデ、以下タテ方向のハケ目後ナデ胴部に指頭圧痕 内面；ヘラ削り、脚内面ハケ目	胎土；大粒の長石・石英砂粒を含む。 焼成；良好色；明赤褐色
56	第3土器溜り	不明	底径4.6	胴部は平底の底部から内湾気味に斜め上方に立ち上がる。	外面；タテ方向のハケ目及びナナメ方向のハケ目後ナデ 内面；ヘラ削り、底部ナデ	胎土；長石・石英砂粒を含む。 焼成；良好色；赤褐色内面に炭化物付着
57	K6	壺	口径18.2	「くの字」状に外反する口縁部に、端部を丸く収め、外上方に延びる擬口縁を載せるように接合した二重口縁である。	外面；不明 内面；頸部以下ヘラ削り	胎土；長石・石英砂粒を含む。 焼成；軟調色；乳灰色
58	Po1	壺	口径18.4 胴部最大径38.4 器高55.2 底径8.7	「くの字」状に外反する口縁部に端部を平たく収め、内傾気味に上方に延びる擬口縁を載せるように接合した二重口縁で、倒卵型の胴部にやや凸気味の底部がつく。頸部に斜格子の刻目をもつ貼り付突帯が巡る。	外面；擬口縁部5条3段の波状文頸部～肩部はタテ方向のハケ目、胴中央ナナメ方向のハケ目、胴下半タテ方向のハケ目 内面；擬口縁及び口縁ヨコ方向のハケ目、以下ナナメ方向のハケ目 内面に粘土紐接合のための指頭痕を顕著に残す。	胎土；大粒の長石・石英砂粒を含む。 焼成；良好色；赤褐色

No.	出土位置	器種	法量(cm)	器形	調整・成形	備考
59	Po1	壺	胴部最大径37. 2 底径7. 8	球形に近い胴部にやや凸気味の小さい底部がつく。	外面；上半タテ方向のハケ目後ヘラナデ、中央ナナメ方向のハケ目、下半ヘラ削り後ナデ 内面；磨減により不明	胎土；大粒の長石・石英砂粒を含む。 焼成；軟調色；黄褐色
60	Po2	壺	胴部最大径32. 2 底径6. 7	倒卵型の胴部に小さい平底の底部がつく。	外面；上半タテ方向のハケ目後ヘラナデ、中央タテ方向のハケ目後ナデ、下半タテ方向のハケ目自後ヘラ磨き 内面；ナナメ方向のハケ目後ナデ 内面に粘土紐接合のための指頭痕を頭著に残す。	胎土；長石・石英砂粒を含む。 焼成；良好色；赤褐色
61	Po3	壺	口径12. 3 胴部最大径35. 7 器高46. 8 底径6. 6	「くの字」状に外反する口縁部に、端部を平く収め、外反気味に立ち上がる擬口縁を接合した二重口縁で、球形に近い胴部に平底の底部がつく。頸部に斜格子の刻自をもつ貼り付突帯が巡る。	外面；擬口縁ヨコ方向のハケ目後4条の波状文口縁部ヨコ方向のハケ目、胴部ヨコ方向のハケ目及びナナメ方向のハケ目 内面；擬口縁ヨコ方向のハケ目、口縁ヨコ方向のハケ目及びナナメ方向のハケ目、胴上半ナナメ方向のハケ目、下半タテ方向のハケ目自	胎土；長石・石英砂粒を含む。 焼成；良好色；赤褐色
62	Po4	壺	口径14. 6 胴部最大径33. 8 器高37. 3 底径5. 9	「くの字」状に外反する口縁部に、端部を平たく収め、内傾しながら立ち上がる擬口縁を載せるように接合した二重口縁で、球形に近い胴部に丸底に近い凸底の底部がつく。頸部に斜格子の刻目をもつ貼り付突帯が巡る。	外面；擬口縁2条4段の波状文口縁タテ方向のハケ目後ナデ、胴上反タテ方向のハケ目後ナデ、中央ナナメ方向のハケ目後ナデ、下半タテ方向のハケ目後ナデ 内面；口縁タテ方向のハケ目及びナナメ方向のハケ目、胴上半ナナメ方向のハケ目、下半タテ方向のハケ目	胎土；長石・石英砂粒を含む。 焼成；良好色；赤褐色
63	第1土器溜り	壺	胴部最大径37. 5 底径9. 0	口縁部は「くの字」状に外反し、端部は二重口縁を呈することが推定される。胴部は腰高の倒卵型を呈し、平底の底部へ至る。頸部には、上下2段に櫛歯状工具による押圧の施された貼り付突帯が巡り、さらにその下方に4ヶ所のタテ方向の短い突起がつく。	外面；全面ヘラ磨き 内面；口縁ヘラ磨き 頸部以下ヘラ削り	胎土；長石・石英砂粒を含む。 焼成；良好色；赤褐色
64	第1土器溜り	壺	口径17. 2 胴部最大径32. 1 器高45. 6 底径8. 4	「くの字」状に外反する口縁部に、端部を丸く収め、内傾しながら立ち上がる擬口縁を載せるように接合した二重口縁で、やや腰高に感じられる倒卵型の胴部に平底の底部がつく。頸部に斜格子の刻目をもつ貼り付突帯が巡る。	外面；肩部タテ方向のハケ目胴上半叩き目、胴下半タテ方向のハケ目及びナナメ方向のハケ目 内面；口縁ナナメ方向のハケ目、胴ナナメ方向のハケ目	胎土；長石・石英砂粒を含む。 焼成；良好色；橙色

V ま と め

1 平尾遺跡の年代観について

平尾遺跡から検出した遺構は、大きく分けて集落関係遺構と墳墓関係遺構の2種類であるが、これらの年代観について若干の考察を加えておく。先ず、集落関連遺構について見てみると、既に遺物の項で述べたように各遺構出土の土器のうち甕について見てみると、大きくは上深川Ⅱ式の範疇に入るものである。さらに、これらの土器は（新）と（古）に細分が可能であることから、少なくとも本遺跡の集落関連遺構は弥生後期中葉でも比較的古い時期に遺跡南側の利用がはじまり、やがて第2号住居・西側テラスと営まれ、北側テラス・第1号住居へと利用の区域が変化し、後期後葉にかけて集落としての利用は終わるものとみられる。

一方、墳墓関係遺構については、出土した弥生土器が壺棺墓の5点と第1土器溜りの2点の大型の壺とK6の供献土器に限られることからその年代観については明確にしがたいものの、これらの遺物について少し詳しく見てみたい。K6出土の甕57と類似する甕は、小林A地点遺跡⁽¹⁾テラス状遺構ほか大明地遺跡⁽²⁾SB16床面、矢ヶ谷遺跡⁽³⁾第1号住居、同第1号土壇などから出土しているものであり、山陰系の土器として指摘されているものである。またこれに伴うものは、小林A地点遺跡の場合、本遺跡出土土器のうちのBグループに分類されるものに類似しているが、大明地遺跡SB16、矢ヶ谷遺跡第1号住居、同第1号土壇の例についてはそれより新しい時期の土器を伴っている。以上を総合すると本遺跡出土の土器57については上深川Ⅱ式（新）ないし上深川Ⅲ式（古）段階に位置づけられよう。

次に、大型の壺7点について考えてみたい。これらの壺は総じて張りの強い倒卵型ないしは球形に近い胴部をもち、口縁部を欠失しているもの3点の他はいずれも二重口縁をもつものである。さらに、59・60を除いて頸部に斜格子の刻みなし櫛歯状工具による刺突をもつ貼付け突帯をもっている。59・60についても頸部以上を欠失しているため定かではないが、これに類する貼付け突帯をもっている可能性が強いものである。また、底部は総じて薄作りで明確な底部を形成するものはほとんど見られず、59・62のように丸底に近いものまでみられる。

ところで、広島湾周辺遺跡出土のこれら大型壺のうち、二重口縁をもちかつ頸部に貼付け突帯を巡らすものについては大明地遺跡⁽²⁾SK4出土の大型壺が上深川Ⅰ式の土器を伴ったものとして現在までのところ最も古いものと考えられる。しかし、この土器の二重口縁立ち上がり部について見ると、その発達は不十分で突帯も刻み目のついた断面三角形と、平尾遺跡出土のものに比較して定型化していない観がある。これらの次の段階と考えられるものには、浄安寺遺跡⁽⁴⁾SK10、稗畑遺跡⁽⁵⁾第7号土器棺墓出土のものがあり、上深川Ⅱ式のそれも比較的新しいと考えられる時期に比定できるものがある。なお、浄安寺遺跡SK10出土の突帯は頸部屈曲点より肩部より巡らされているものである。次に、下限については、上深川Ⅲ式（古）段階の特徴を持つ遺物が共伴する寺迫遺跡⁽⁶⁾第1号土器棺墓出土の大型壺の例や西願寺C地点遺跡⁽⁷⁾出土の二重口縁の壺等の例がある。また、住居跡からの出土ではあるが、岡谷遺跡⁽⁸⁾第2号住居出土の大型壺は上深川Ⅲ式（新）と考えられる土器類を伴っており、この例が広島湾周辺での最も新しい例と考えられよう。

これらの大型の壺を見てみると、比較的古い段階にあるものは口縁立ち上がり部が短く、口縁部を拡張することによって立ち上がり部を成形しているようである。また、立ち上がり部の器厚も厚い傾向が見て取れる。これに対し新しいものは、口縁立ち上がり部が薄く、口縁部に載せるように接合されているものが多く見られる。底部も古い段階のものは厚手のしっかりした底部を持っているが新しい段階のものは薄

手になり丸底の傾向を示すようになるといえよう。これらの画期がどの時点にあるかは判然としないが、上深川Ⅱ式から上深Ⅲ式へと変化するにつれて、大型の壺もその例外ではなかったことの現れと考えることができよう。

さて、本遺跡の墳墓群出土の土器について見てみると、口縁立ち上がり部はいずれも口縁部に載せるように接合されており、器厚も薄く内側上方にのびている。底部についても薄手に作られており、62のようにほとんど丸底化している例も見られるなど、新しい特徴を示しているようであることから、本遺跡の墳墓群出土土器は、少なくとも上深川Ⅱ式（新）段階を遡り得ず、下限は上深川Ⅲ式（新）段階を下り得ないといえよう。しかし、本遺跡が所在する石内地域及びその周辺地域においては、既に上深式川Ⅲ（古）段階から古墳が出現し、明らかに同（新）段階では古墳の造営が盛んになっていると考えられる⁽⁹⁾ことから、本遺跡のような弥生的墳墓はその時点で終焉を迎えていると考えられる。以上のことから、本遺跡墳墓群が営まれたのは、弥生後期中葉から後葉の時期のいずれかから、いくら遅くとも弥生終末ないし古墳初頭の段階の間と考えておきたい。

2 平尾遺跡の弥生墳墓群について

平尾遺跡では、45基の墳墓を確認したが、墳墓数では太田川流域の西願寺A地点遺跡⁽¹⁰⁾の42基を越えており、市域でも規模の大きな墳墓群のひとつといえる。また、調査区東側の尾根上においても墳墓の存在が予想されることから、墳墓群がさらに拡大するものと思われる。

まず、本墳墓群における41基の土壙墓についてみると、供献土器と考えられる甕形土器を検出したK6以外の土壙墓からは遺物は何も出土していない。また、各土壙墓については規模や形状の違いはみられるものの基本的な構造において大きな相違は認められない。さらに、土壙墓の配置をみても特定の土壙墓に対して特別な配慮を施しているとは考えられない。以上のことから、本墳墓群は基本的構造において同質な土壙墓が集まって形成する共同墓地の形態をとる墳墓群といえるだろう。類似するものとしては、太田川流域の西願寺A地点遺跡や大久保遺跡⁽¹¹⁾等が挙げられる。

次に、わずか1基とはいえK6が供献土器を伴出している点について考えてみたい。

この供献された甕形土器は、先述のとおり小林A地点遺跡等の出土で山陰系として指摘されている土器と類似しており、他の共伴する土器との関係から上深川Ⅱ式（新）ないし上深川Ⅲ式（古）の段階のものに位置づけられる。したがって、わずか1例で即断はできないものの本墳墓群内において墳墓に対する土器供献が行われた時期は、上深川Ⅱ式（新）ないし上深川Ⅲ式（古）と考えることは可能であろう。ただし、K6が本墳墓群が営まれた期間でどの時点に位置しているのかは不明確であるため、K6でみられる土器供献をもって本墳墓群が終焉を迎えたとは断言できない。

ところで、市域において弥生時代後期に営まれたと考えられる墳墓群をみると、墳墓群内の地山に溝状の掘り込みや墳墓が存在する範囲において自然地形を人工的に加工した地山整形面等が確認されているものがいくつか見受けられる。これらの施設はその位置関係及び範囲から墓域を区画するためのものと考えられている。なお、このような施設を備えた遺跡としては、周辺では小林A地点遺跡、小林B地点遺跡⁽¹²⁾が、太田川流域では西願寺A地点遺跡、末光A-2地点遺跡⁽¹³⁾などがある。

さて、本遺跡では尾根上平坦面から2つの段状遺構を確認した。まず、D1は調査区内の尾根上中央部付近に位置し、尾根に直交している。また、D1付近の尾根上はわずかではあるが空地となっており、墳墓は検出されなかった。D2は尾根先端部付近に位置し、K41が重複しているもののこれより西側においては墳墓が検出されていない。さらに、本調査区においては後世において削平等を受けた痕跡を確認していないことから、D1、D2ともに墳墓に関係する施設と考えられる。2つの段状遺構の機能については、その位置関係および範囲から、D1は墓域内を区画するためのもので、D2は墳墓群の西端にあって墓域を区画す

るためのものと考えられる。したがって、本墳墓群はD1によって2つに分割されていると考えることができる。

次に、この考えをもとにして、D1によって分割された墳墓群の成立要因について若干の検討を加えてみたい。

2つの墳墓群についてだが、D1の東側にある墳墓群をA群とし、D1～D2間にある墳墓群をB群とする。ただし、D2と重複するK41はB群に含むものとする。

次にA・B群の墳墓群の内容を整理してみると以下のとおりである。

A群は、土壙墓25基、土器棺墓2基、土器蓋土壙1基から構成される。

B群は、土壙墓16基、土器蓋土壙1基から構成される。

このようにB群の墳墓数がA群の2/3であるものの両群ともに土壙墓および土器棺墓・土器蓋土壙墓から構成されている。また、土壙墓の規模についても両群ともに小規模なものから大規模なものまで存在していることから、年齢による墓域の設定すなわち大人用と小児用として区画されたものではないと考えられる。さらに、遺構の項で述べたように木棺墓の分布状況や土壙墓の主軸のとり方においても両群に大きな相違点を見いだすことはできない。

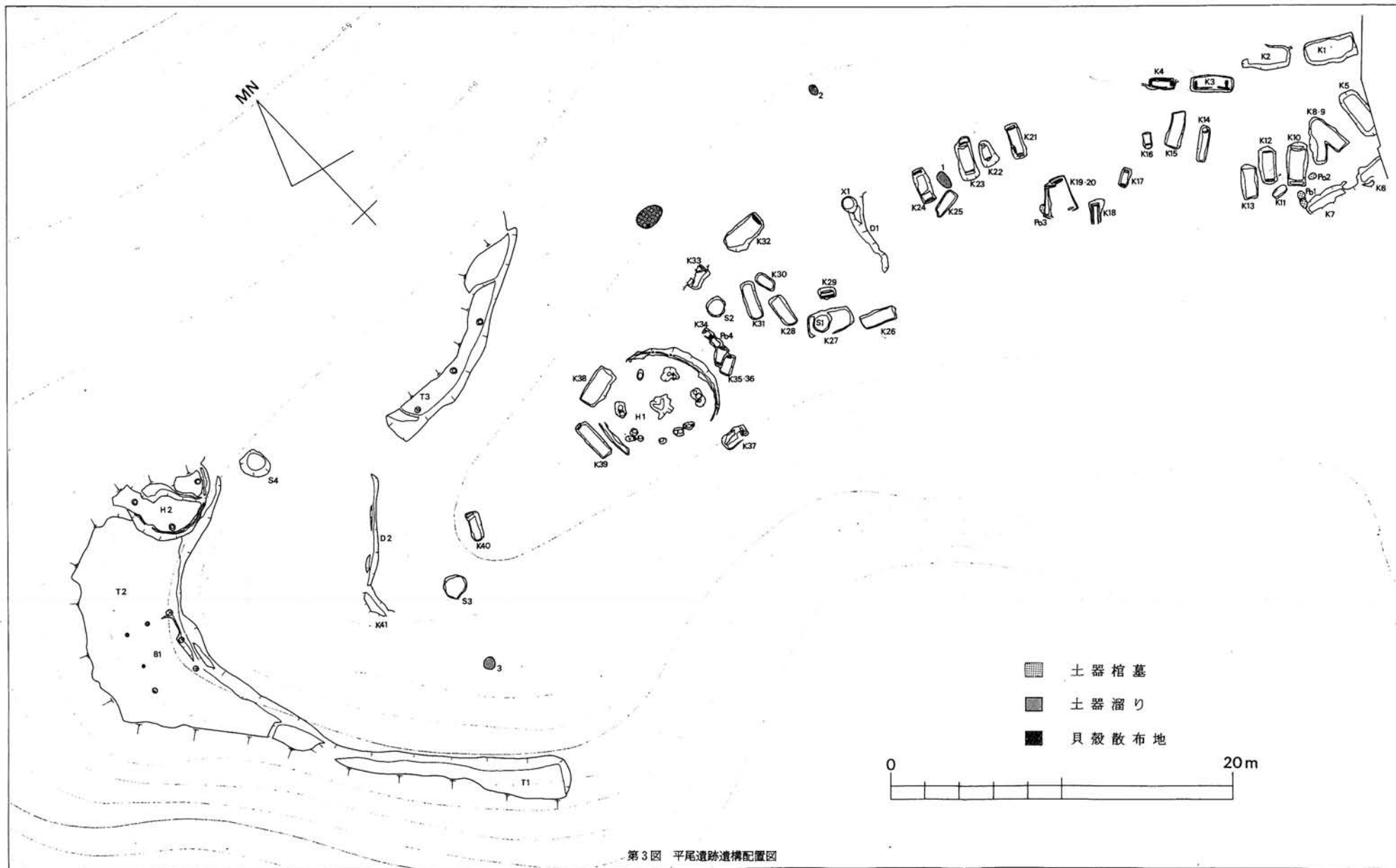
また、本墳墓群の営まれた時期は前述のとおりで、両群についても土器棺墓ないし土器蓋土壙に使用された壺形土器の特徴から判断して時期的に大きな違いはないものと思われる。

以上のことから、両群は墳墓群の構成上ほぼ均等なもので、しかも同時期に併行して営まれた可能性が高いことから、集団の違いを示していると考えられる。なお、本集落と本墳墓群との関係だが、弥生時代後期中葉から後葉にかけての時期にわずかに併行して営まれたとも考えられることから、本集落の住人が本墳墓群に埋葬された可能性も若干考慮する必要があるだろう。しかし、本集落の住居数に比べ墳墓数が大幅に多いため、本遺跡周辺に2つの墳墓群に対応する集団が存在していた可能性が非常に高いといえよう。いずれにせよ、本墳墓群と対応する集団との関係は、今後の本遺跡周辺の発掘調査の結果を待つて十分な検討を加える必要があるだろう。

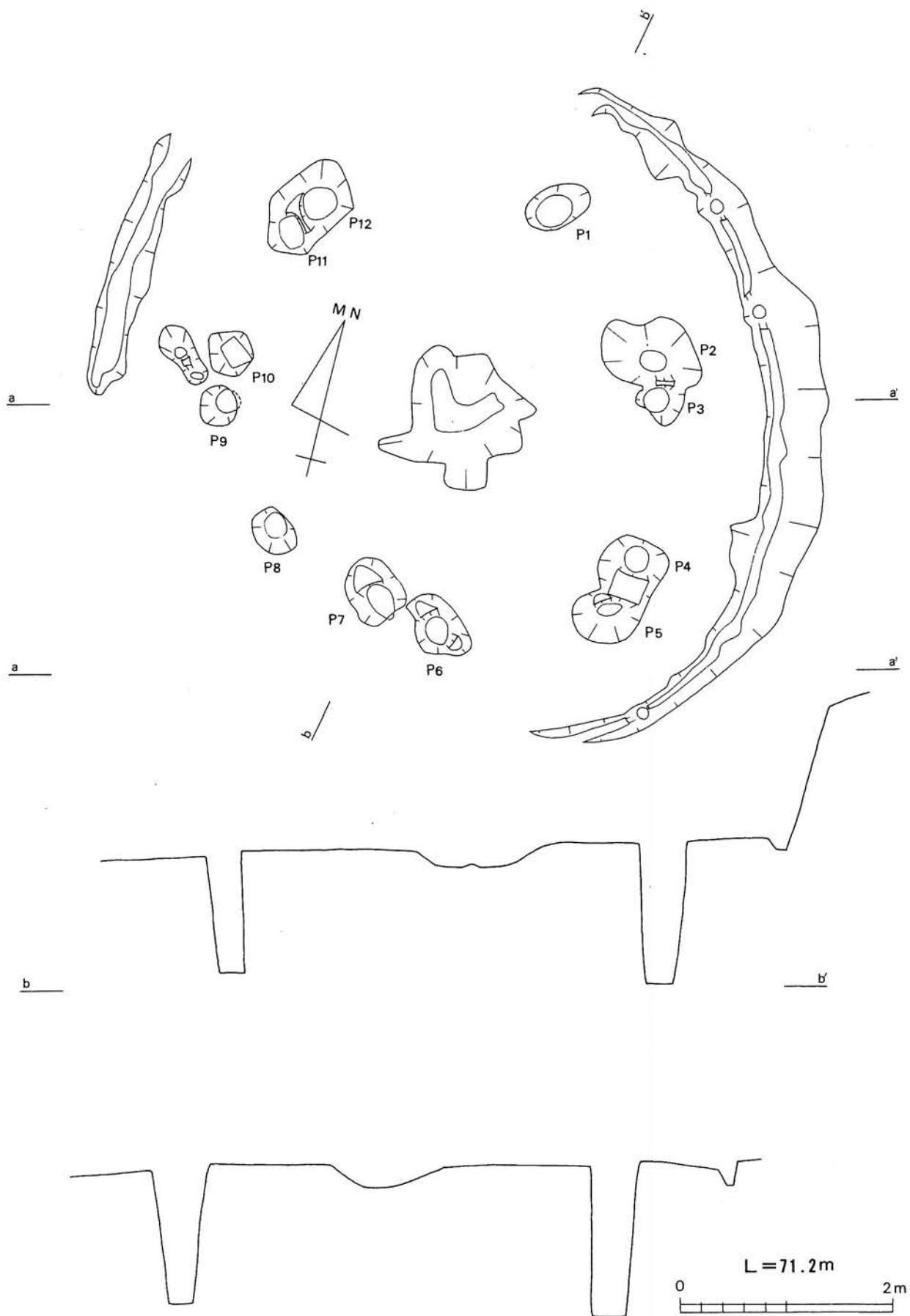
なお、今回の調査で、弥生時代後期の時期に石内川流域においても他の市域と同様に丘陵上に集団墓地が存在することが確認でき、この地域の当時の社会のあり方を知るための貴重な資料となったといえよう。

注

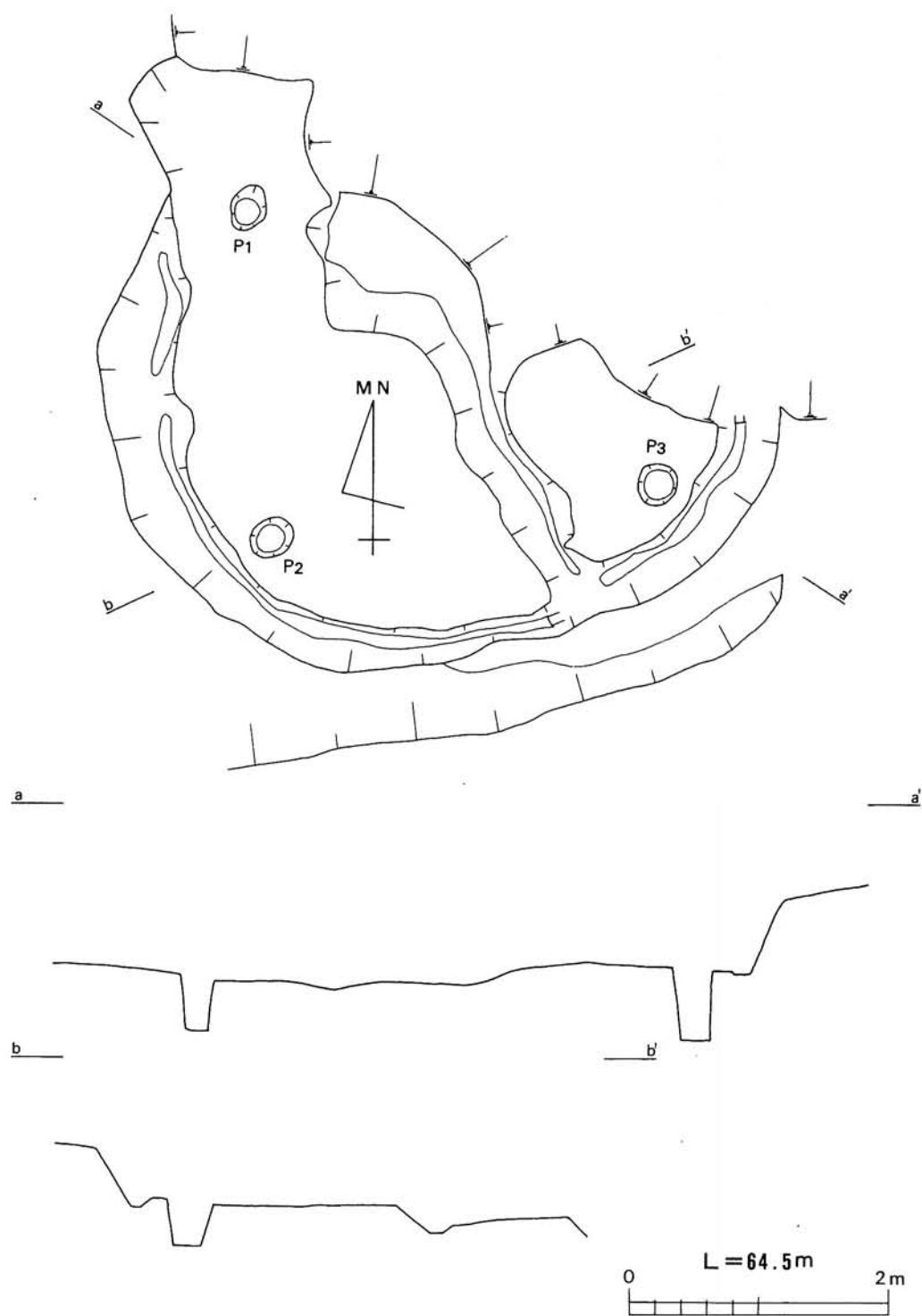
- (1) 広島市教育委員会「小林A地点遺跡」『小林遺跡A・B地点遺跡発掘調査報告』1990
- (2) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「大明地遺跡」「山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」(IV) 1987
- (3) 矢ヶ谷遺跡発掘調査団『矢ヶ谷遺跡発掘調査報告』1984
- (4) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「浄安寺遺跡」『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(III) 1986
- (5) 財団法人広島市歴史科学教育事業団『稗畑遺跡発掘調査報告』1992
- (6) 広島県教育委員会「寺迫遺跡」『高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告』1977
- (7) 広島県教育委員会「西願寺C地点遺跡」『西願寺遺跡群』1974
- (8) 広島市教育委員会「岡谷遺跡」『岡谷遺跡・狐が城古墳発掘調査報告』1985
- (9) 財団法人広島市歴史科学教育事業団『城ノ下A地点遺跡発掘調査報告』1991
- (10) 広島県教育委員会「西願寺A地点遺跡」『西願寺遺跡群』1974
- (11) 財団法人広島市歴史科学教育事業団『大久保遺跡発掘調査報告』1992
- (12) 広島市教育委員会「小林B地点遺跡」『小林遺跡A・B地点追跡発掘調査報告』1990
- (13) 広島市教育委員会「末光A-2地点遺跡」『末光遺跡群発掘調査報告』1984



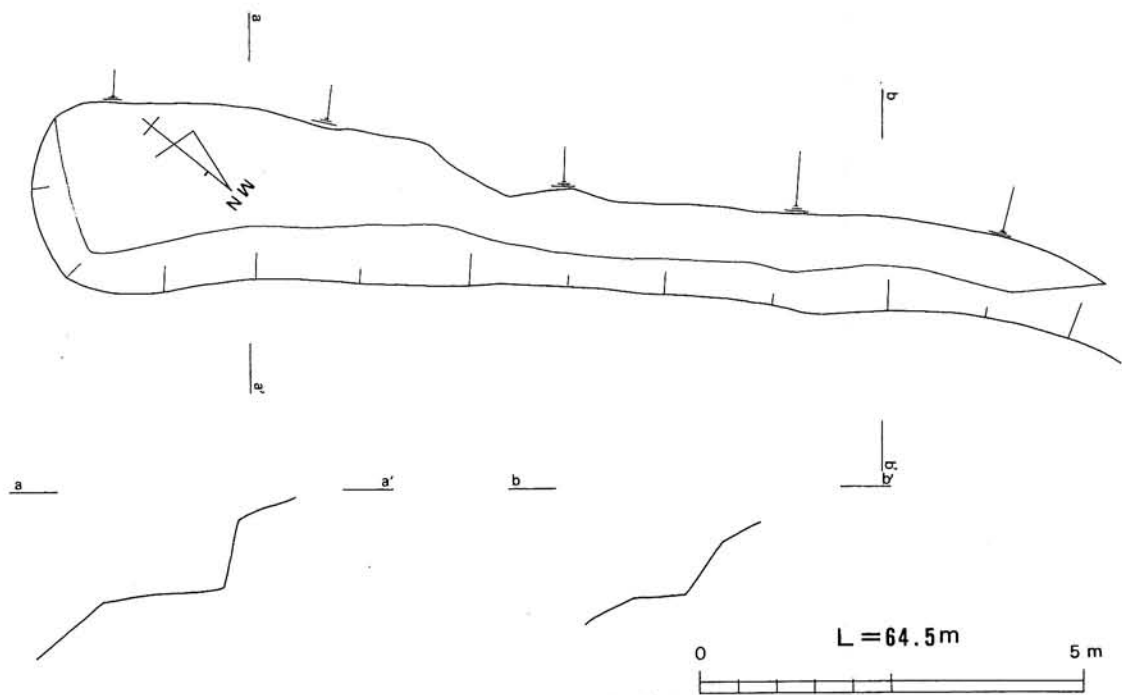
第3図 平尾遺跡遺構配置図



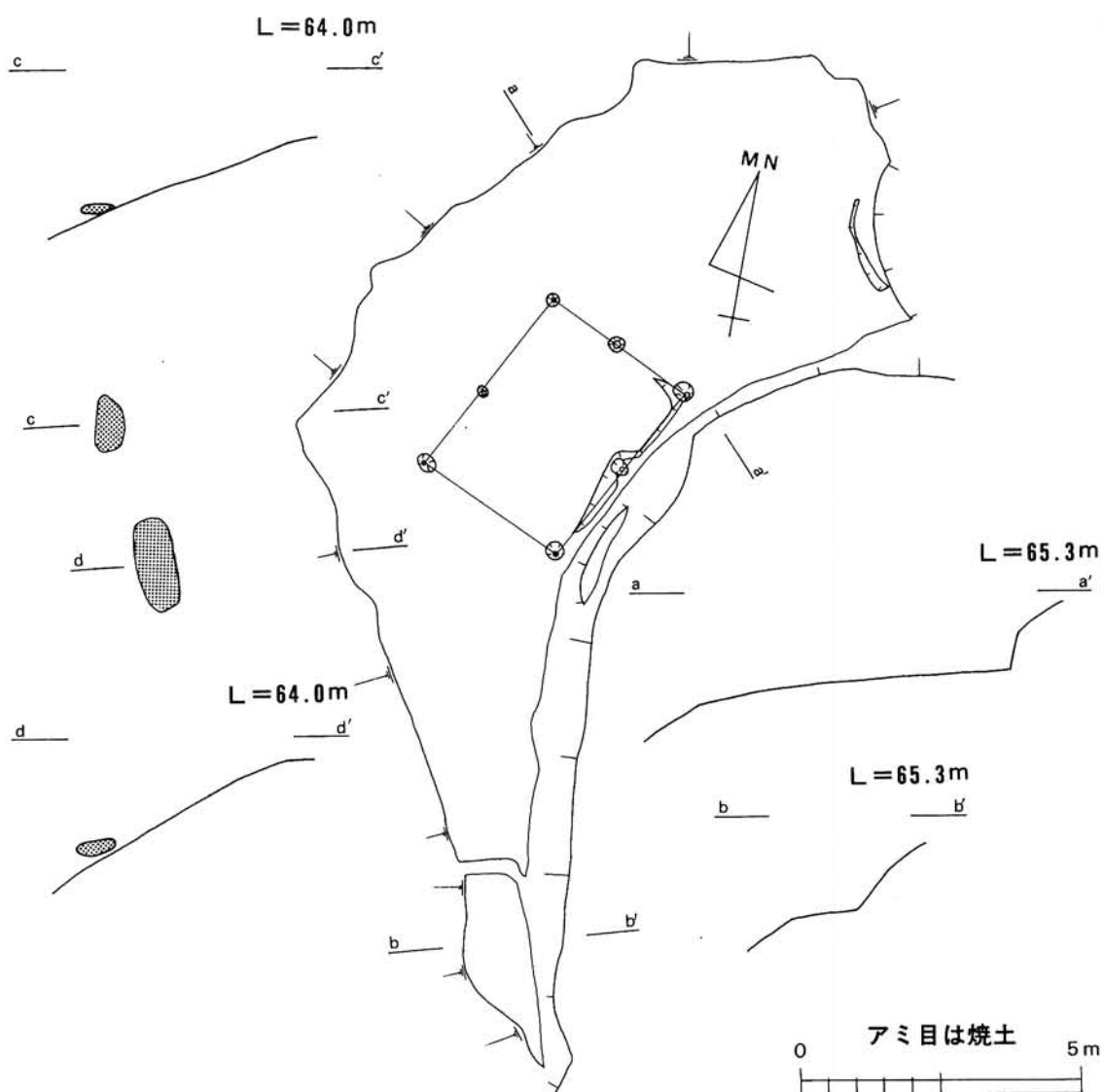
第4図 H1実測図



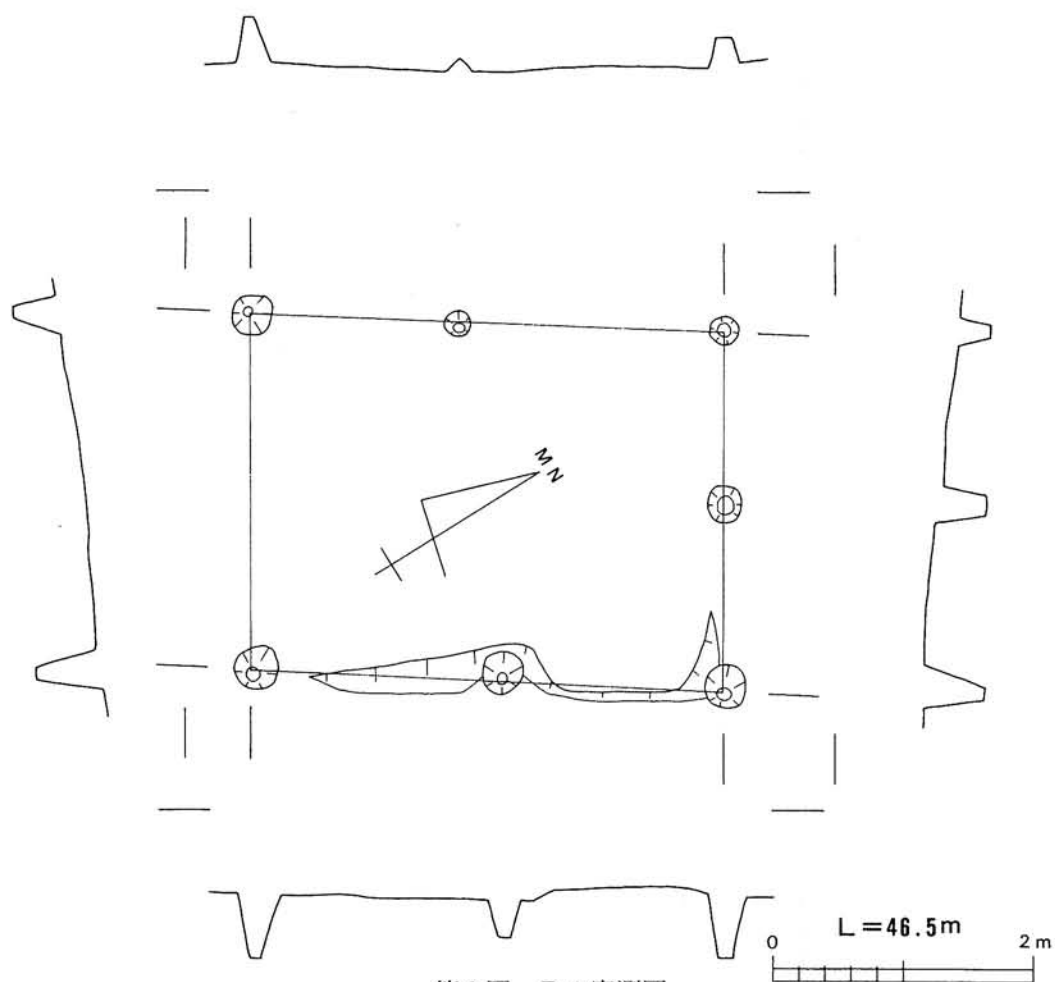
第5図 H2実測図



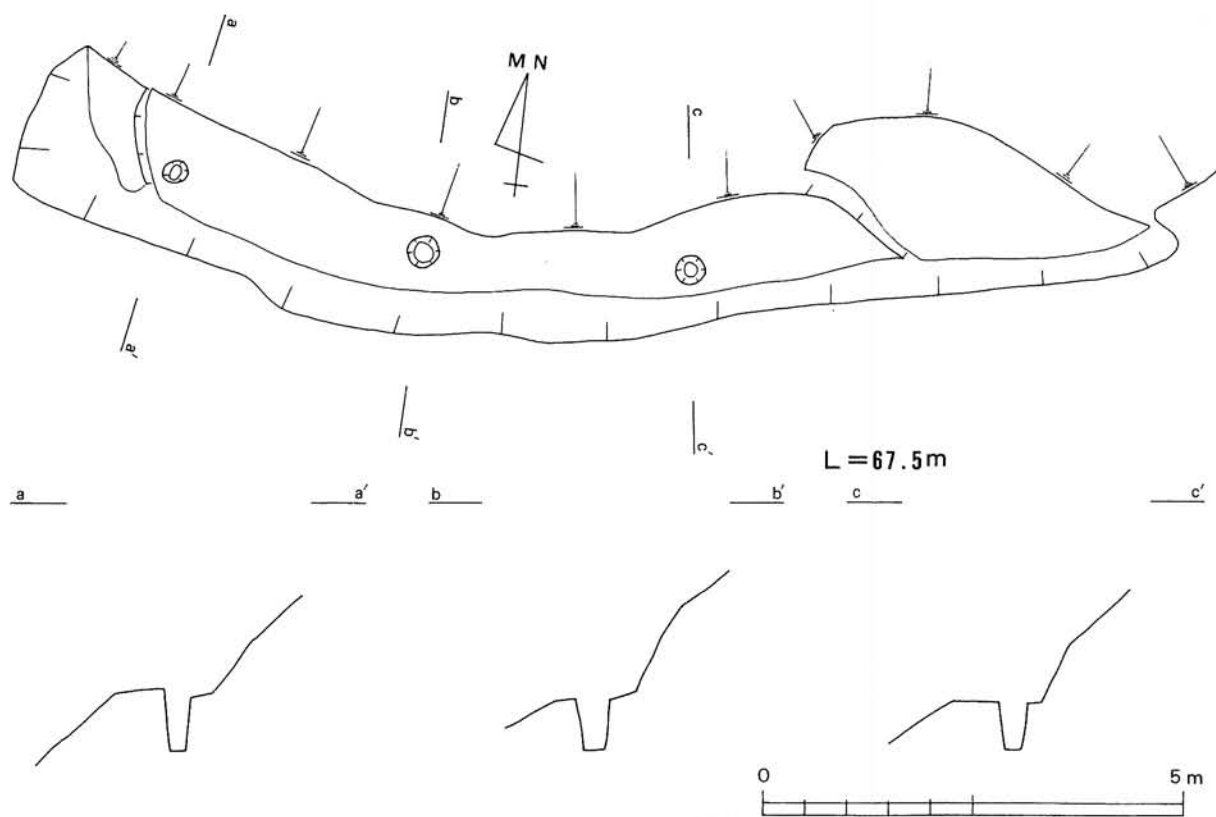
第6図 T1実測図



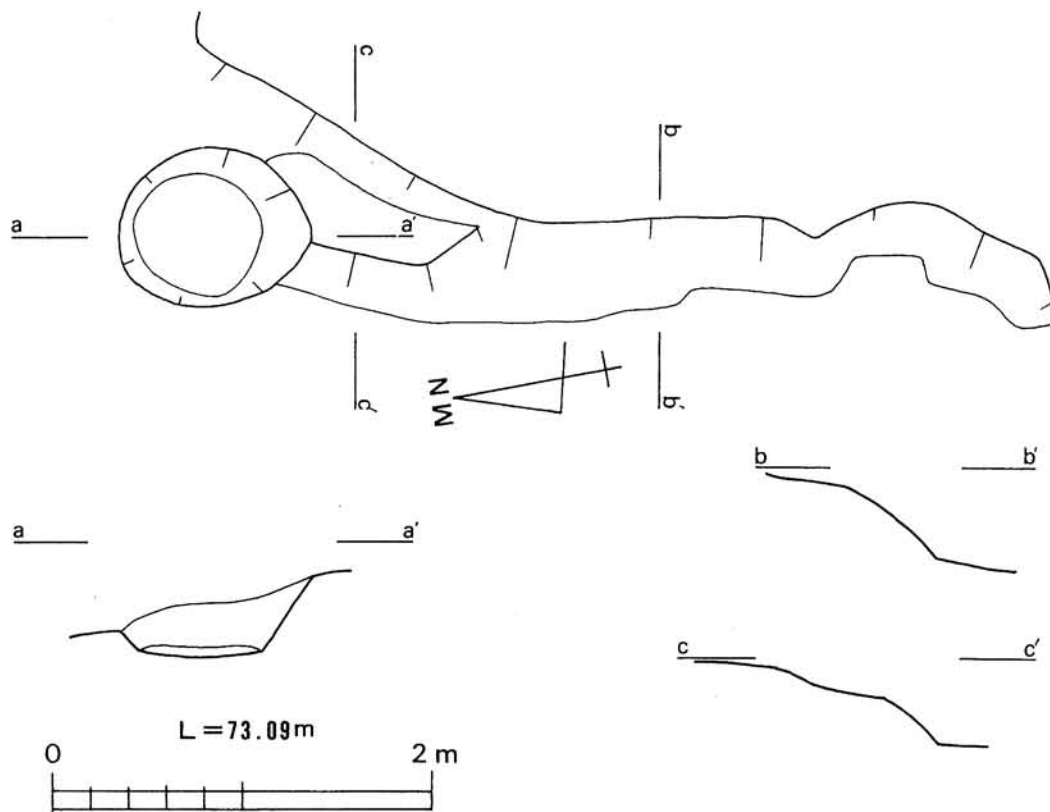
第7図 T2実測図



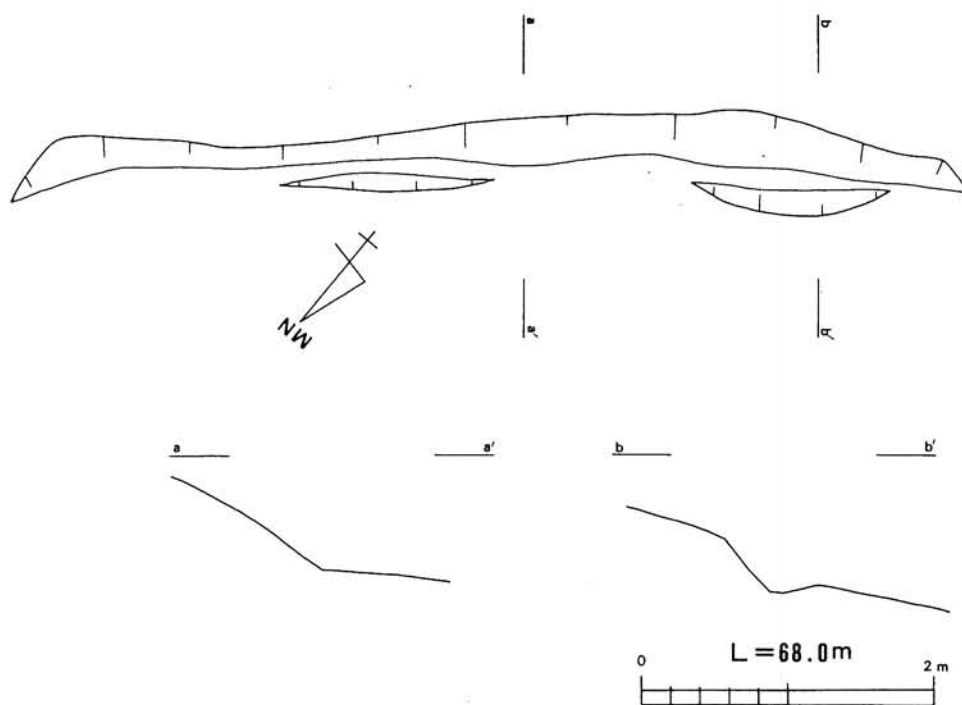
第8図 B1実測図



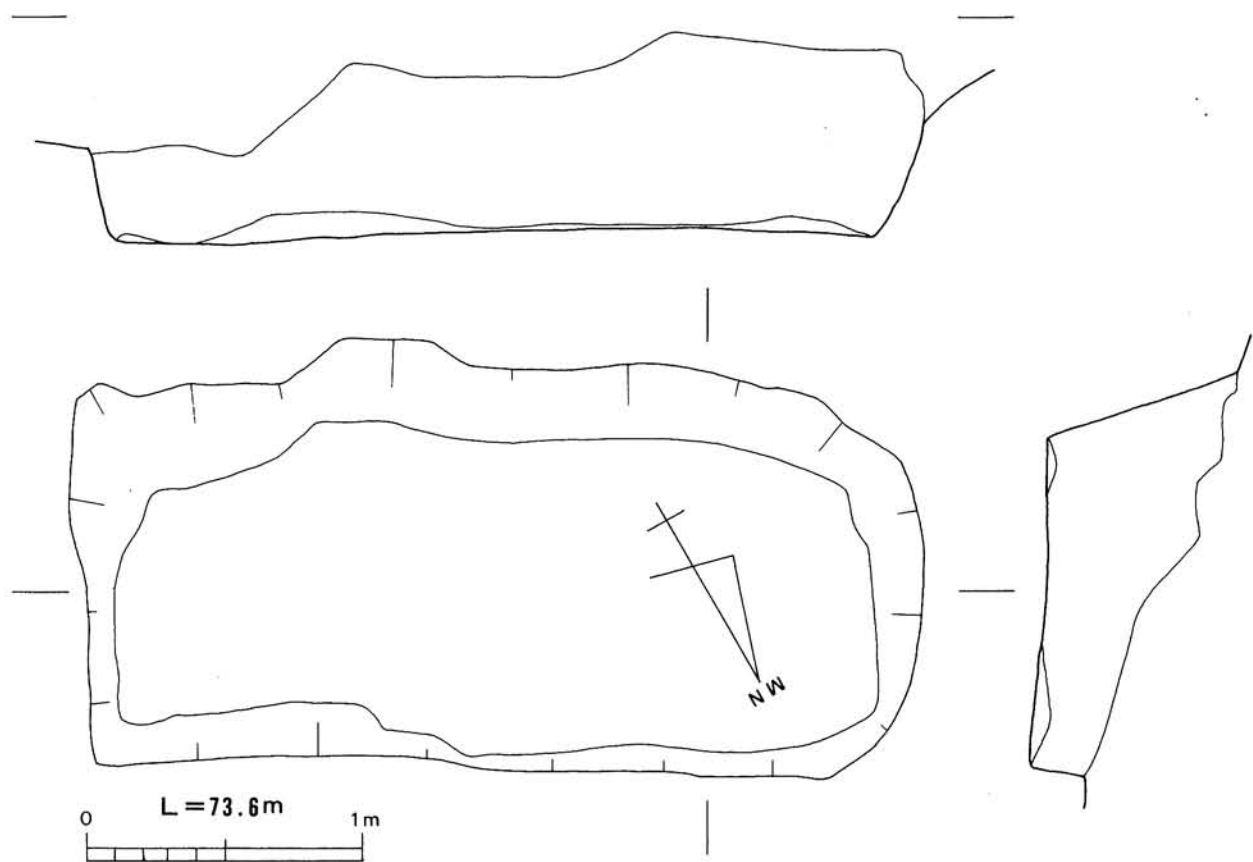
第9図 T3実測図



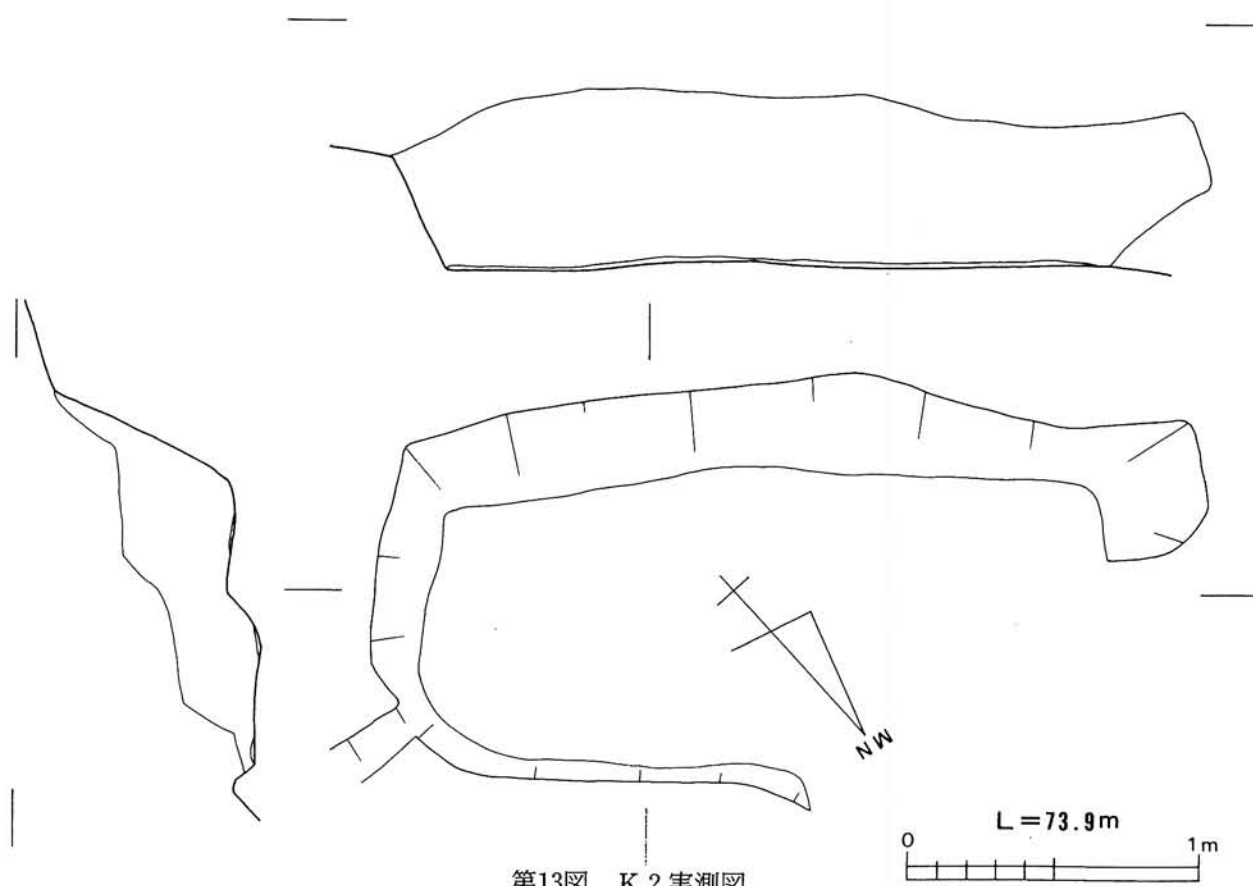
第10図 D 1・X 1 実測図



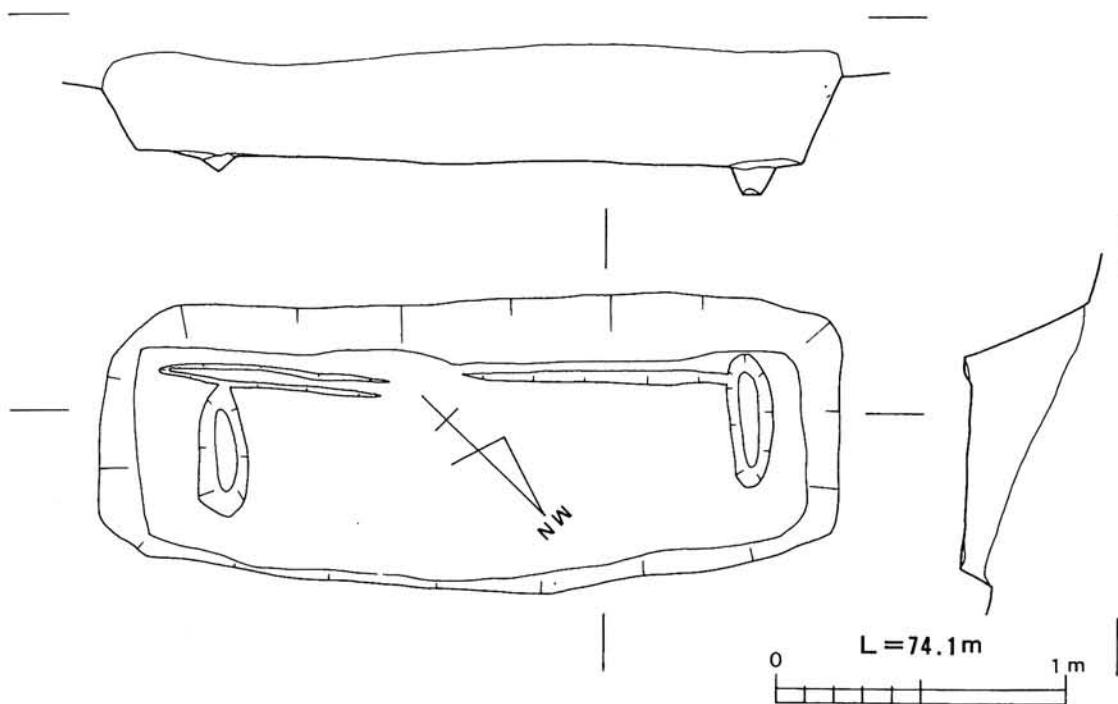
第11図 D 2 実測図



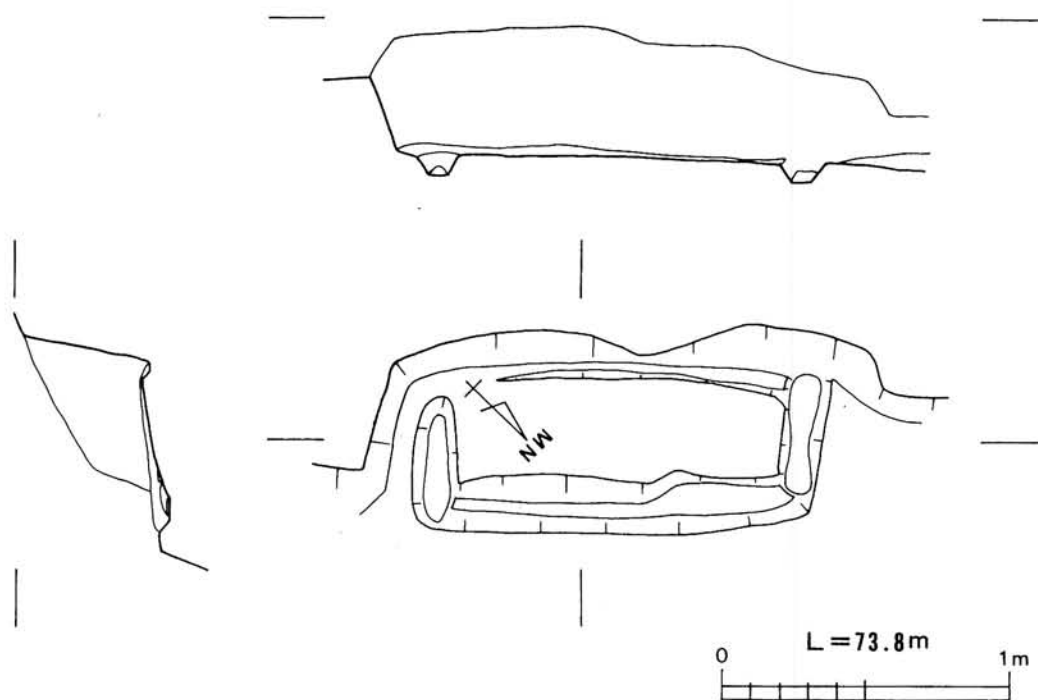
第12図 K 1 実測図



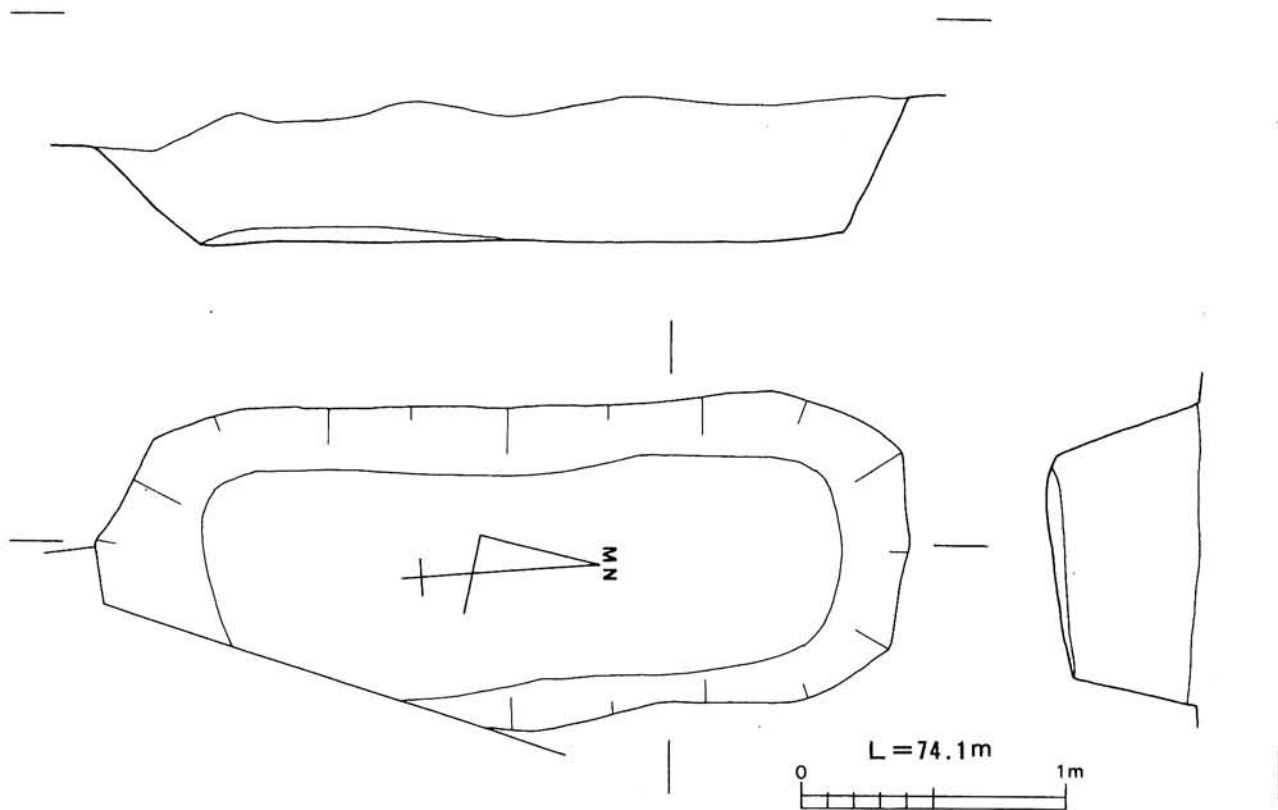
第13図 K 2 実測図



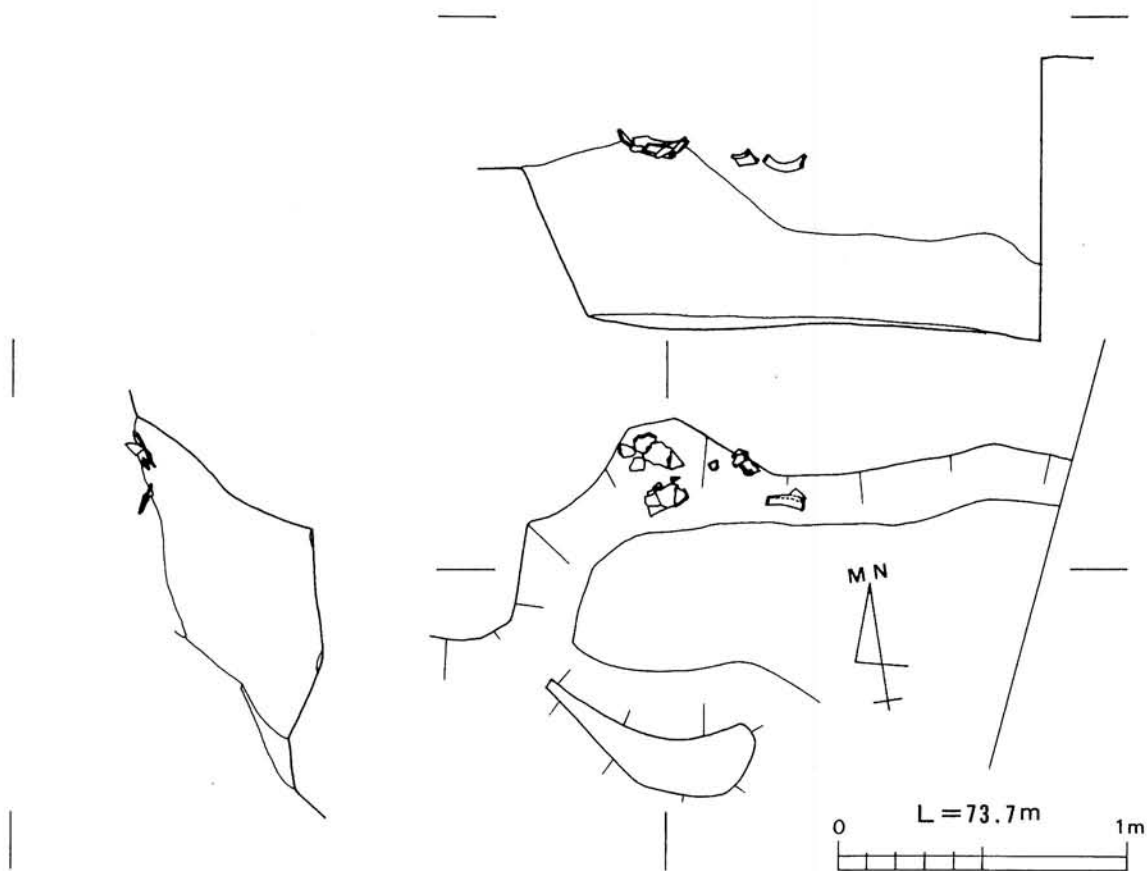
第14図 K 3 実測図



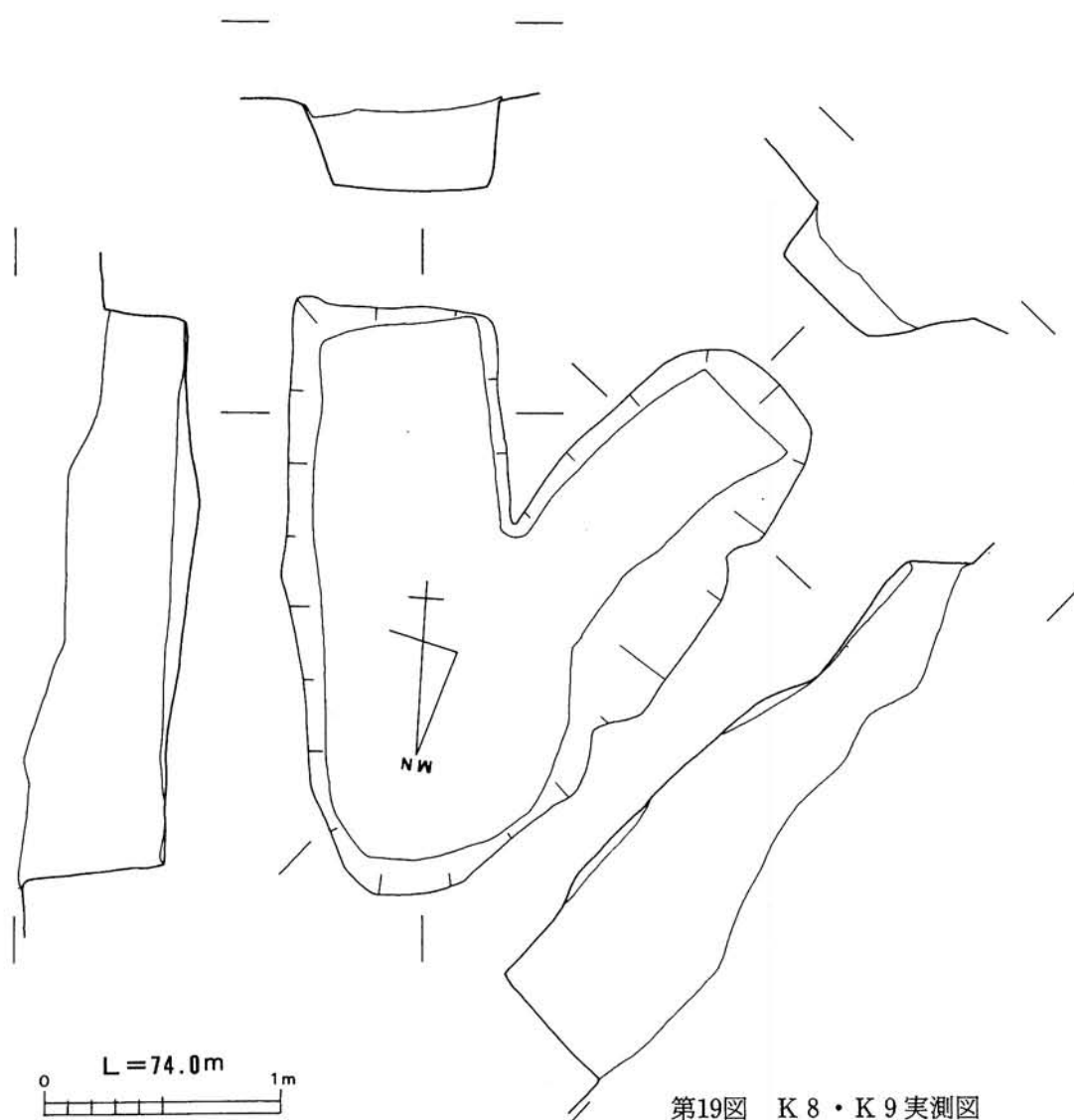
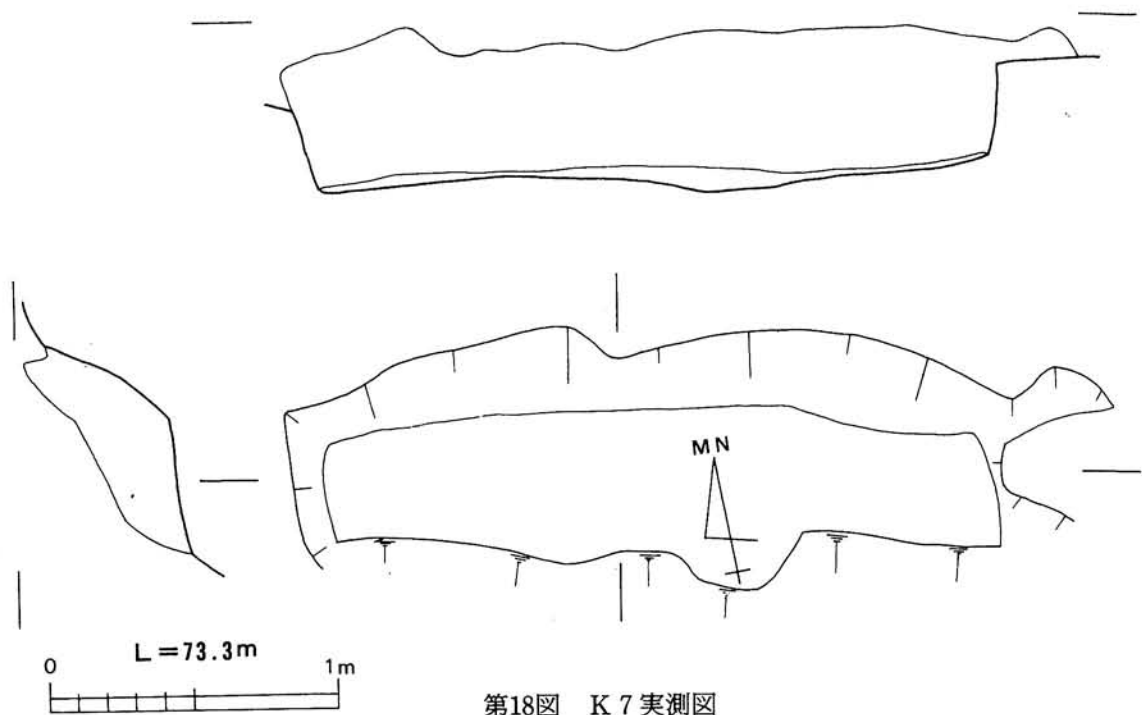
第15図 K 4 実測図

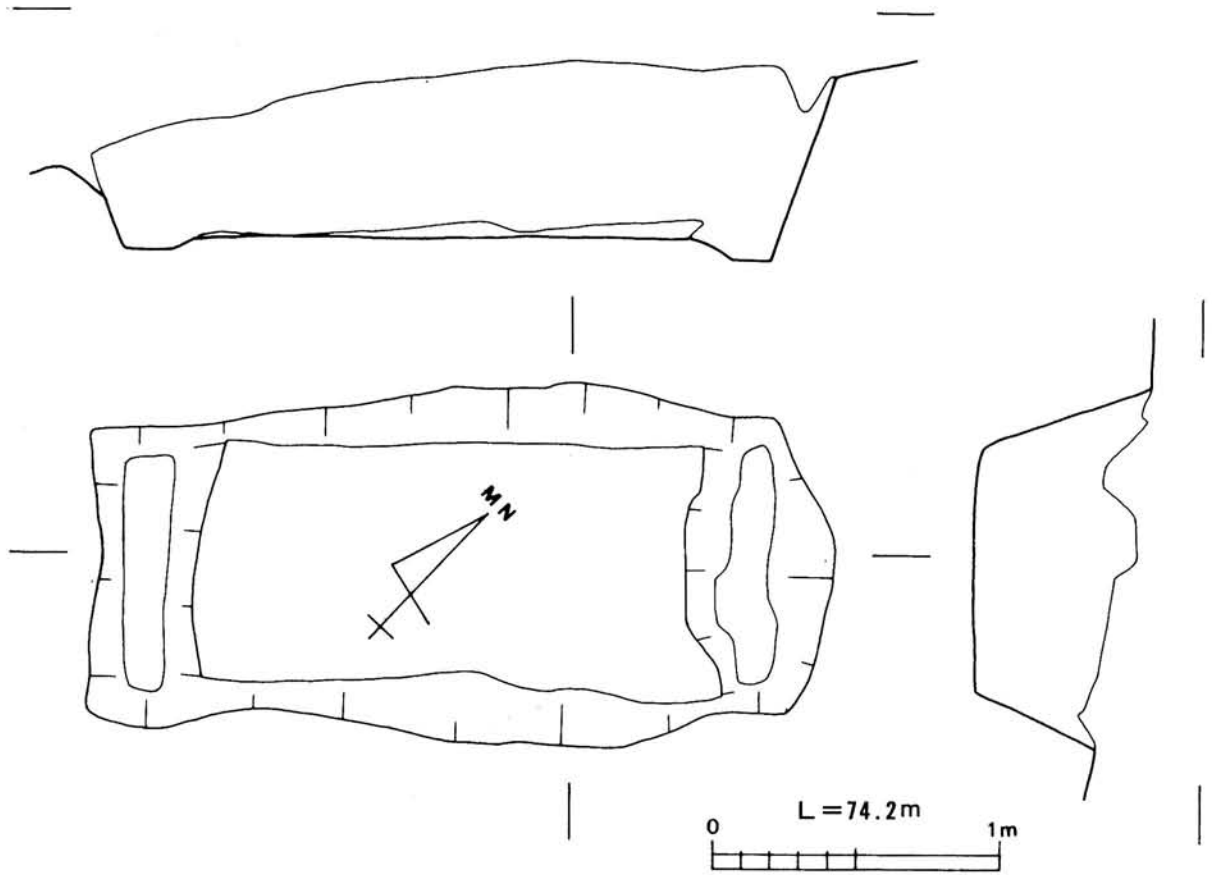


第16図 K 5 実測図

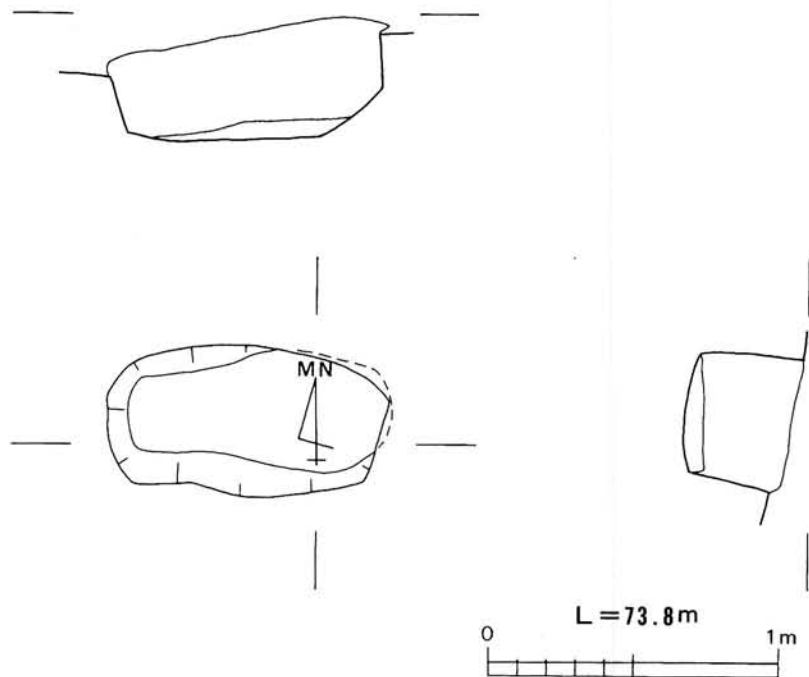


第17図 K 6 実測図

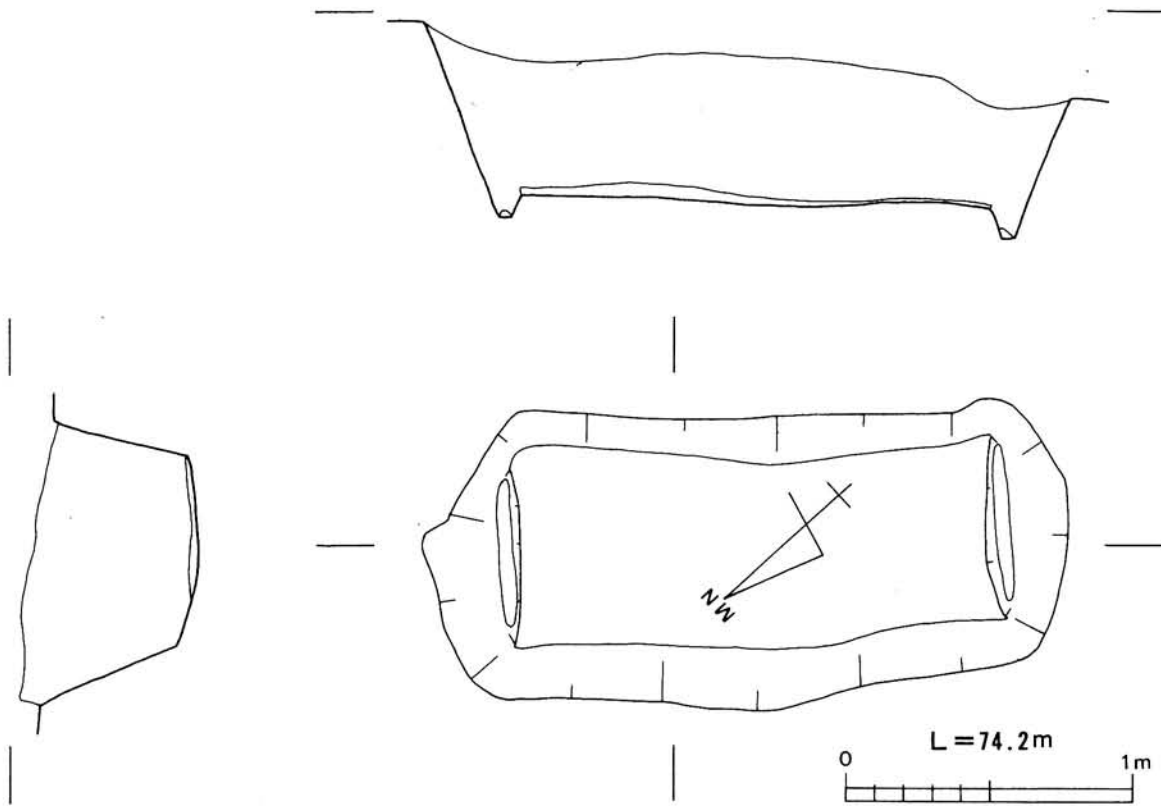




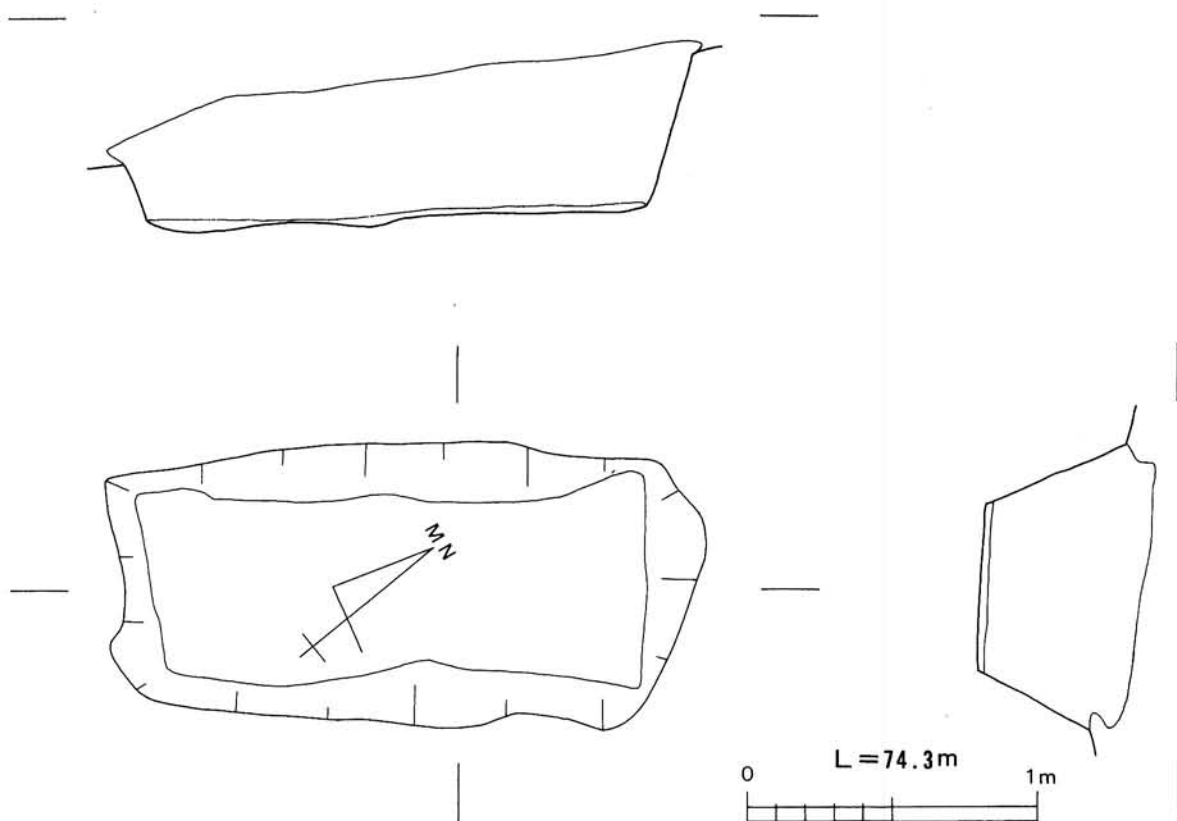
第20図 K10実測図



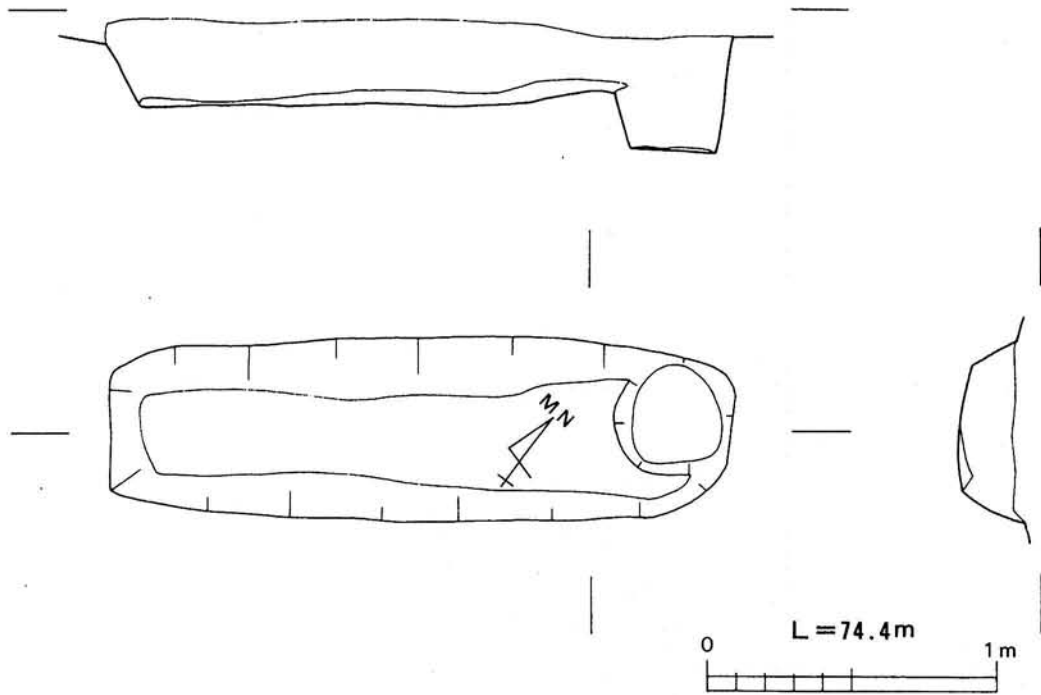
第21図 K11実測図



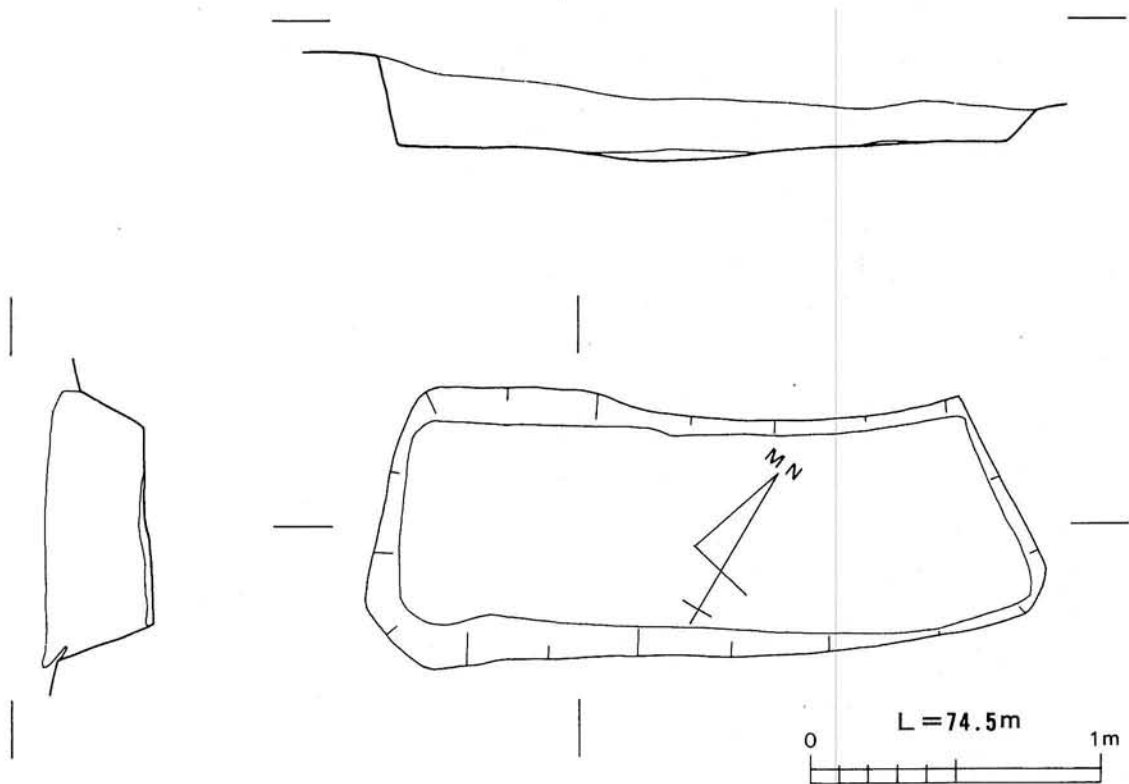
第22図 K12実測図



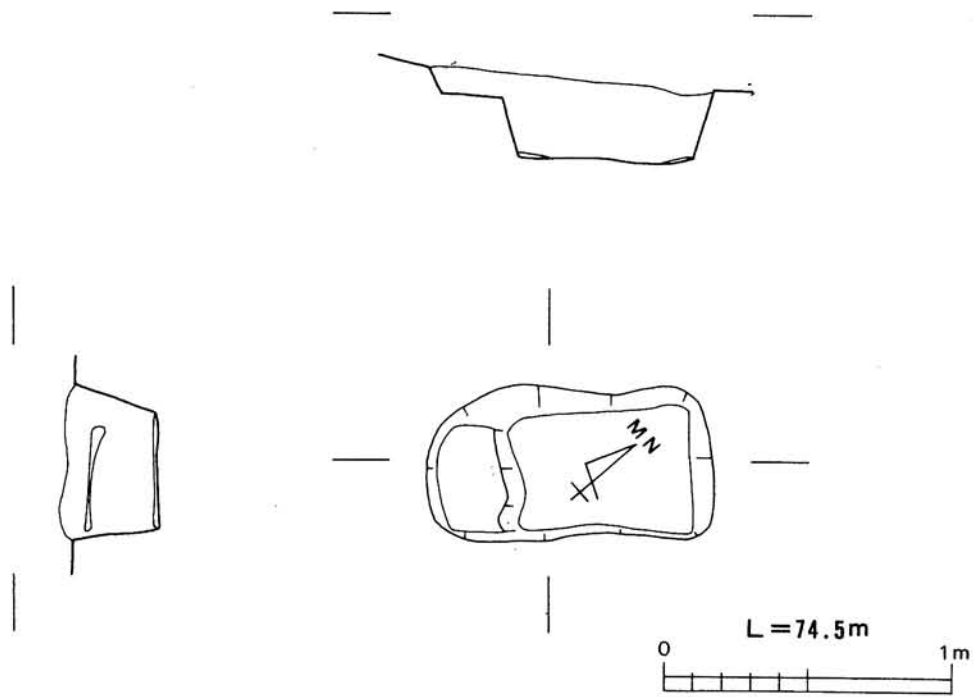
第23図 K13実測図



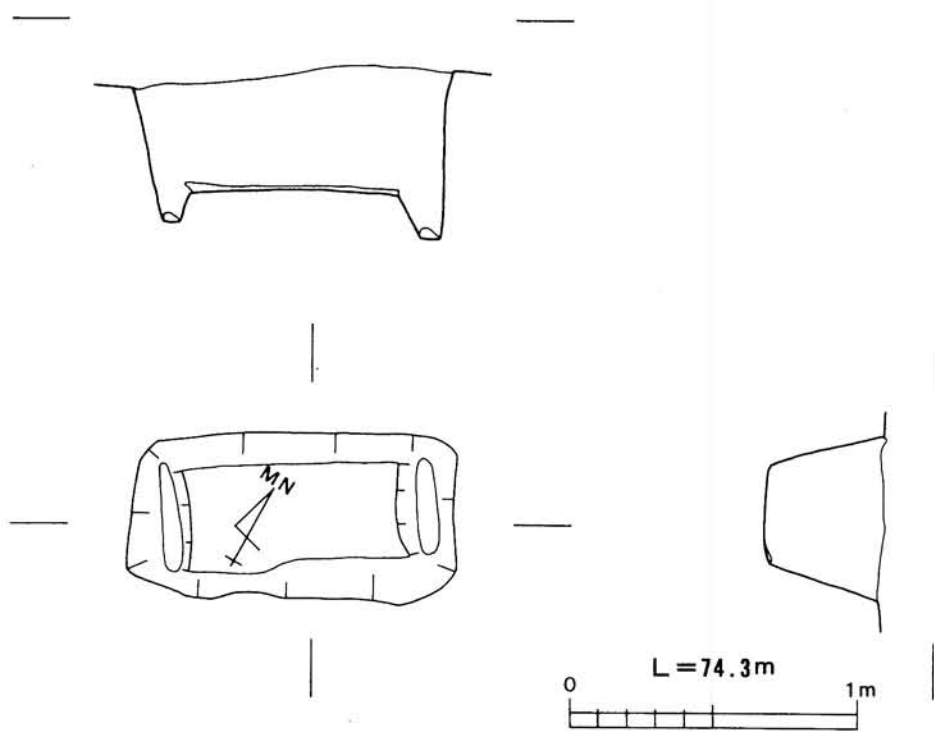
第24図 K14実測図



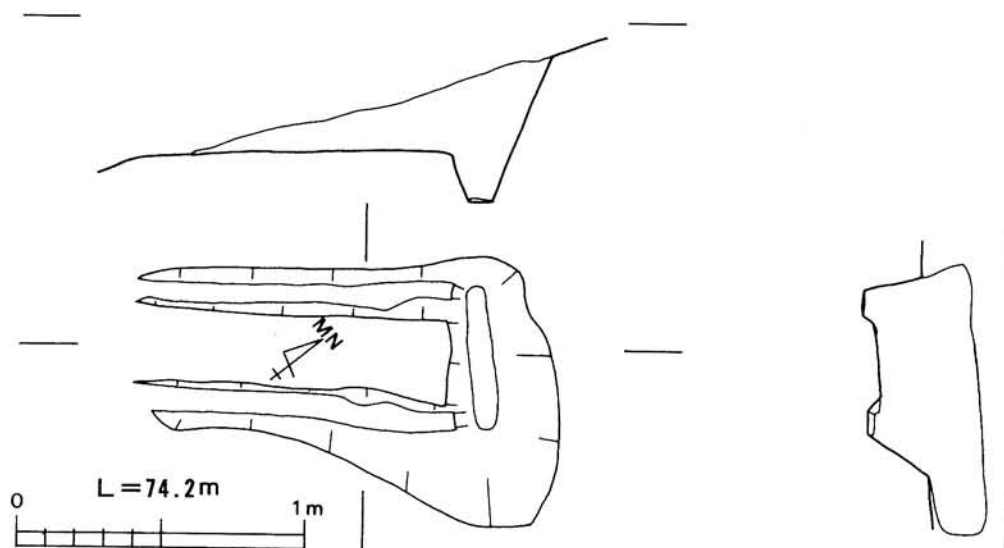
第25図 K15実測図



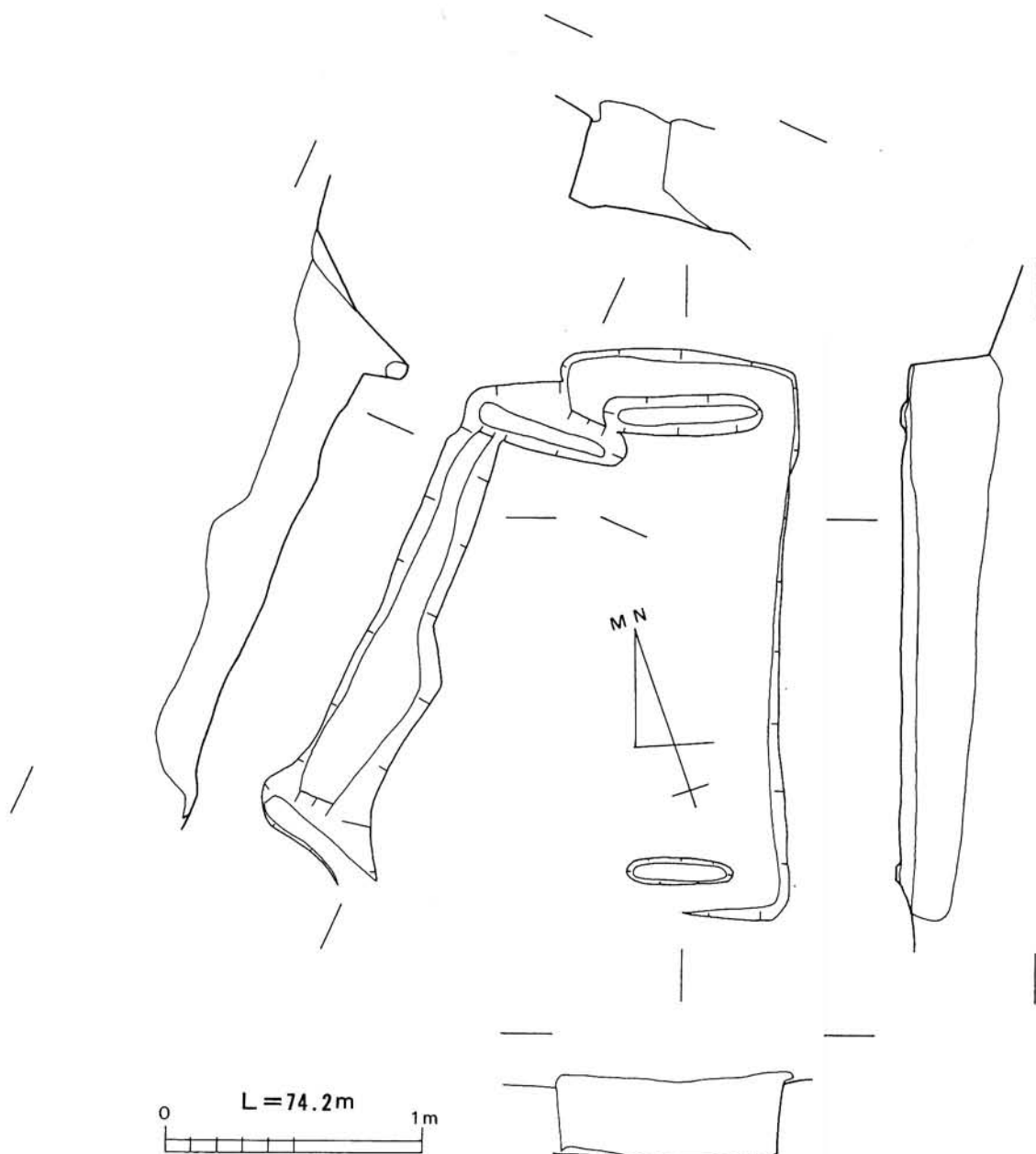
第26図 K16実測図



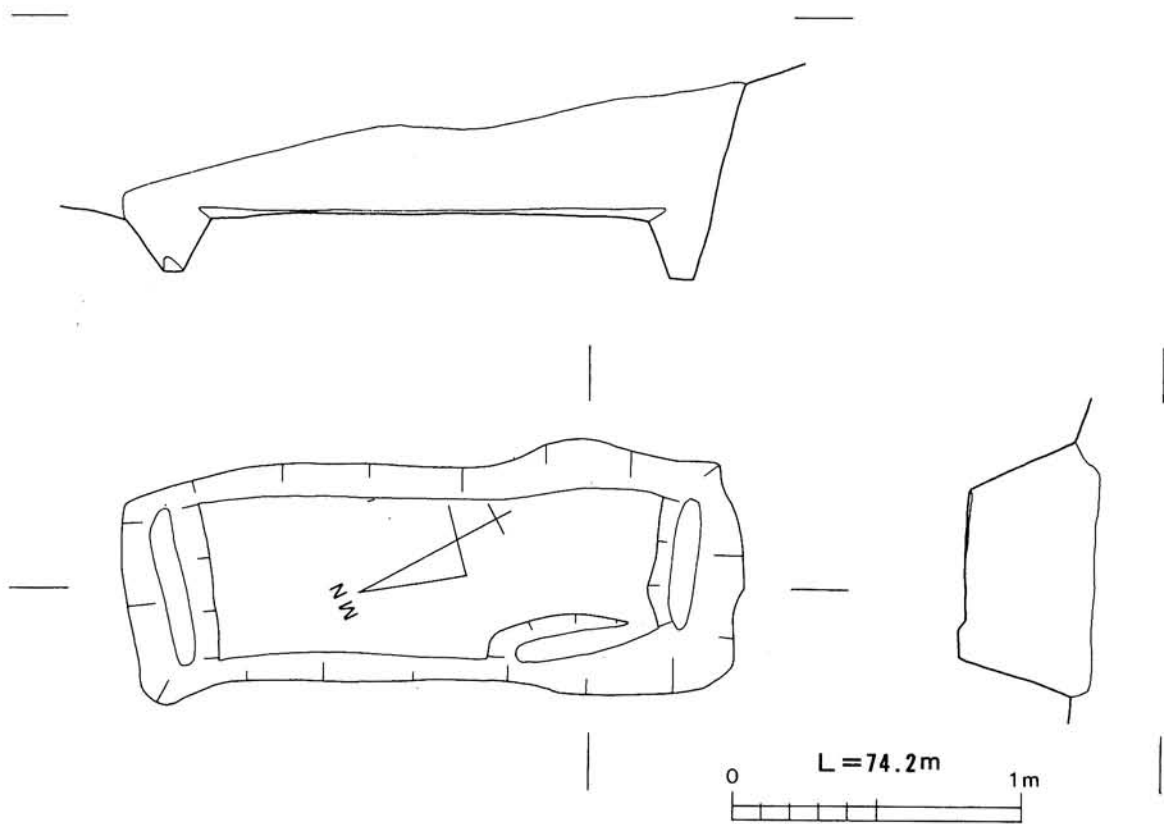
第27図 K17実測図



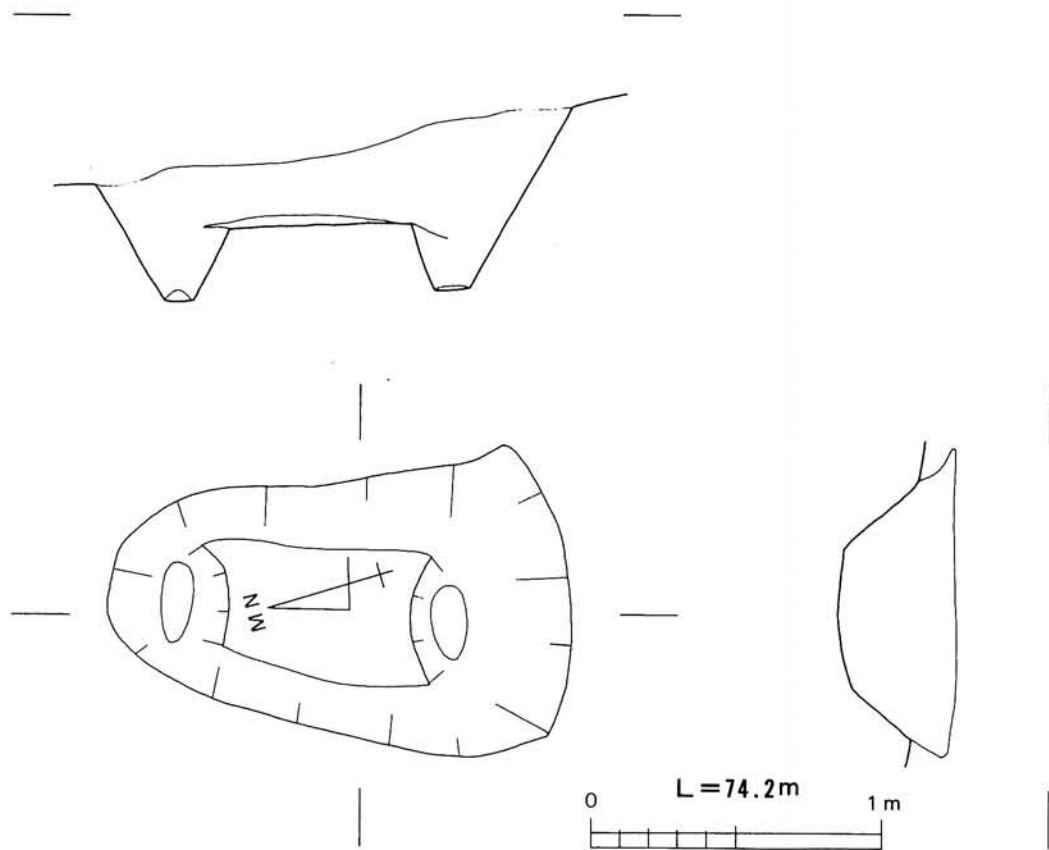
第28図 K18実測図



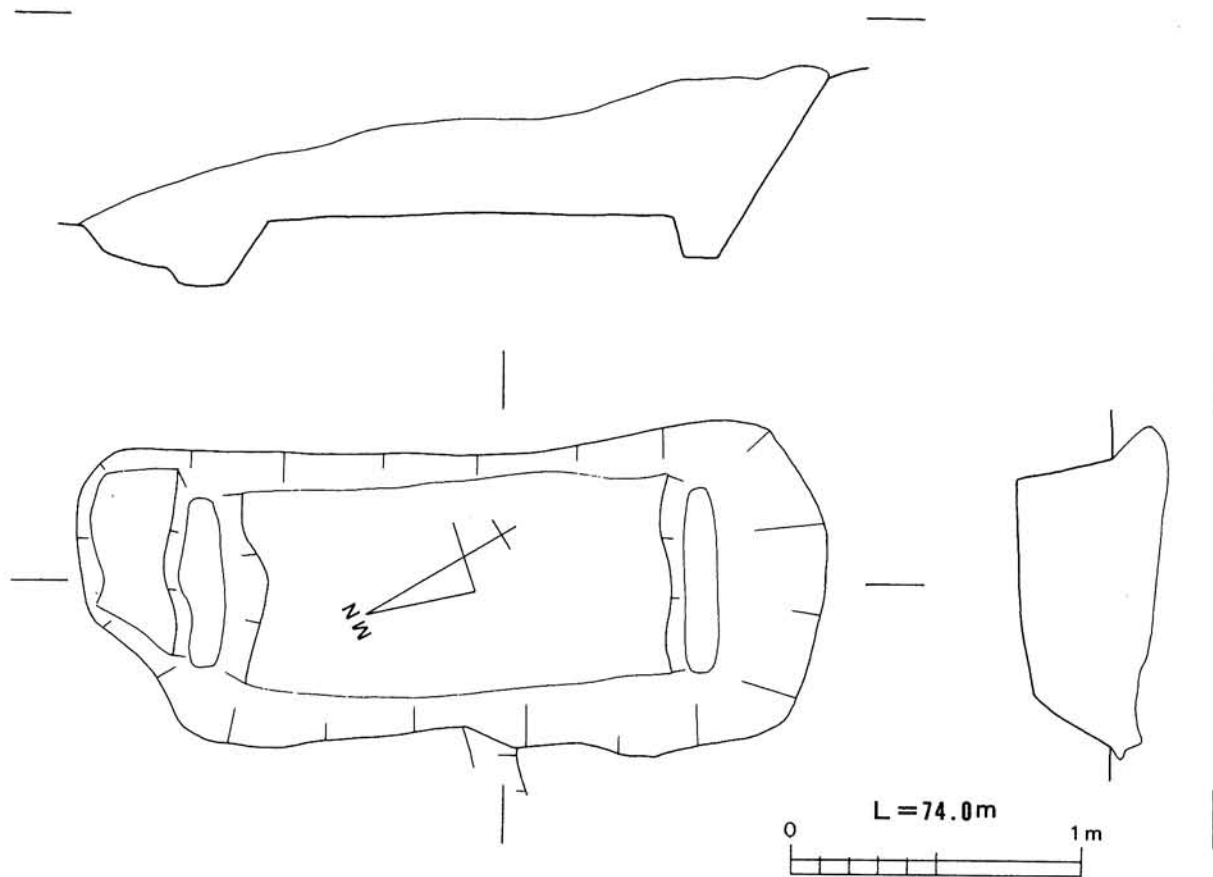
第29図 K19・K20実測図



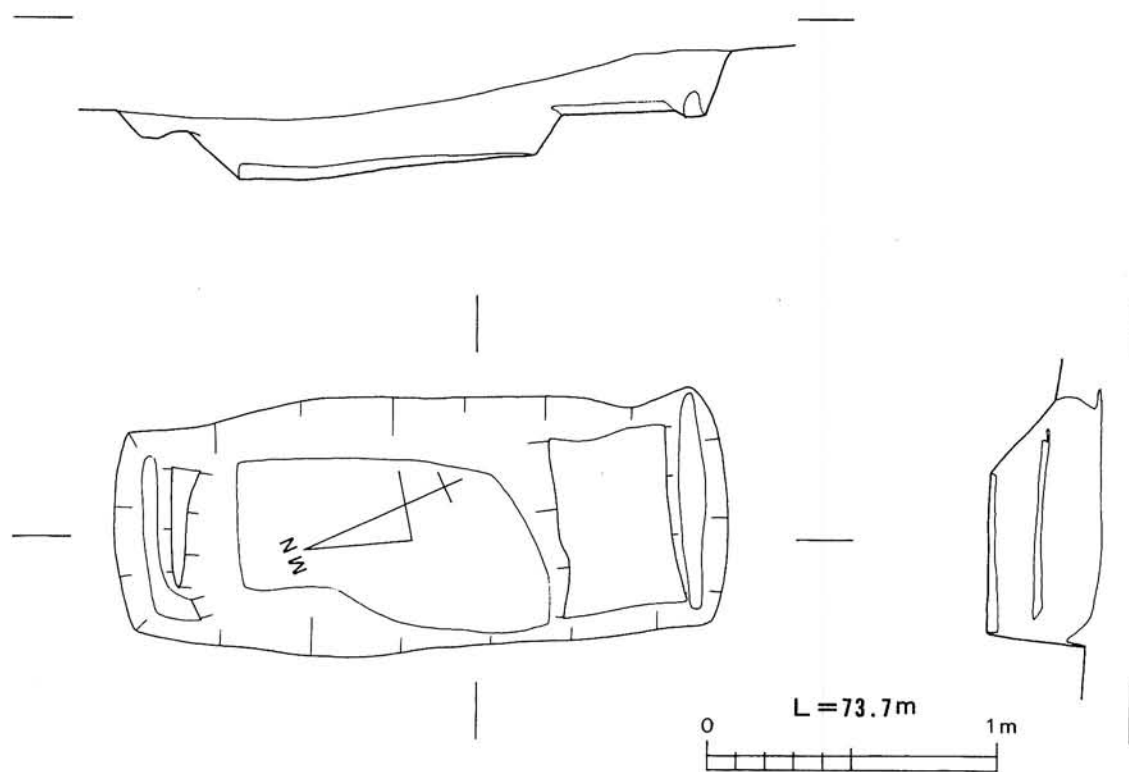
第30図 K21実測図



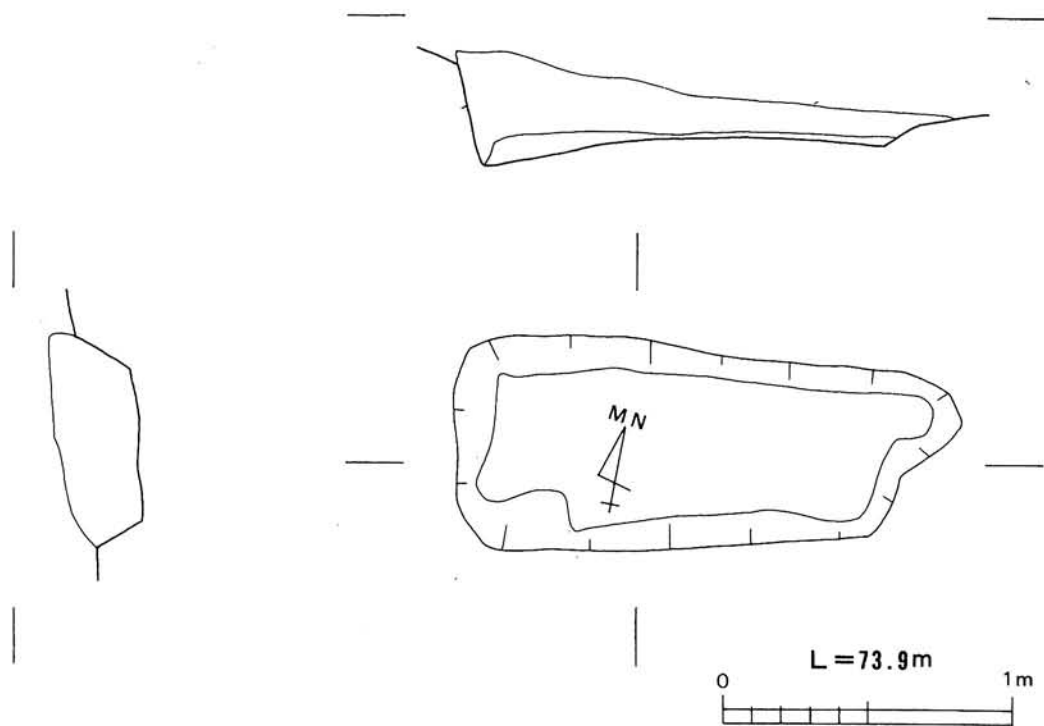
第31図 K22実測図



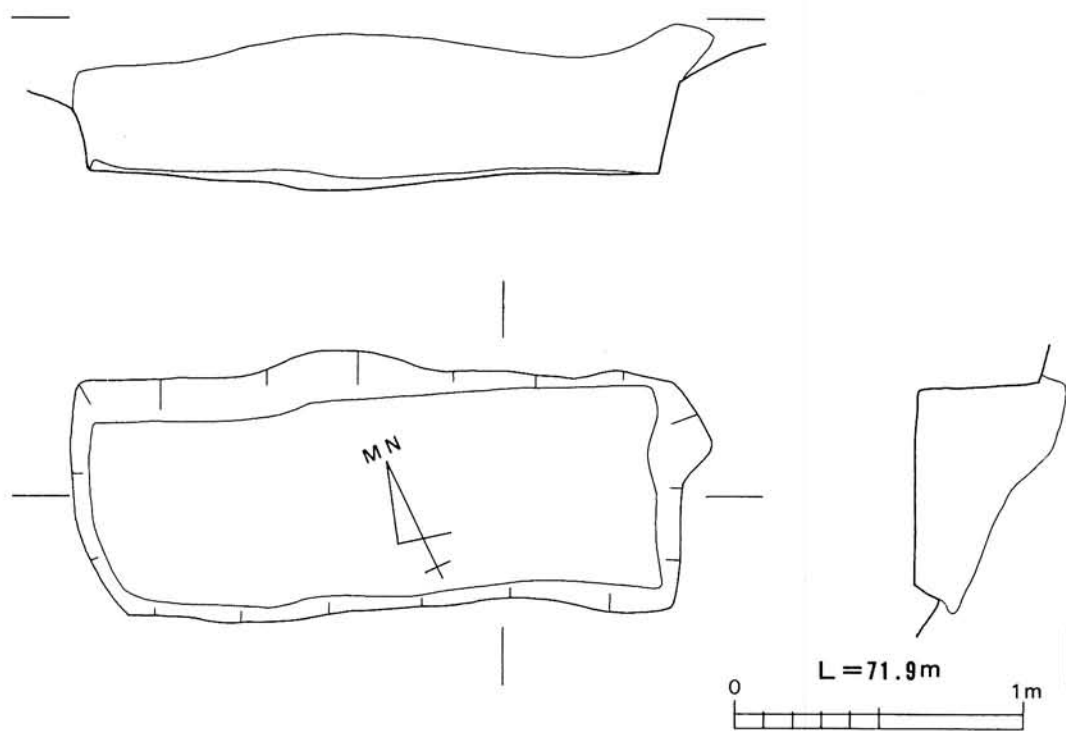
第32図 K23実測図



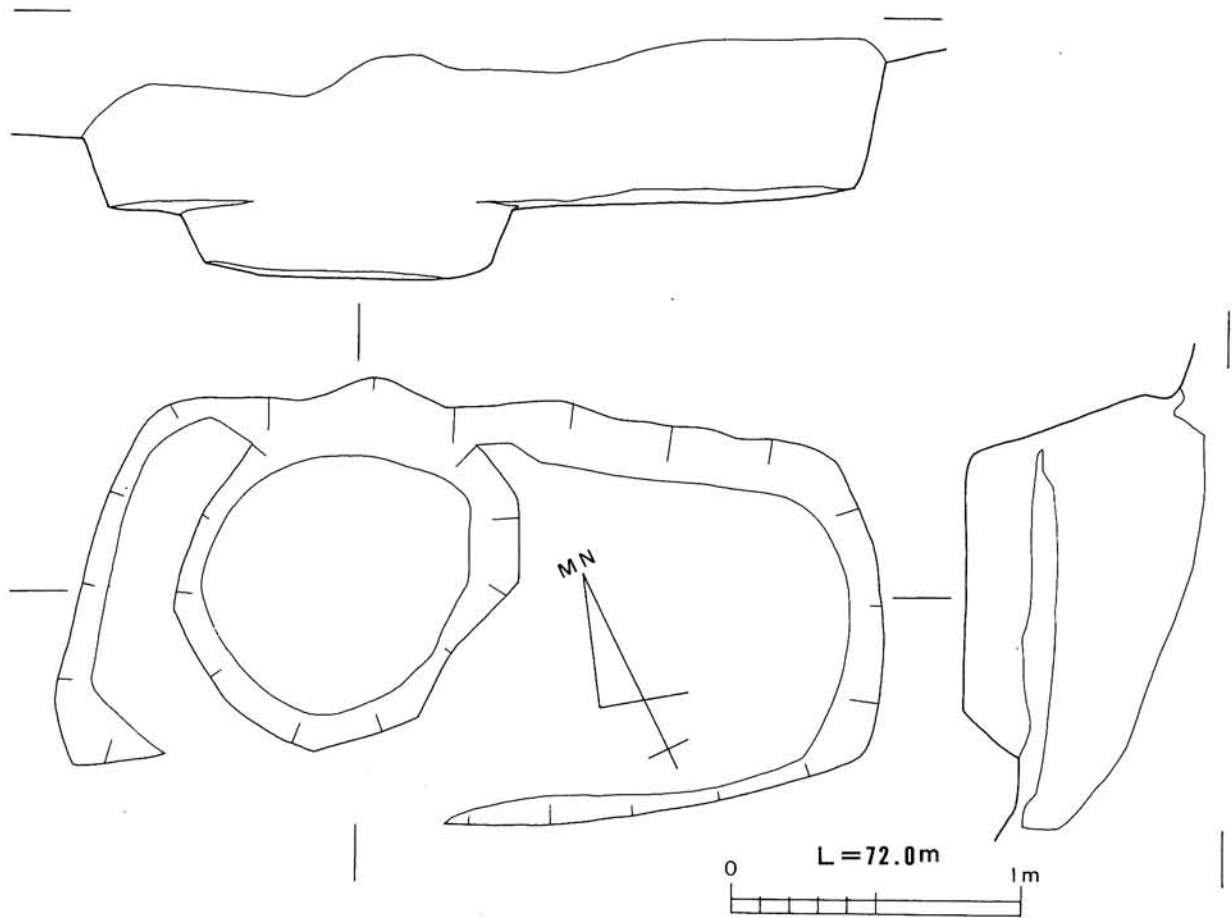
第33図 K24実測図



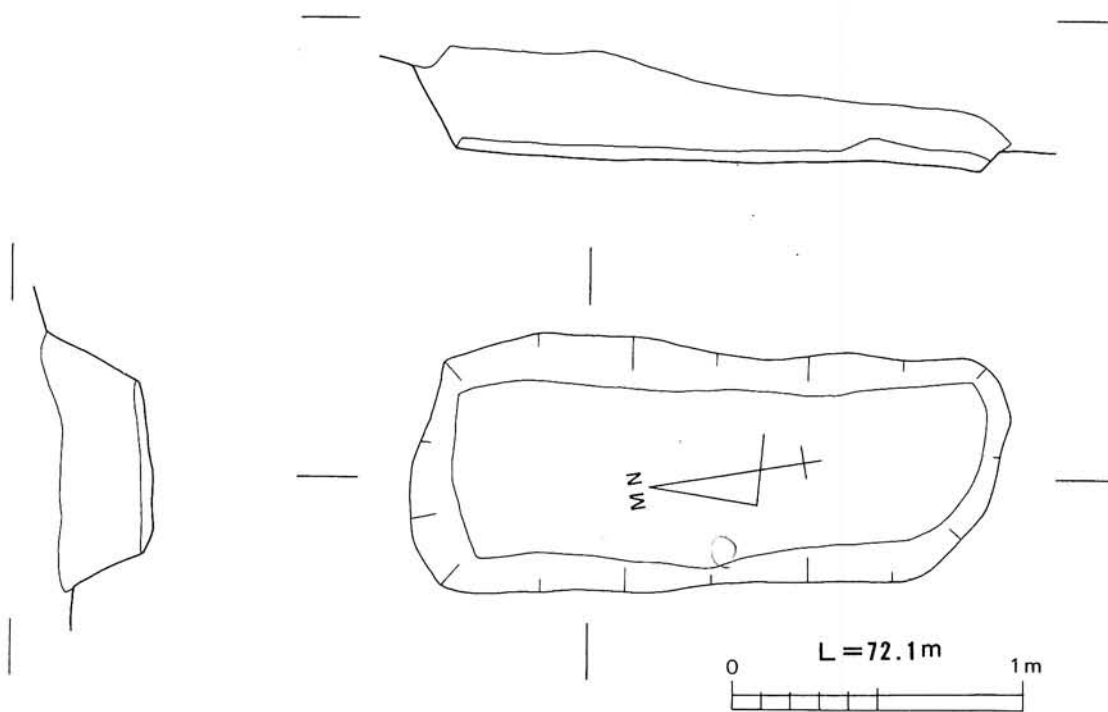
第34図 K25実測図



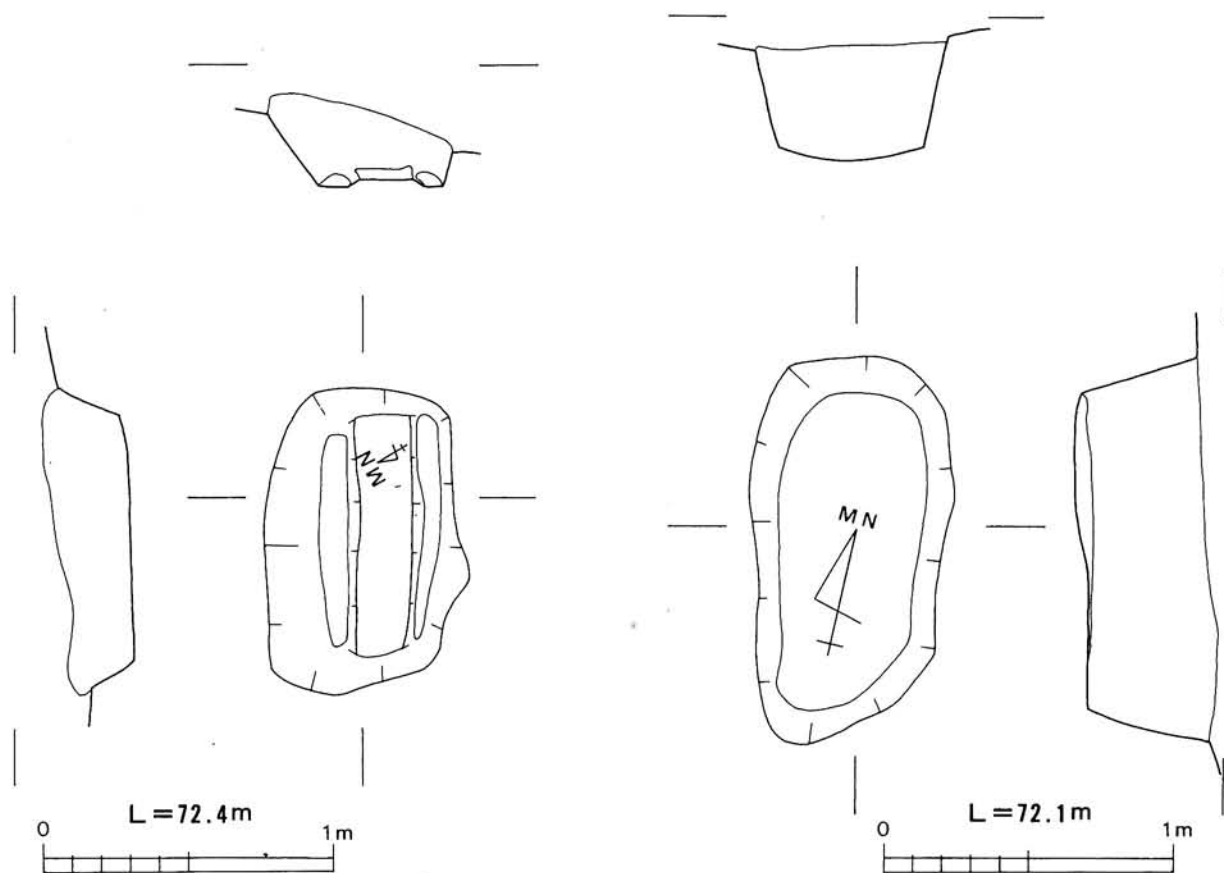
第35図 K26実測図



第36図 K27・S 1実測図

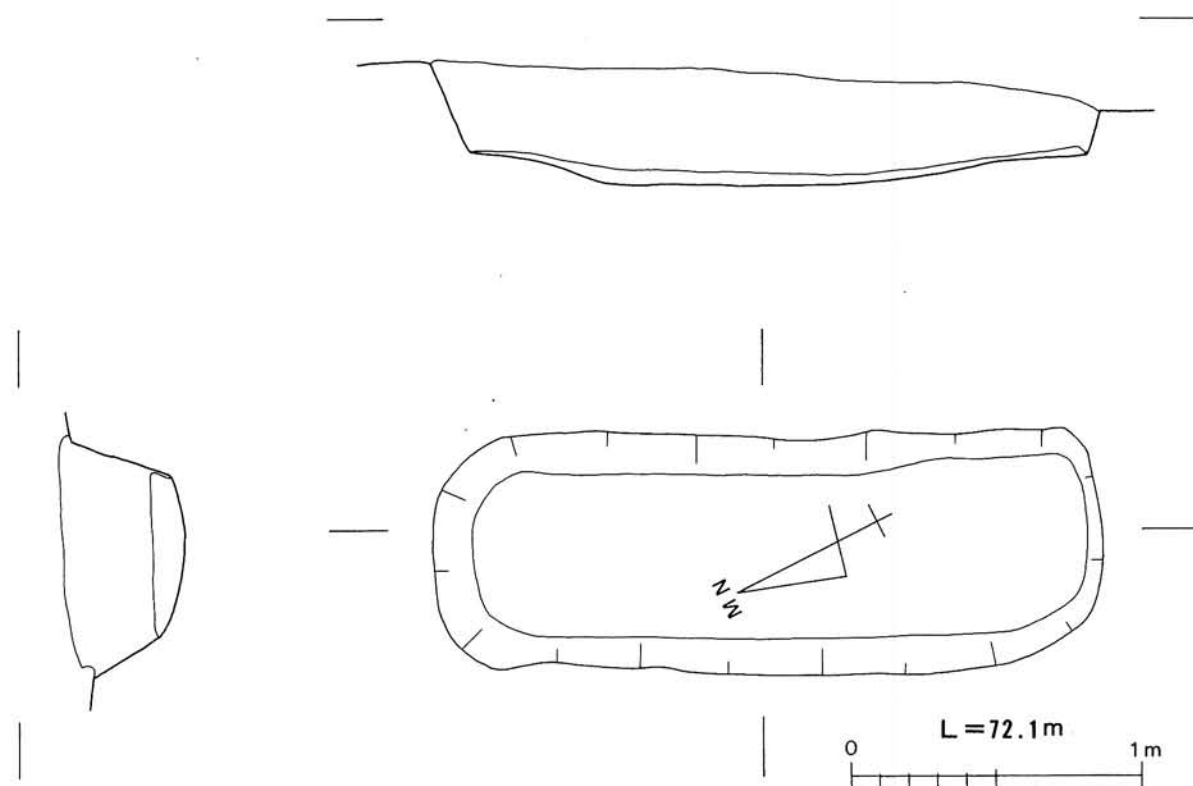


第37図 K28実測図

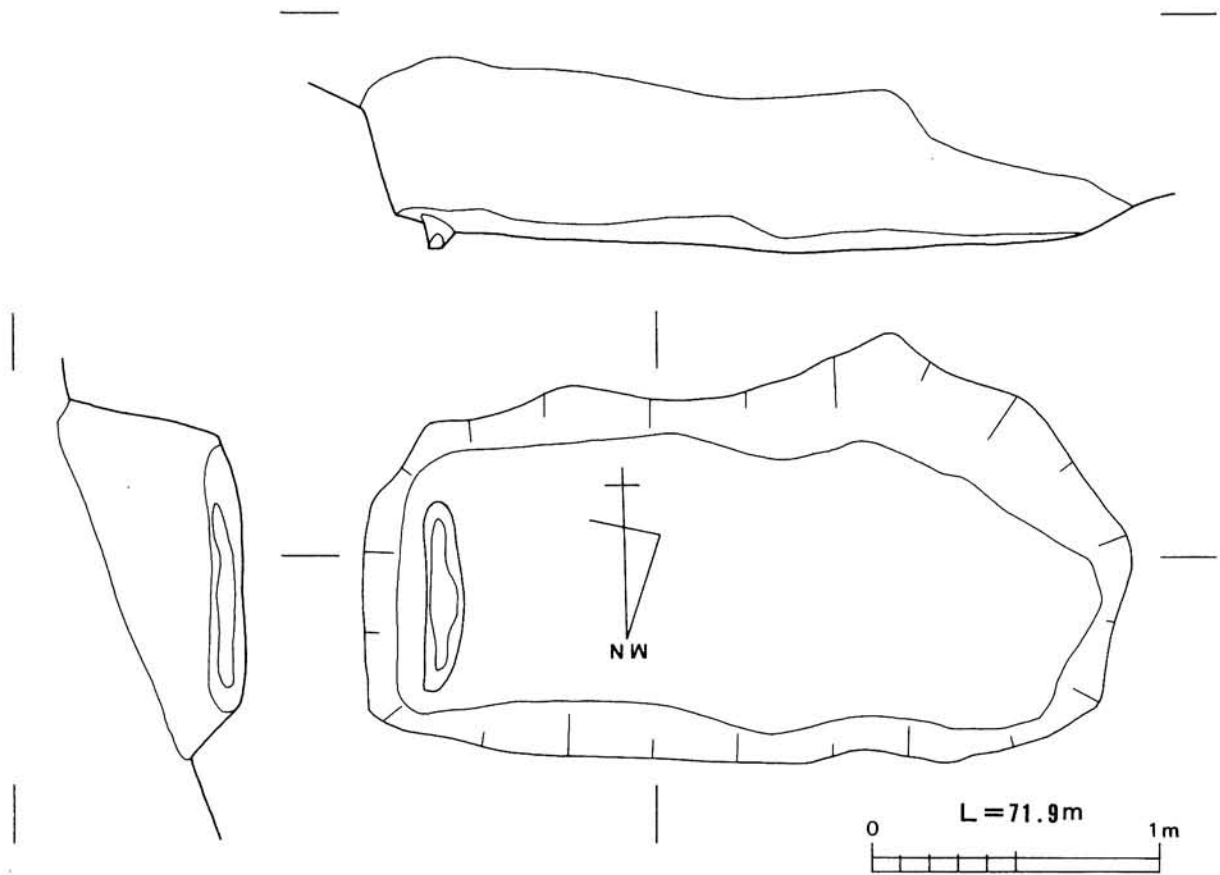


第38図 K29実測図

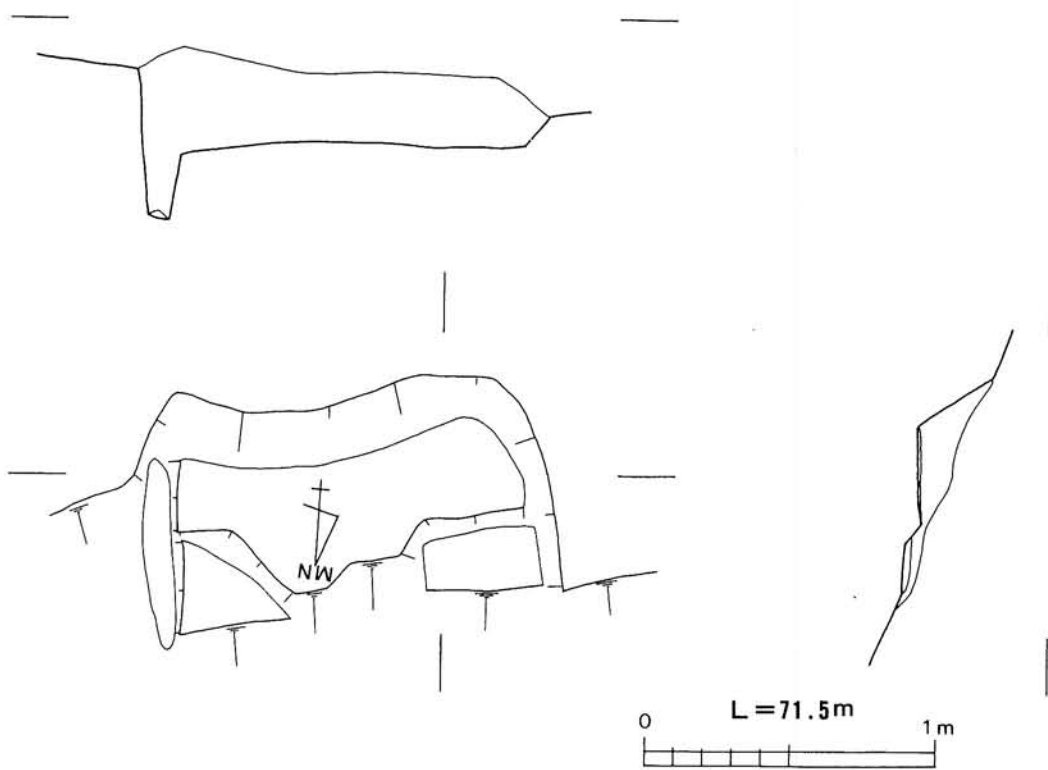
第39図 K30実測図



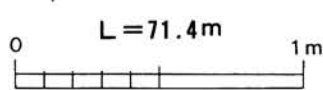
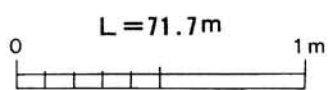
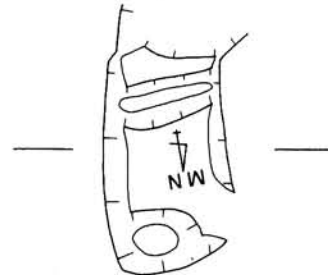
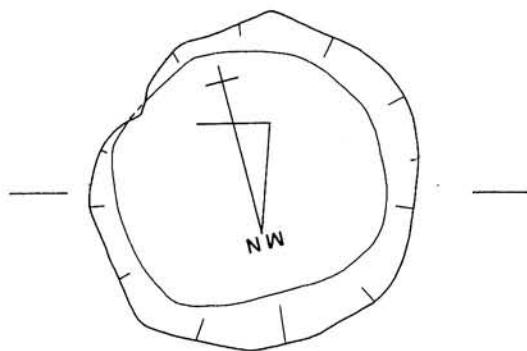
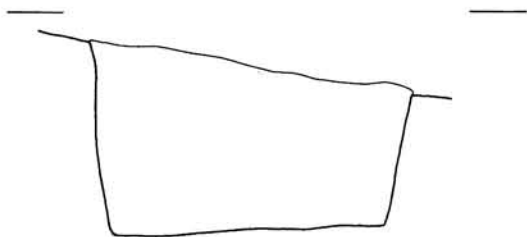
第40図 K31実測図



第41図 K32実測図

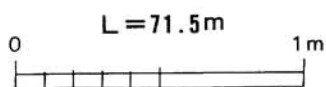
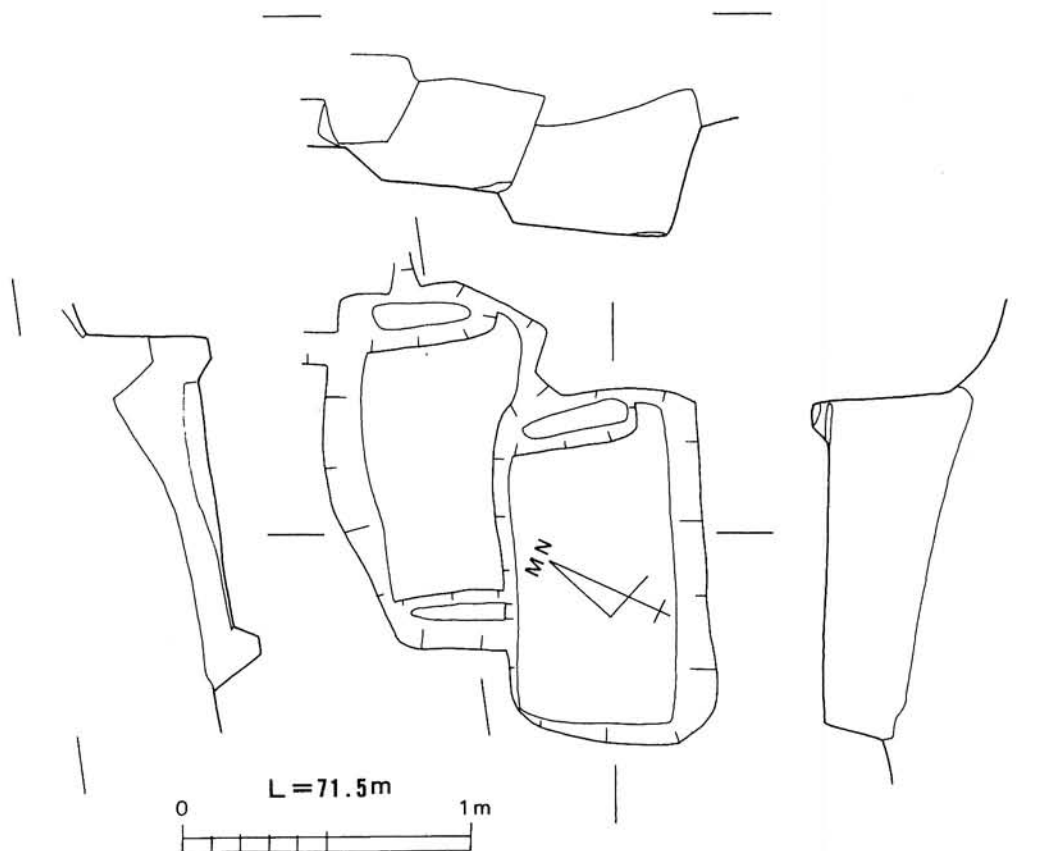


第42図 K33実測図

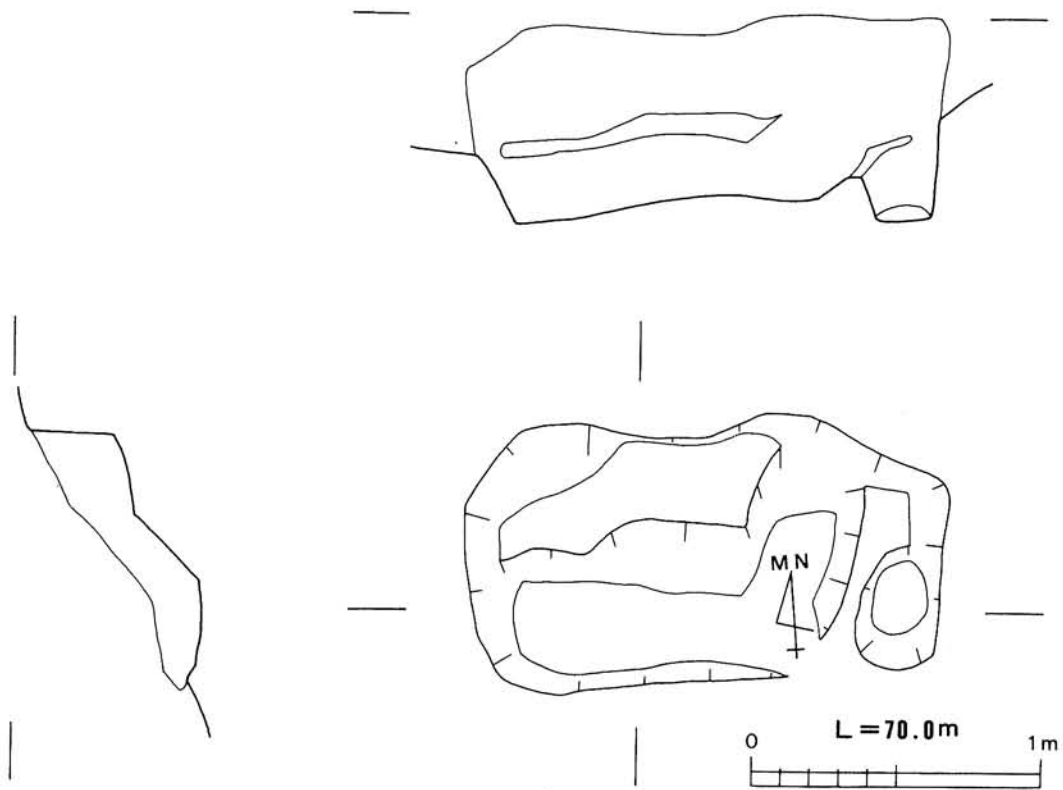


第43図 S 2 実測図

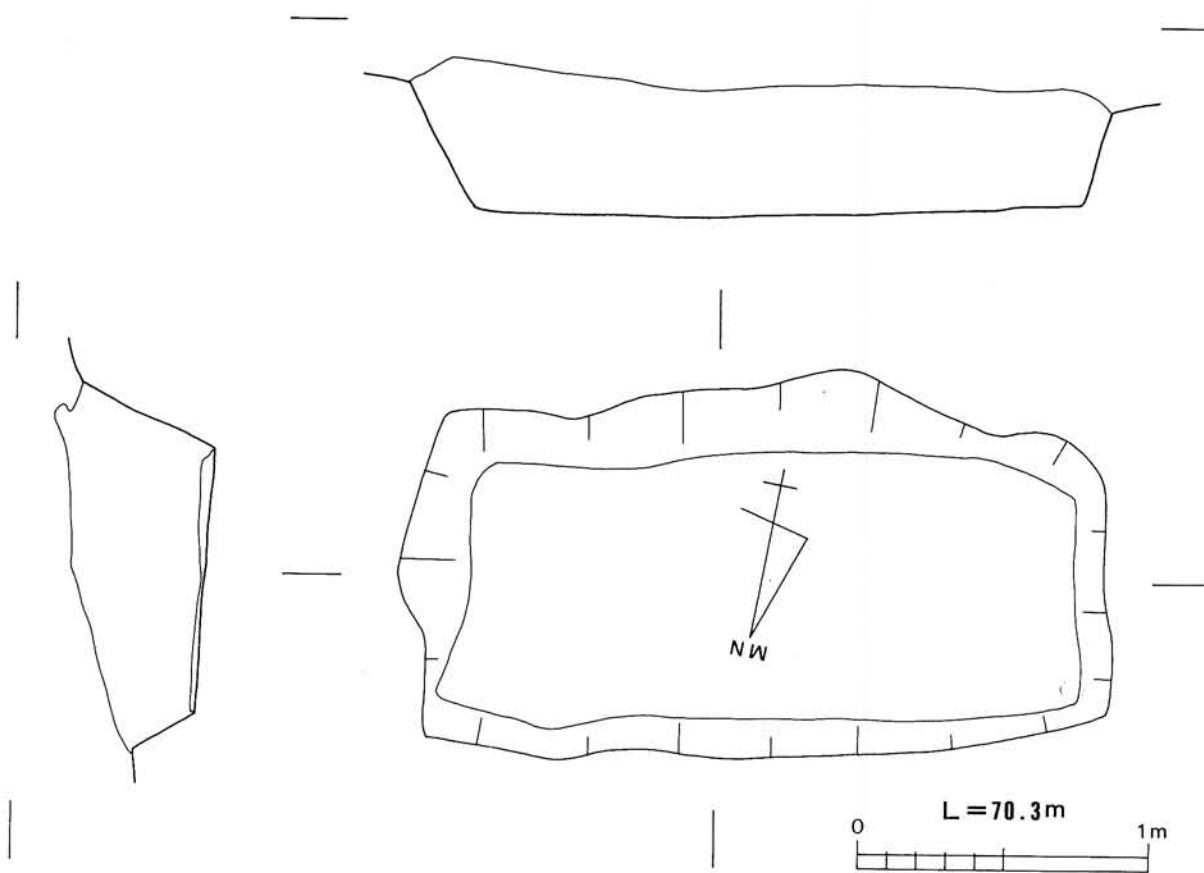
第44図 K34実測図



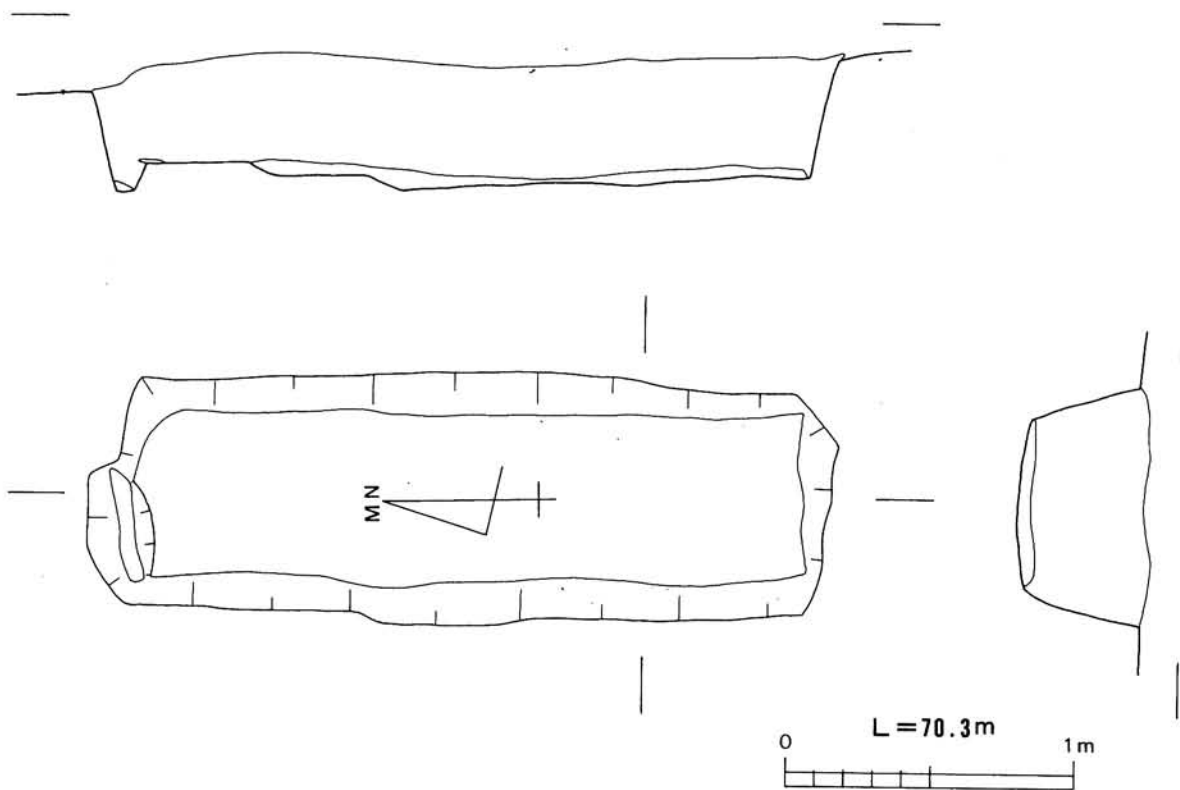
第45図 K35・K36実測図



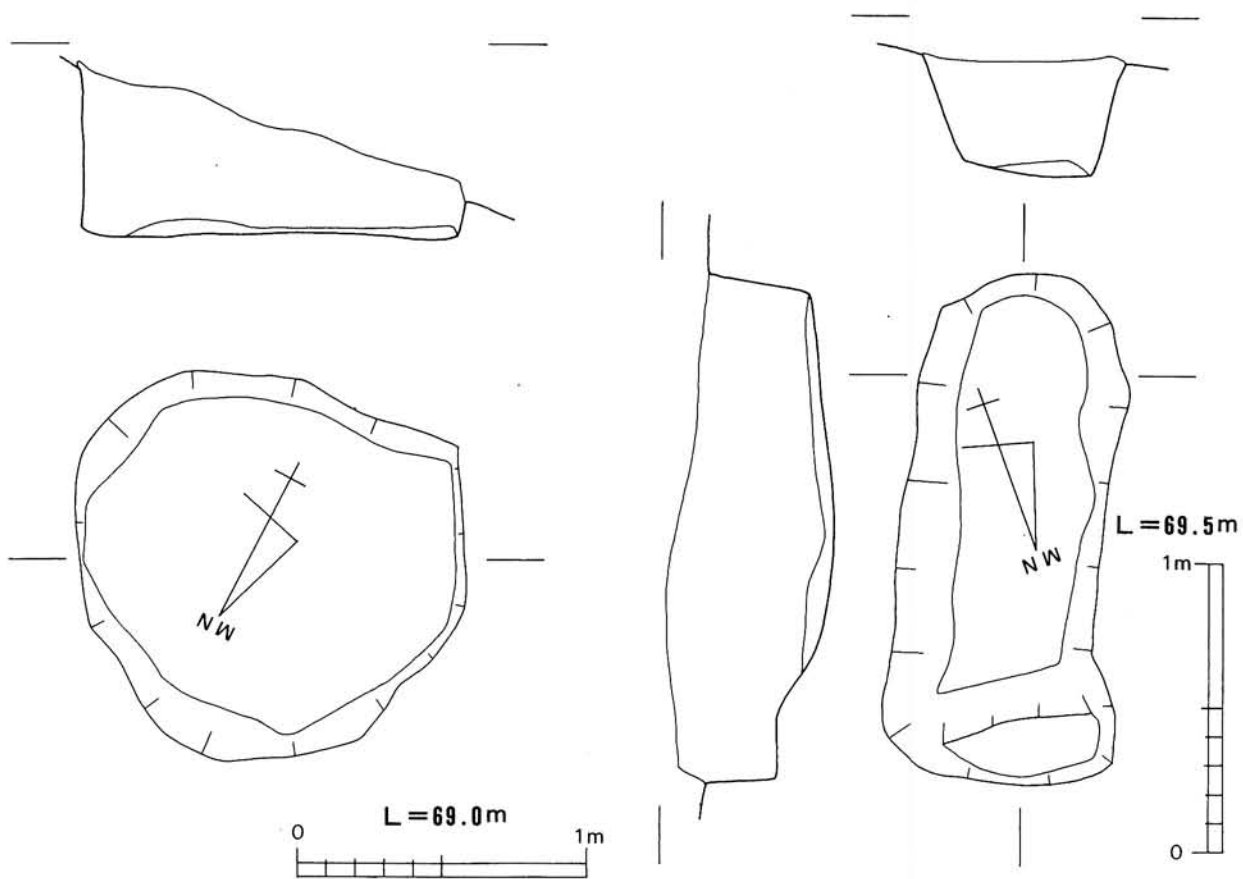
第46図 K37実測図



第47図 K38実測図

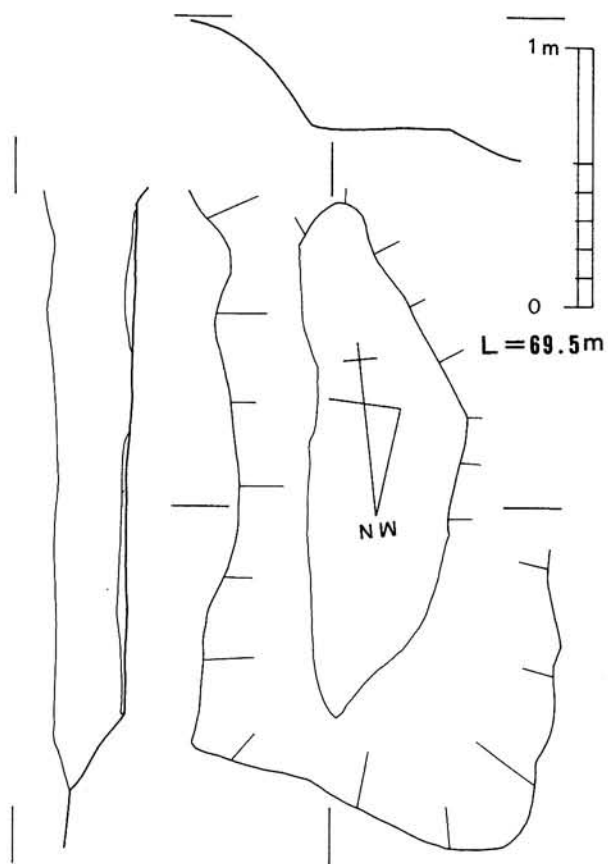


第48図 K39実測図

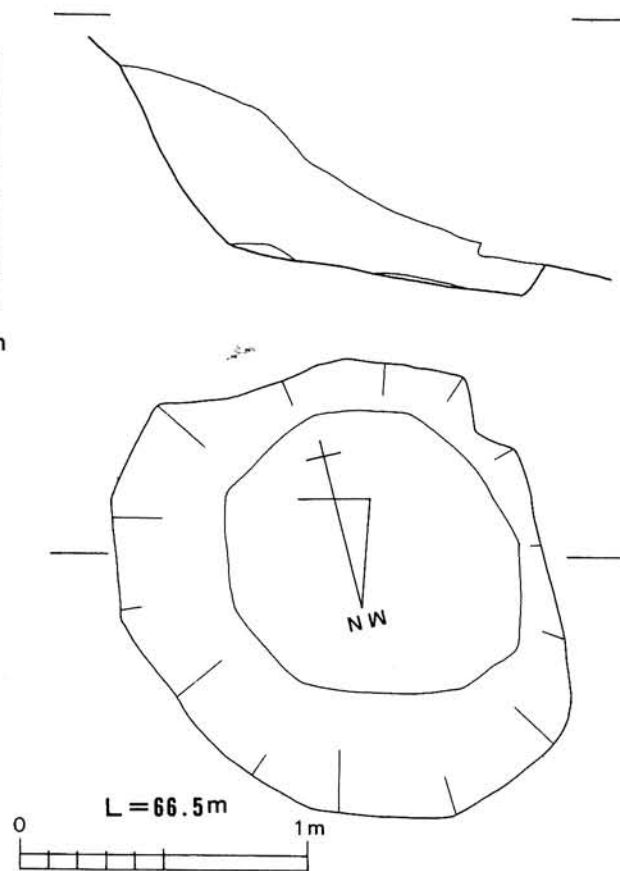


第49図 S 3 実測図

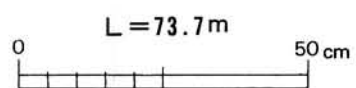
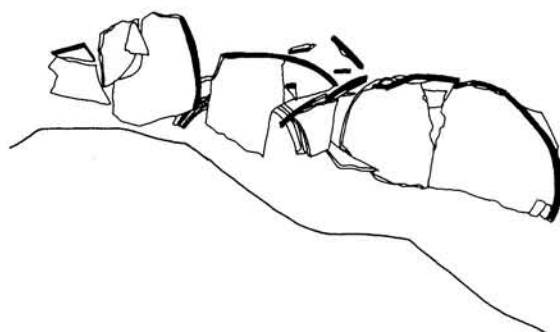
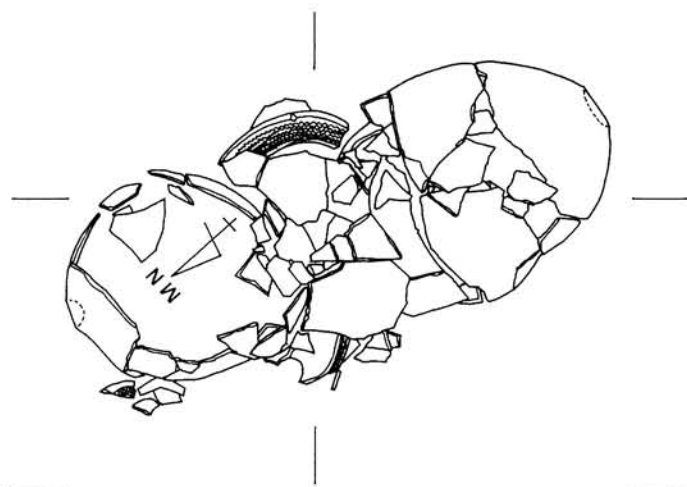
第50図 K40実測図



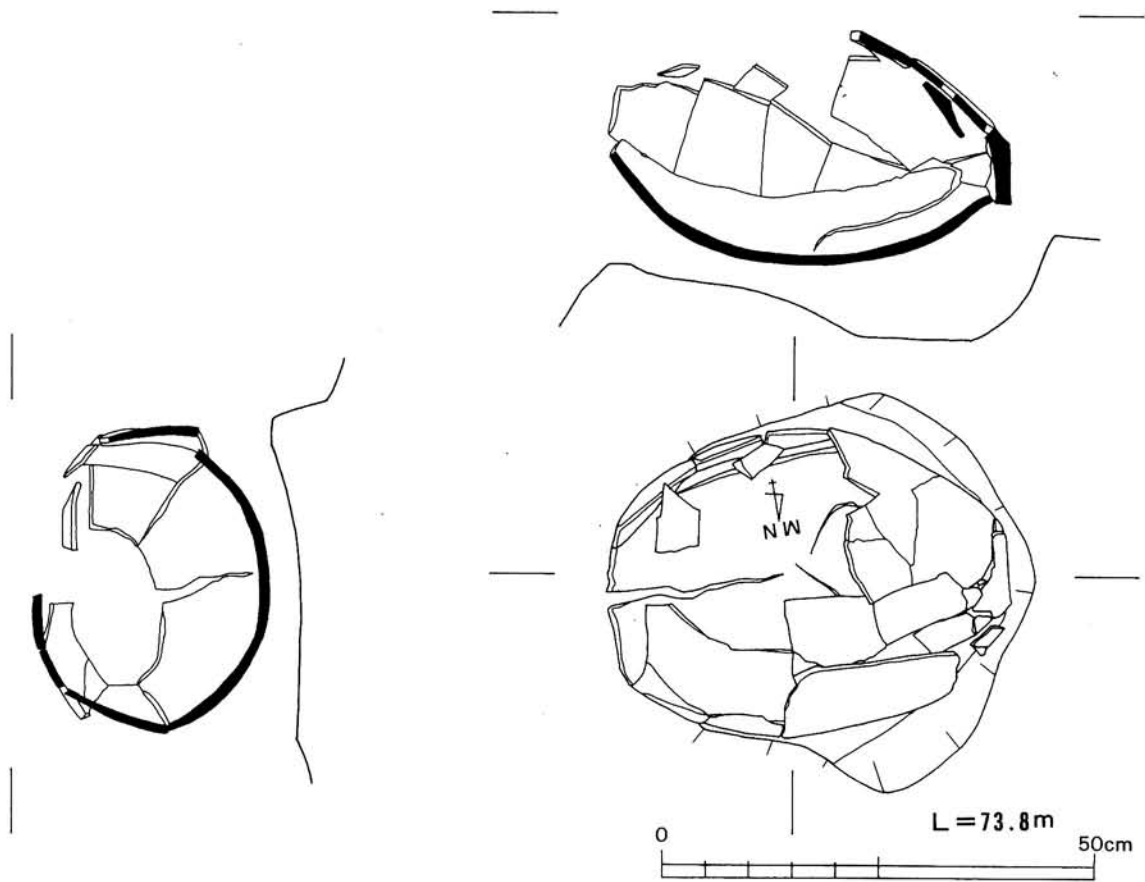
第51図 K41実測図



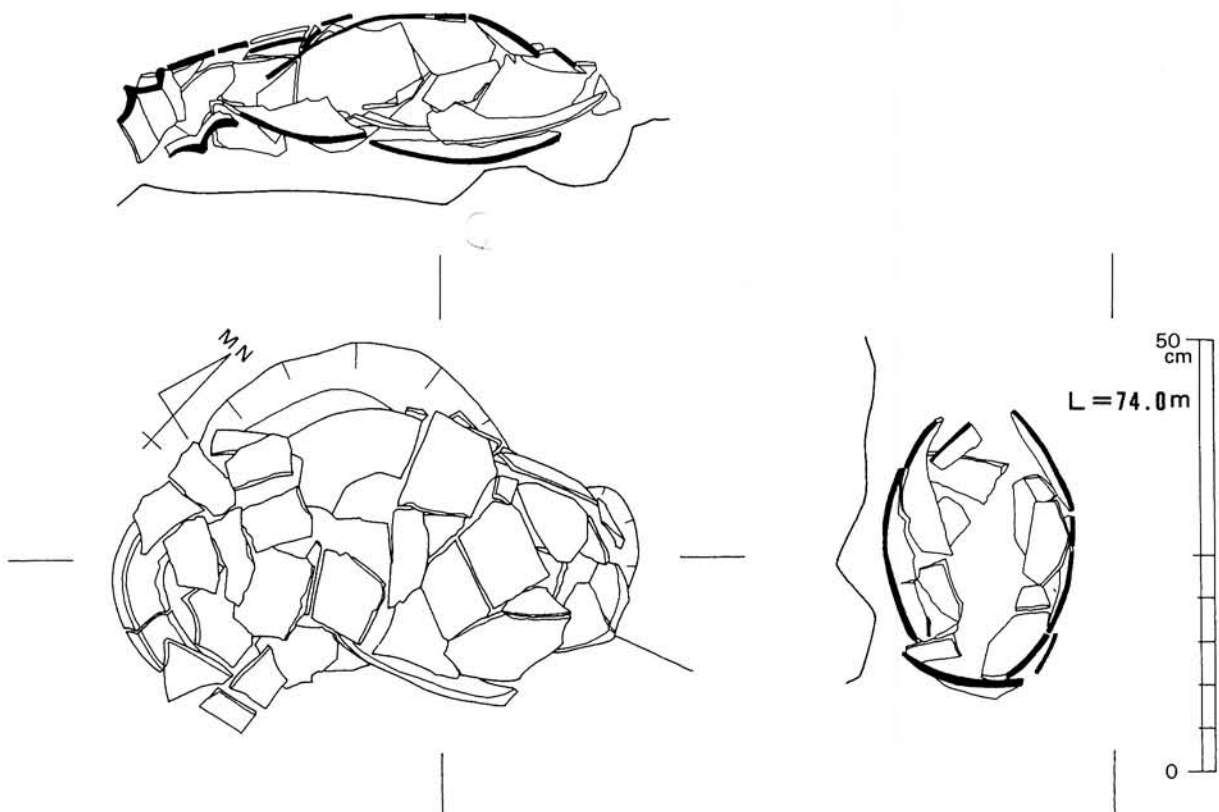
第52図 S4実測図



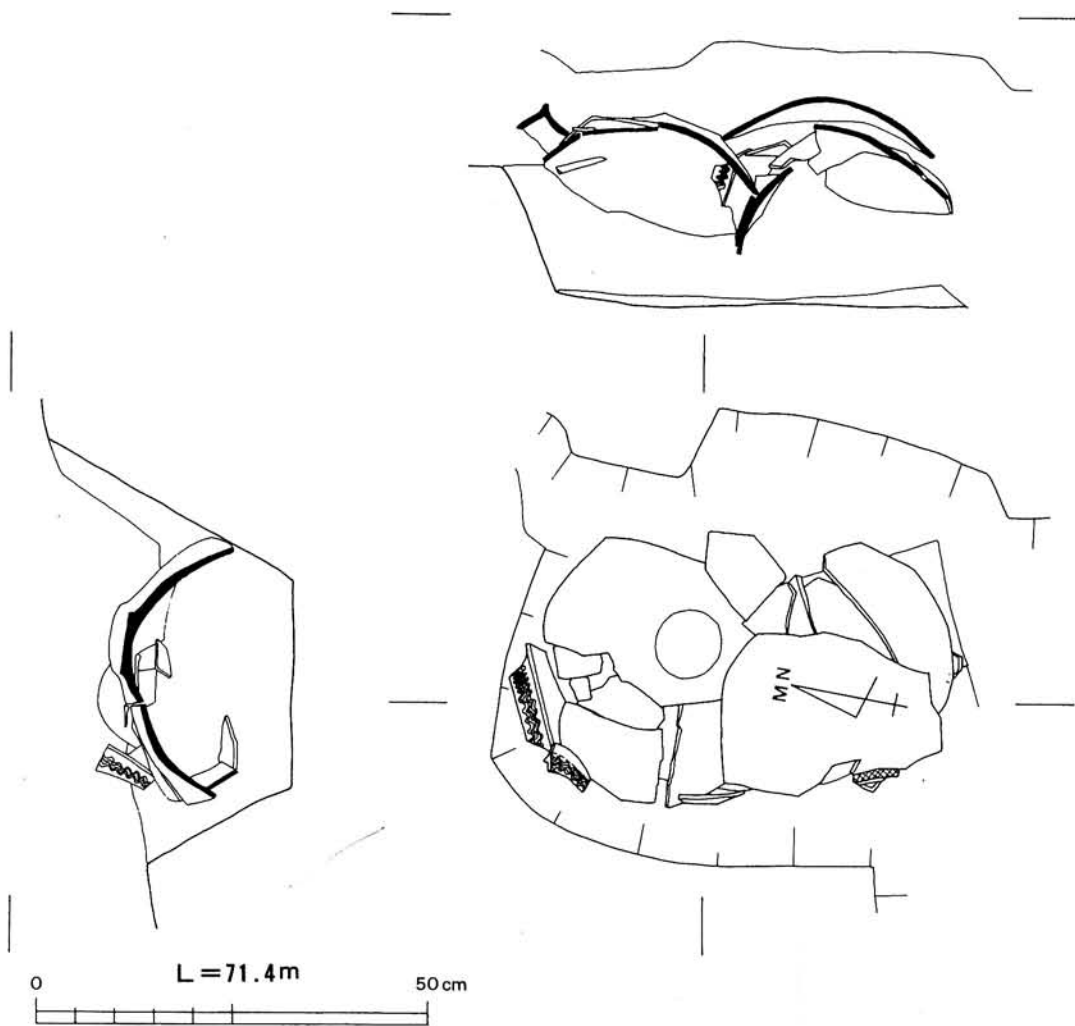
第53図 P o 1 実測図



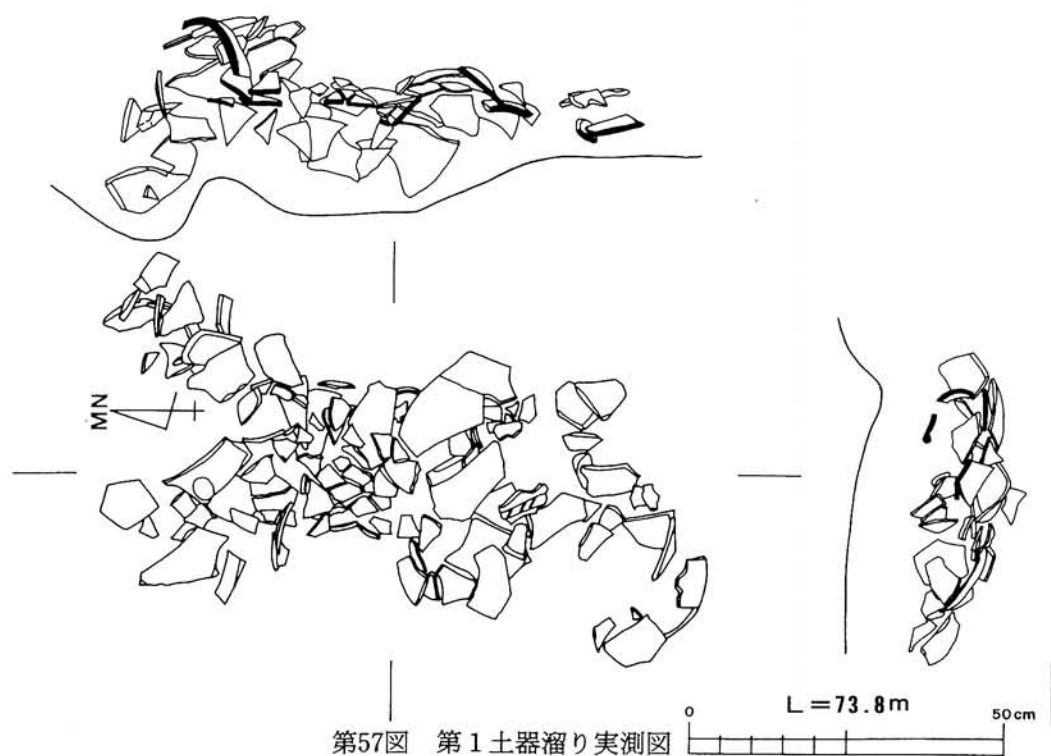
第54図 P o 2 実測図



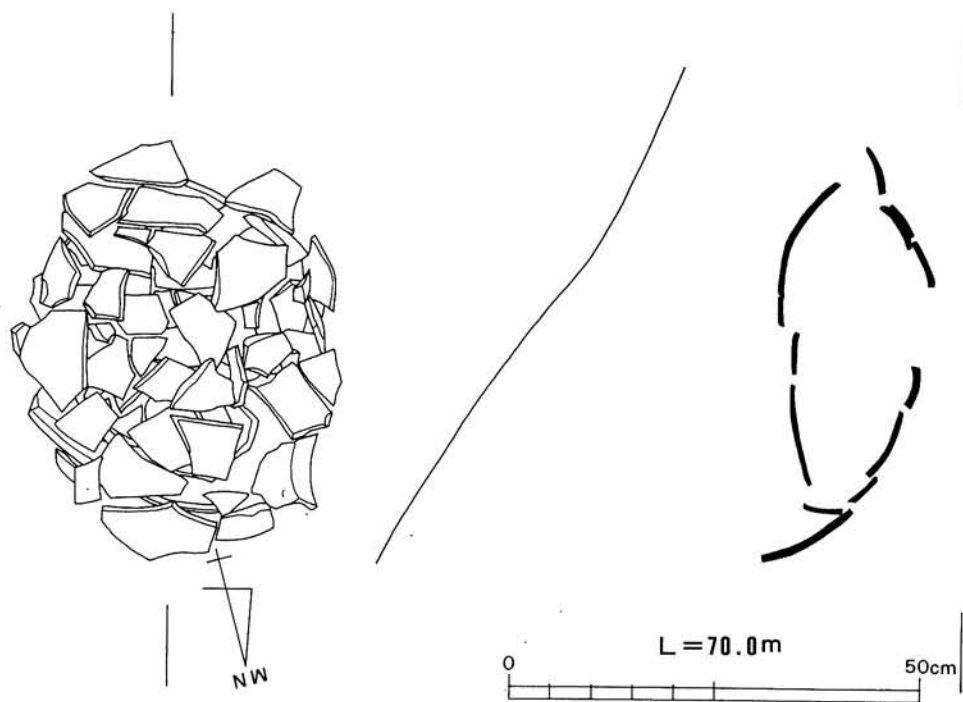
第55図 P o 3 実測図



第56図 P o 4 実測図



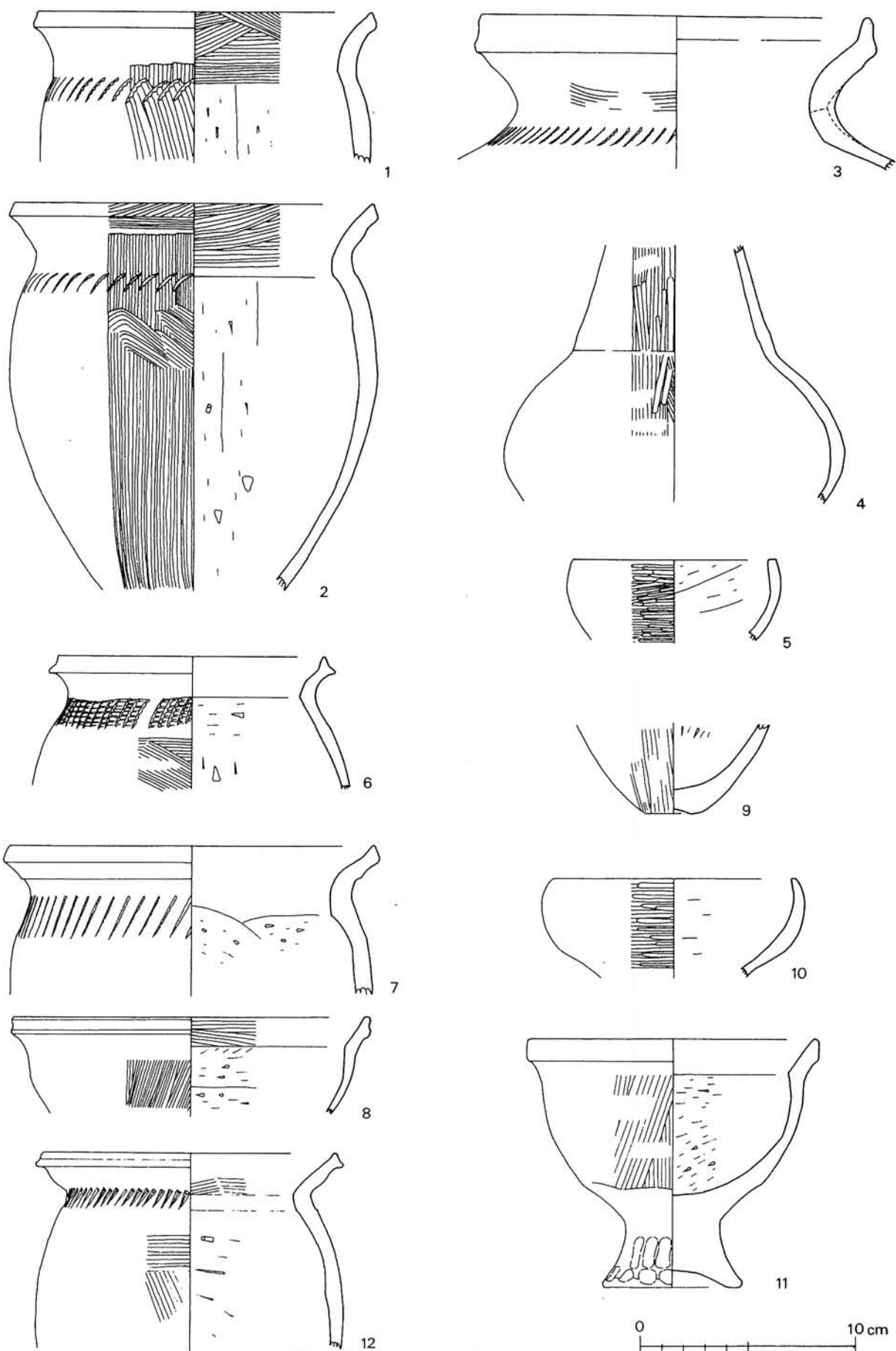
第57図 第1土器溜り実測図



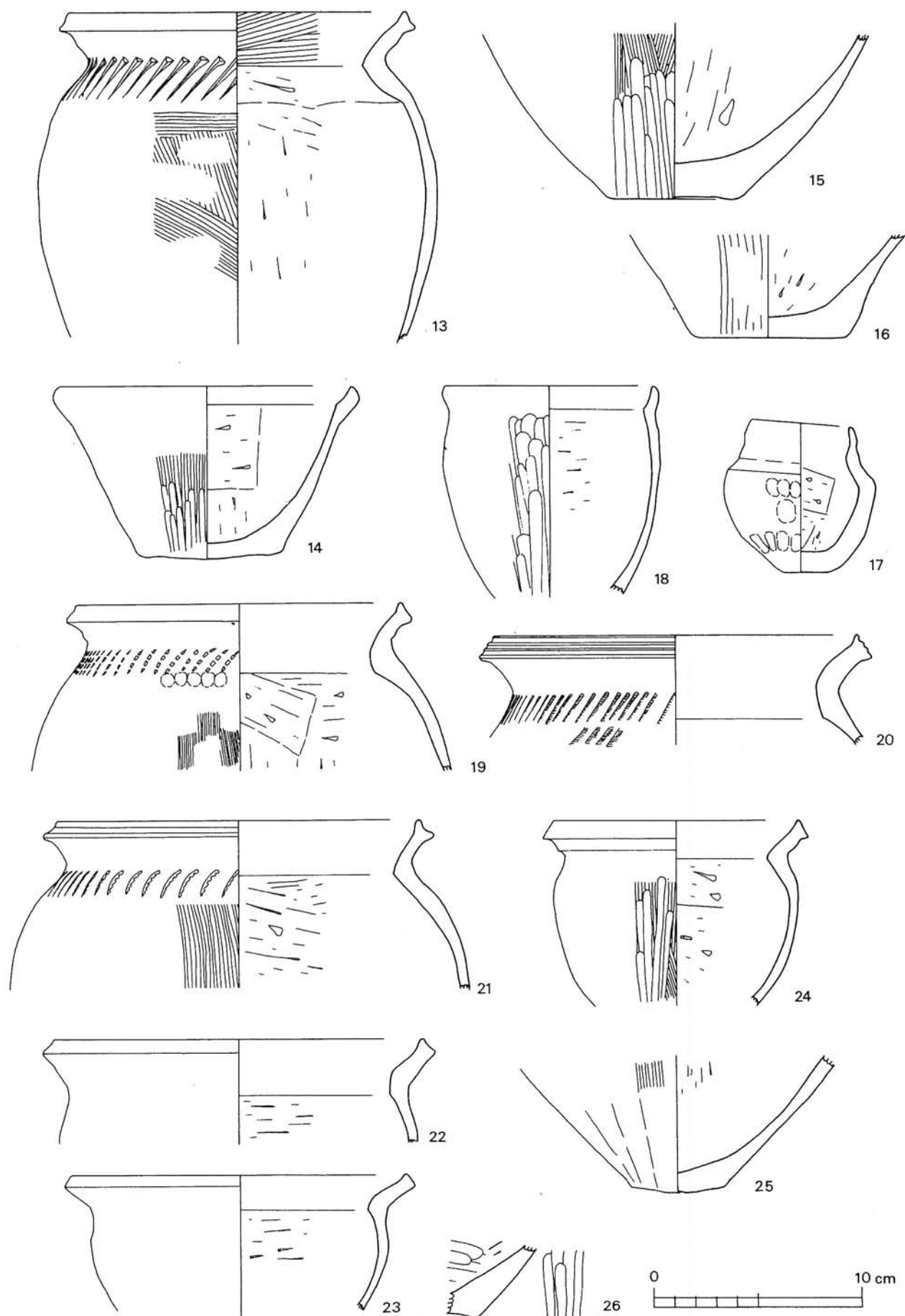
第58図 第2土器溜り実測図



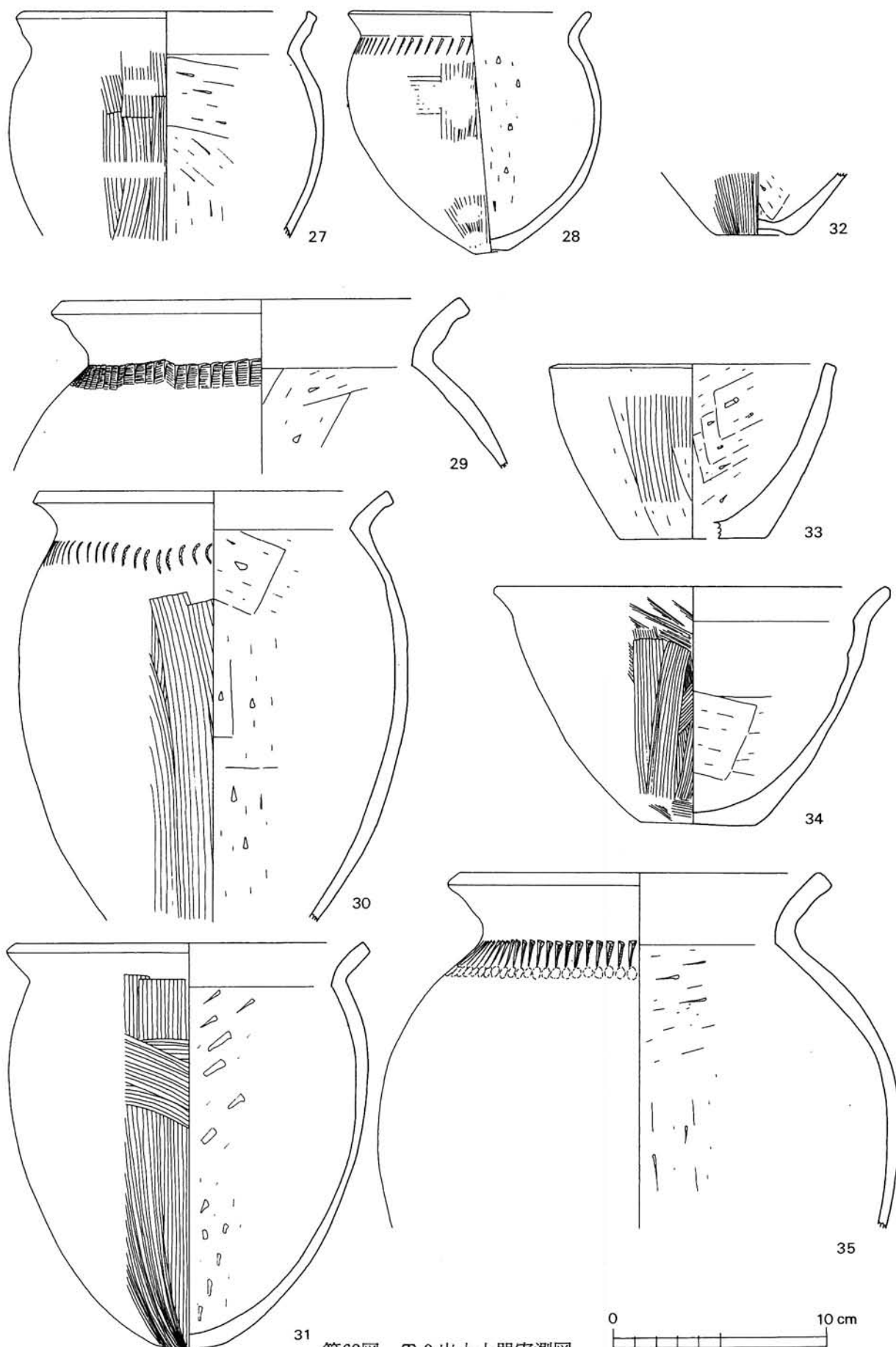
第59図 第3土器溜り実測図



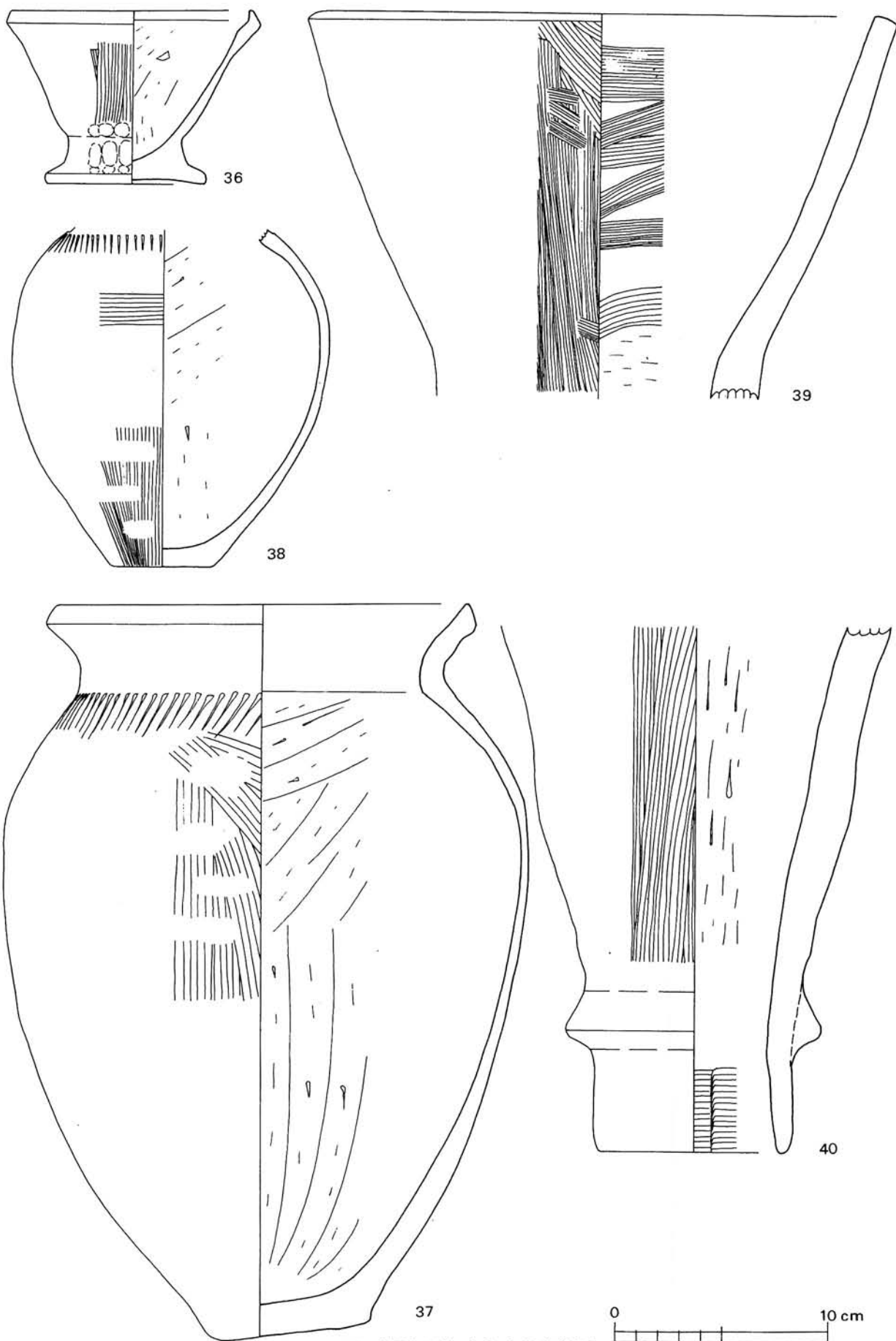
第60図 H 1・H 2 出土土器実測図
—58—



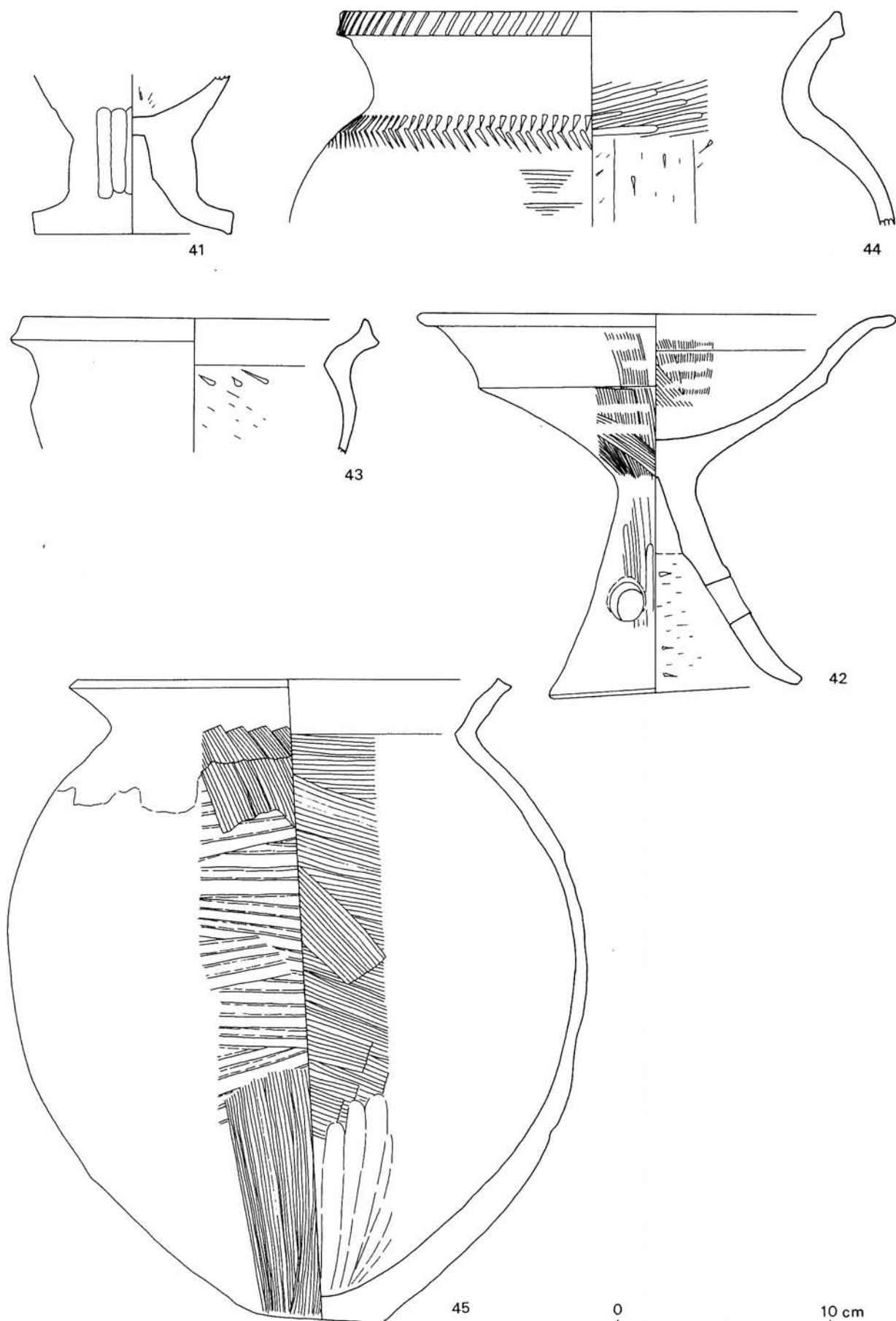
第61図 T 1・T 2 出土土器実測図



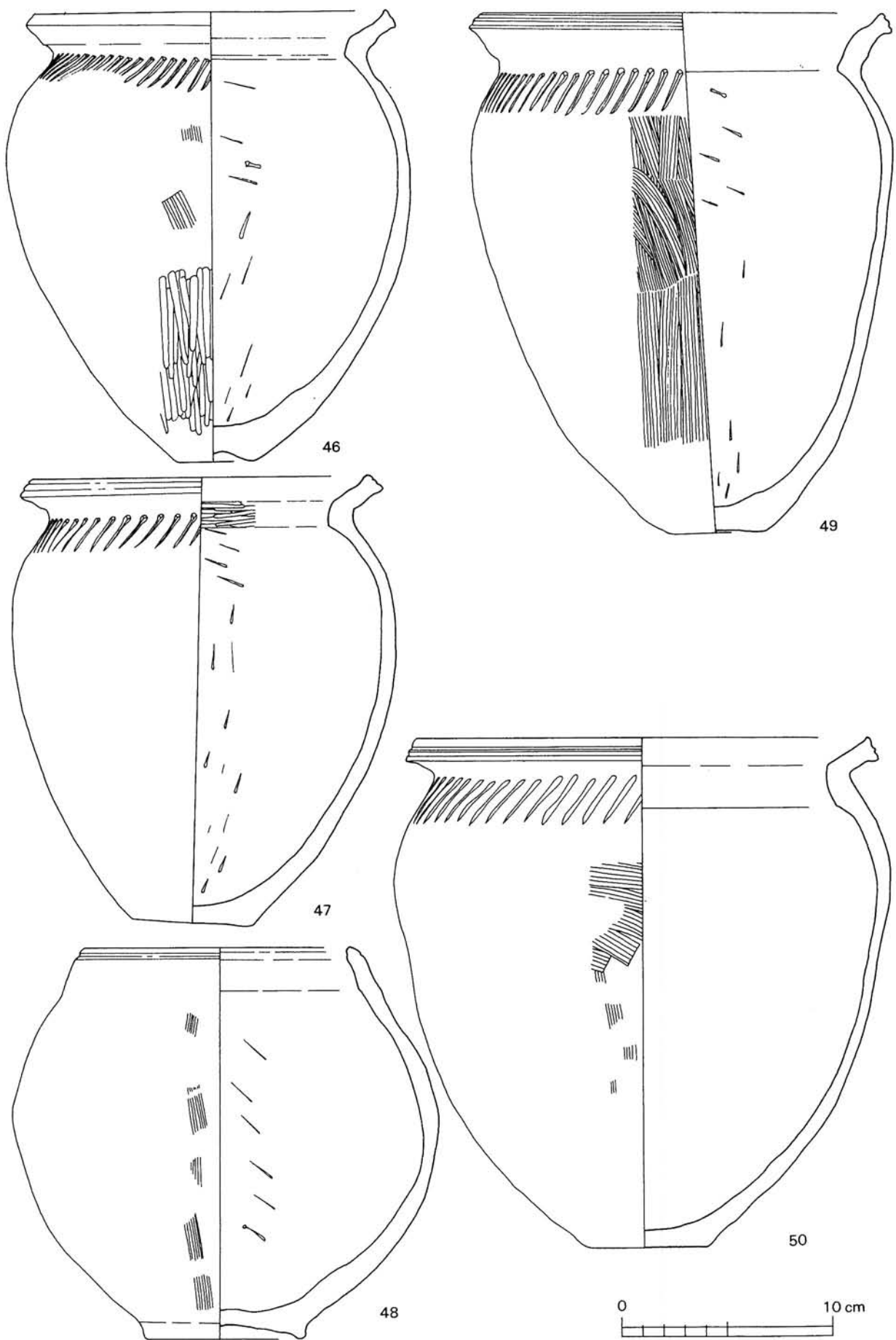
31 第62図 T 3 出土土器実測図



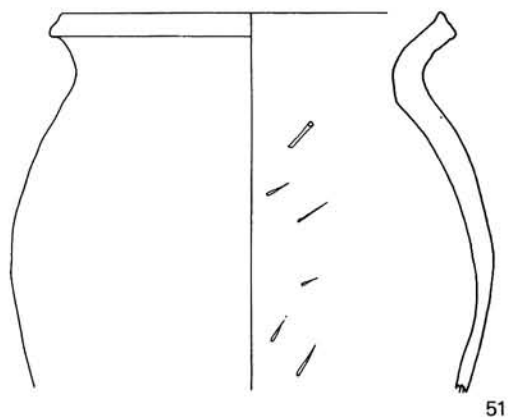
第63図 T 3 及び調査区内出土土器実測図



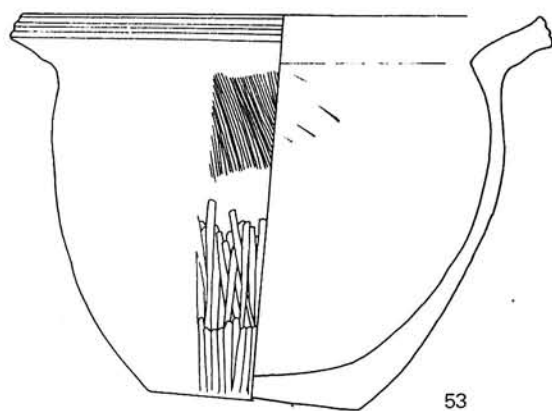
第64図 第2土器溜り及び調査区内出土土器実測図



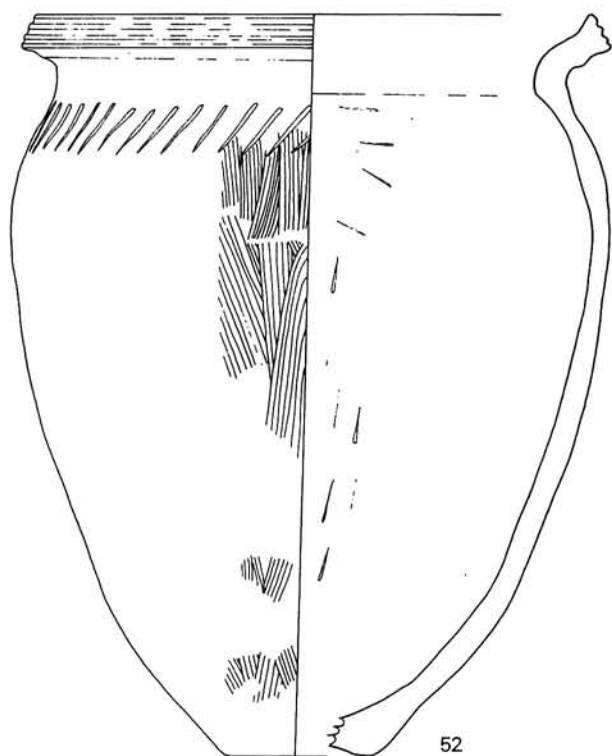
第65図 第3土器溜り及び調査区内出土土器実測図



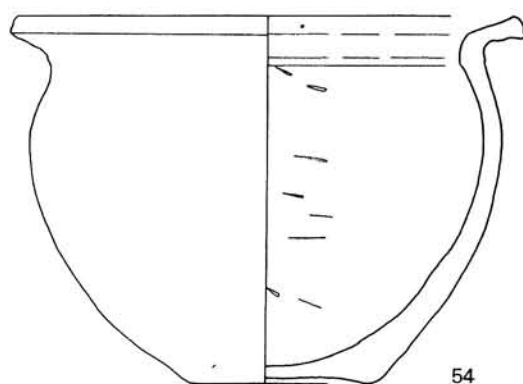
51



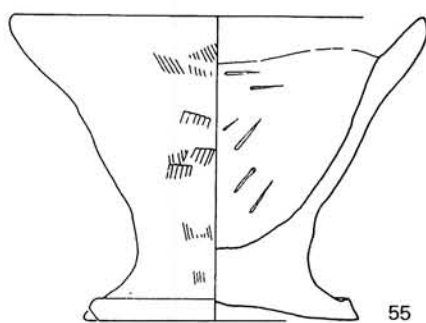
53



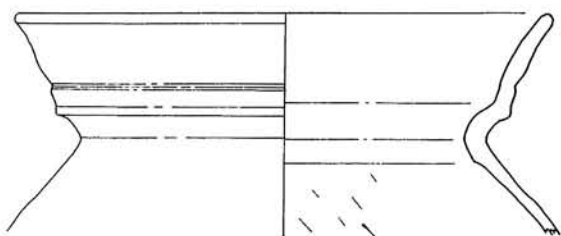
52



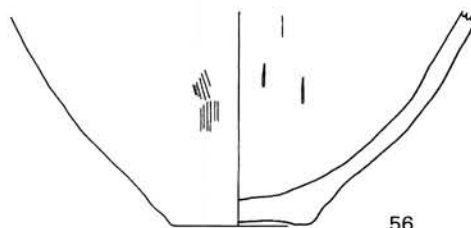
54



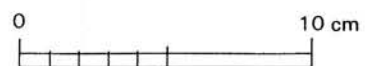
55



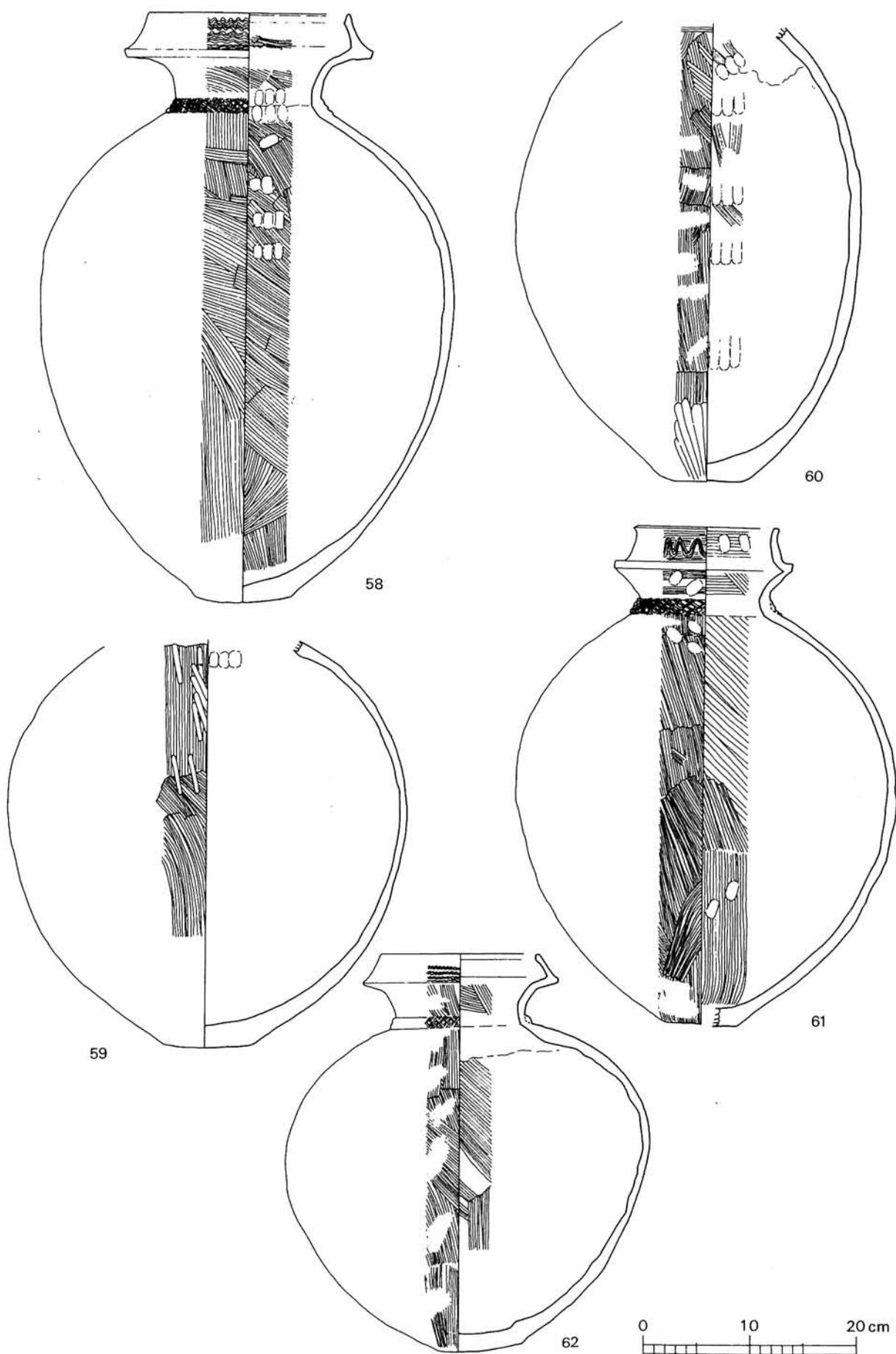
57



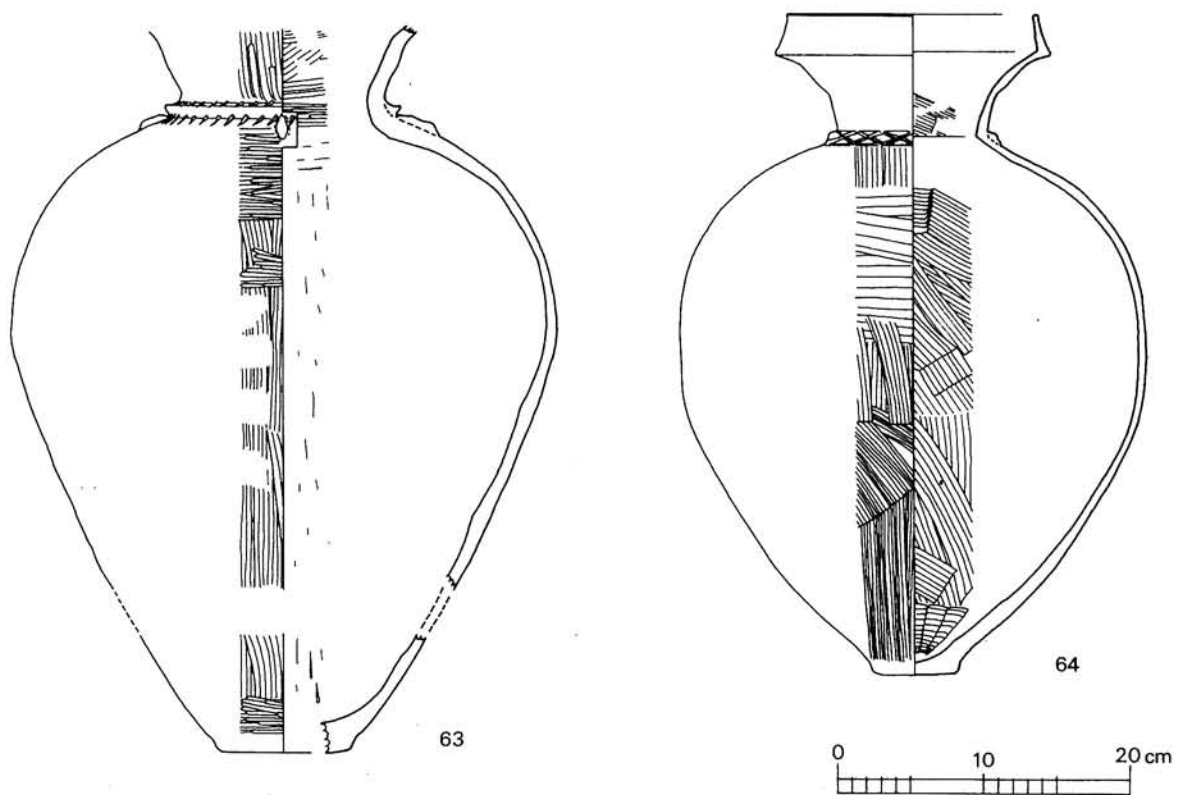
56



第66図 第3土器溜り及び調査区内出土土器実測図



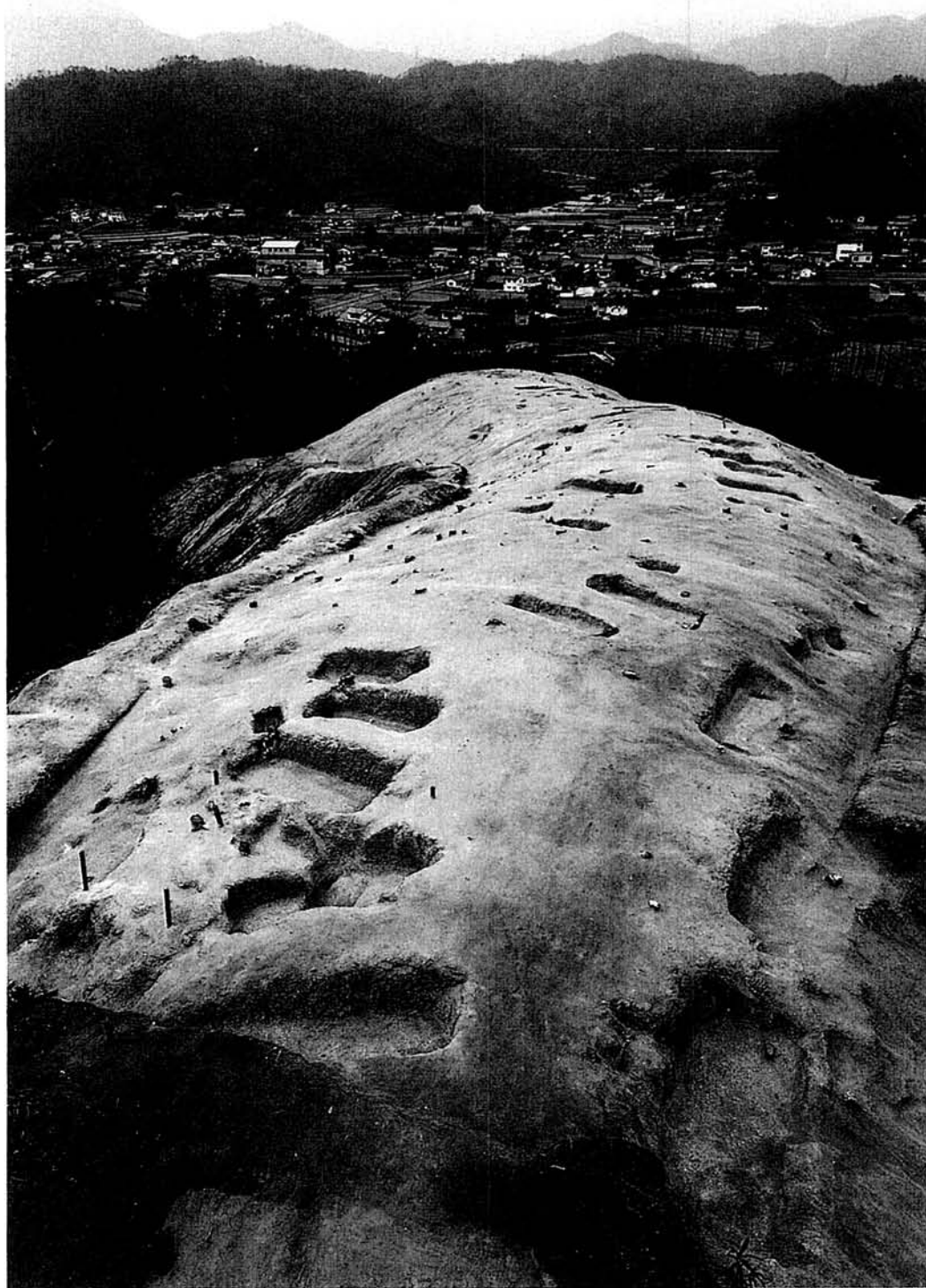
第67図 P o 1 ~ P o 4 出土土器実測図



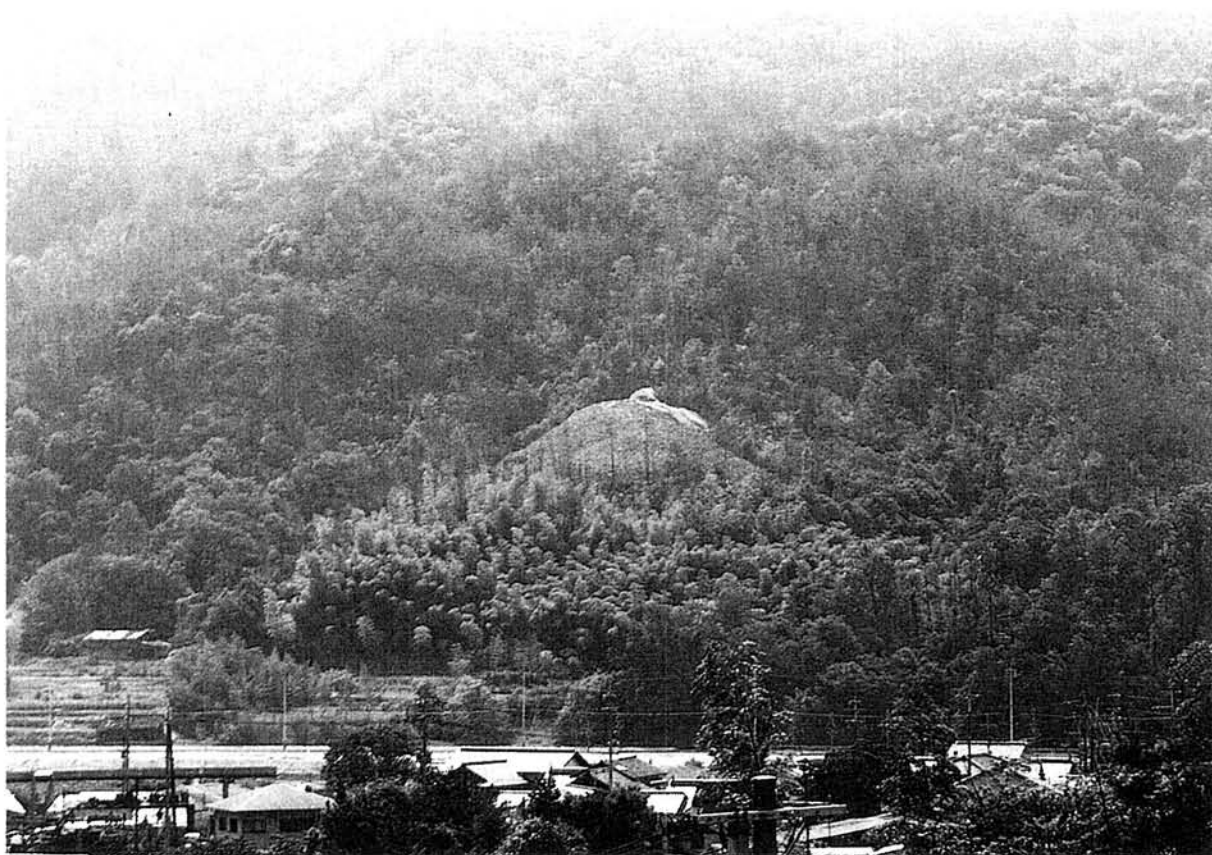
第68図 第1土器溜り出土土器実測図



平尾遺跡全景（東から・調査後・航空写真）



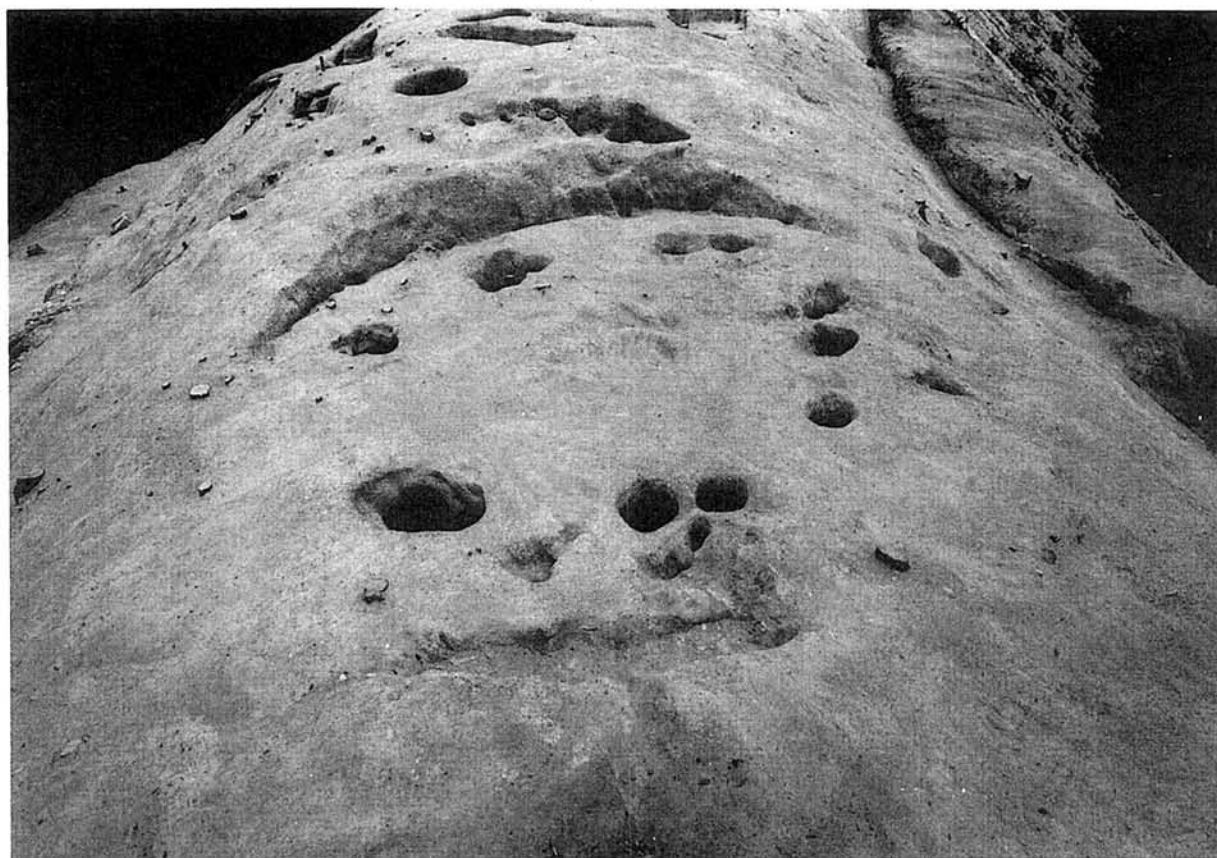
平尾遺跡近景（東から・調査後）



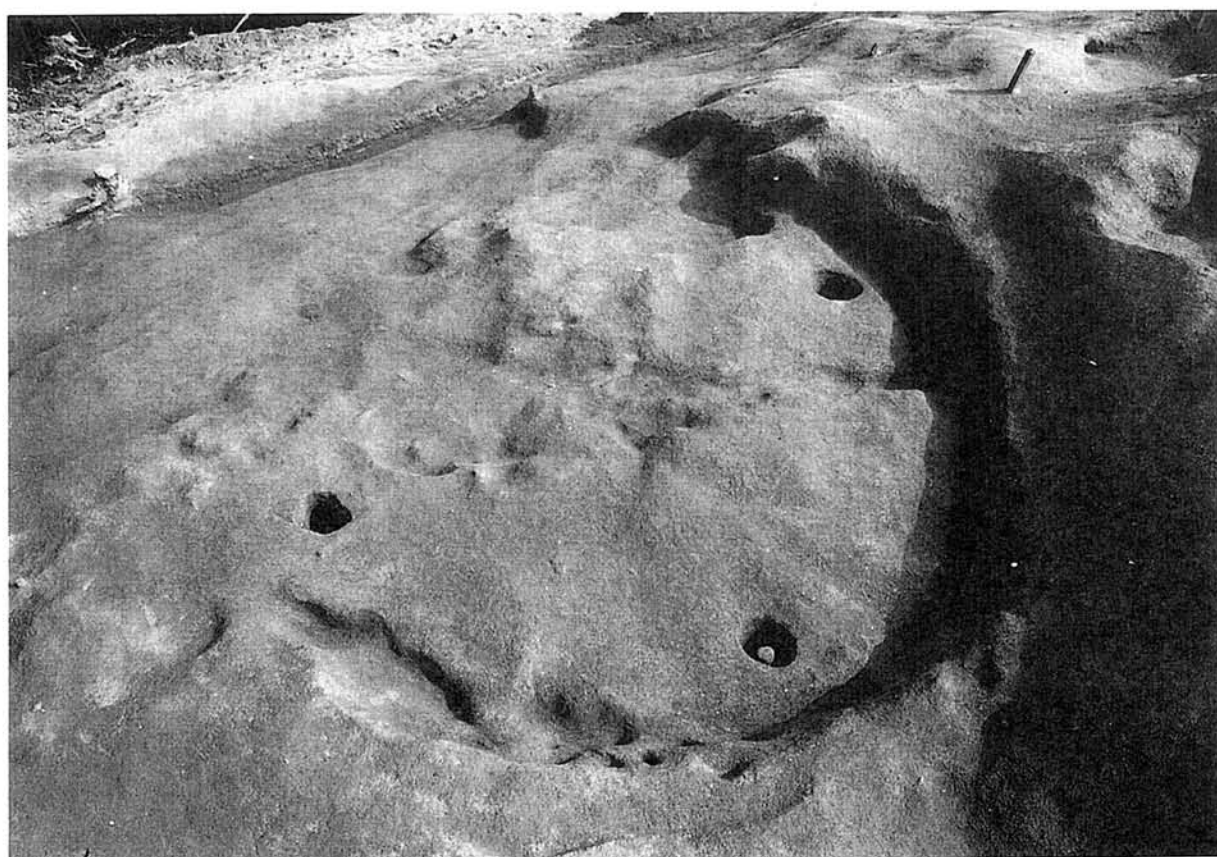
a. 平尾遺跡遠景（西から・調査前）



b. 平尾遺跡近景（東から・調査前）



a. H 1



b. H 2



a. T 1



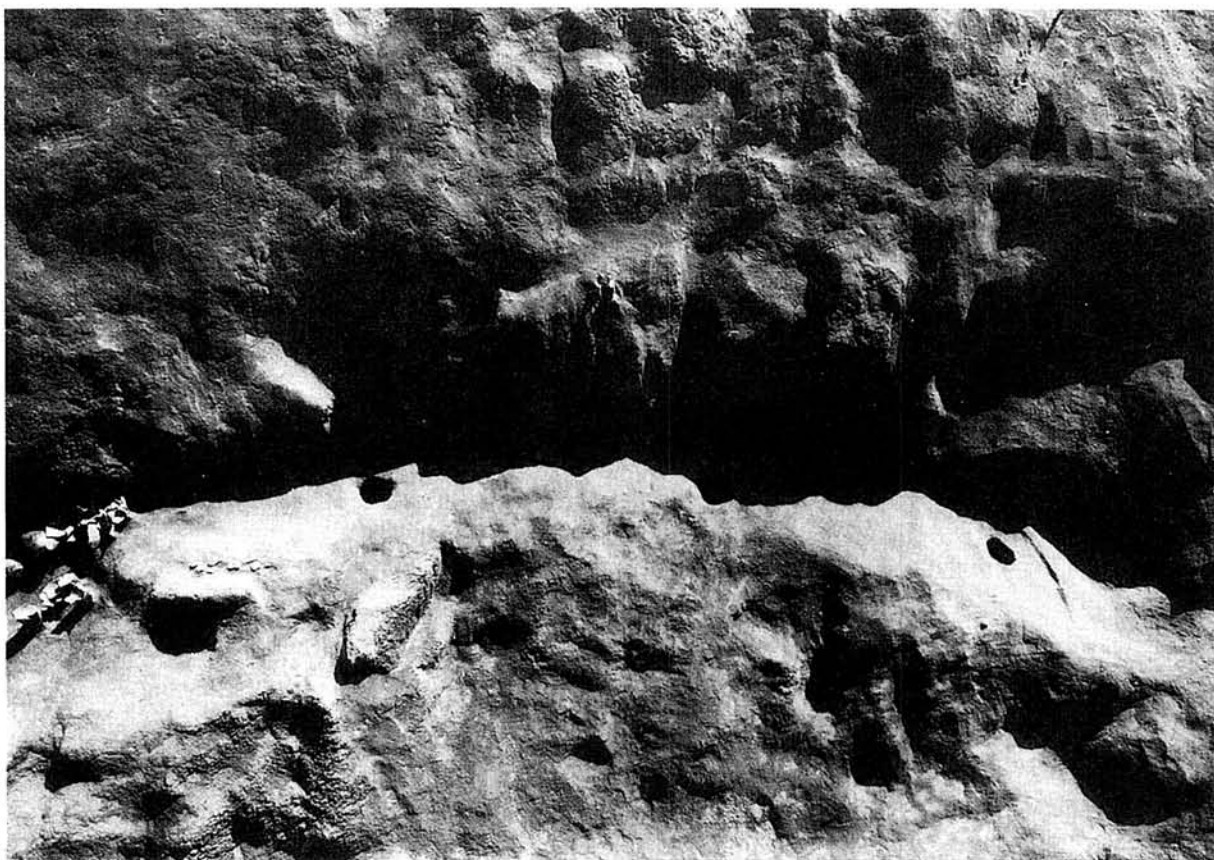
b. T 2



a. T 2 烧土



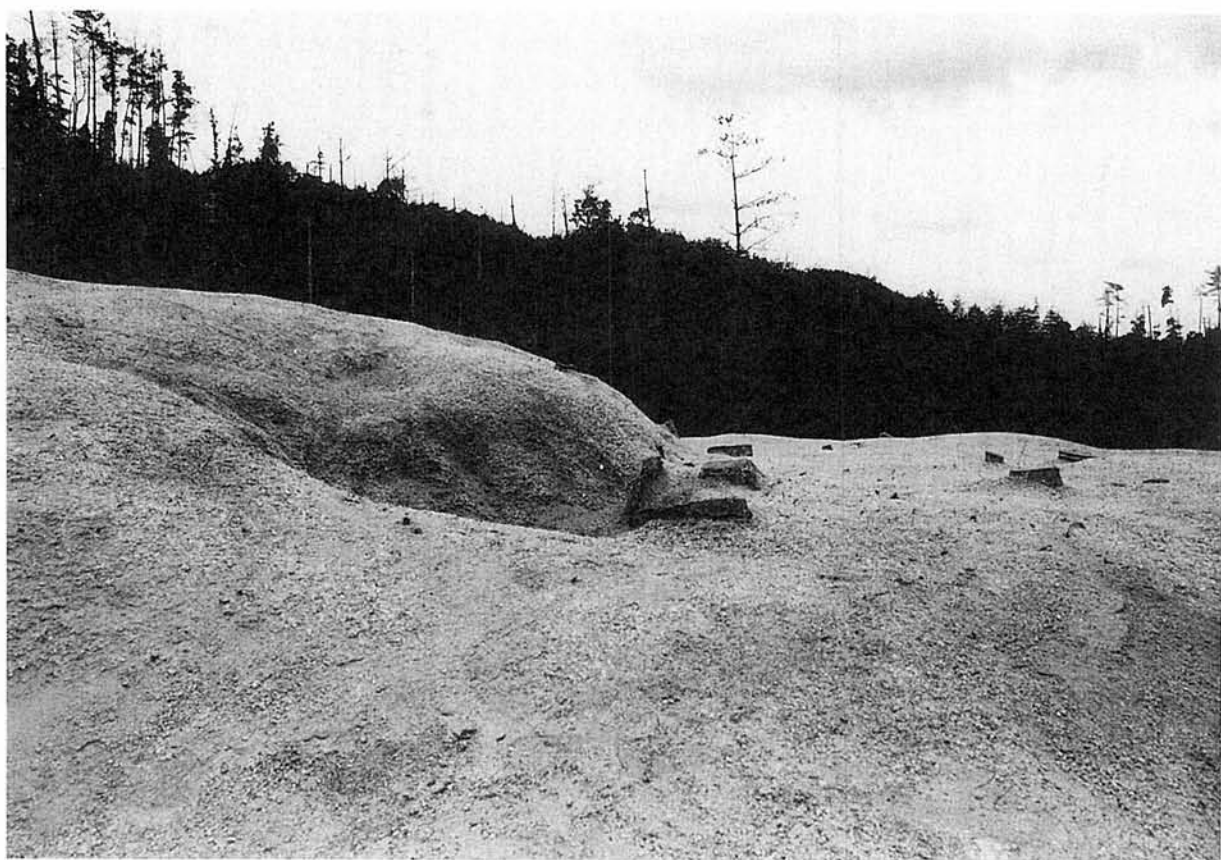
b. B 1



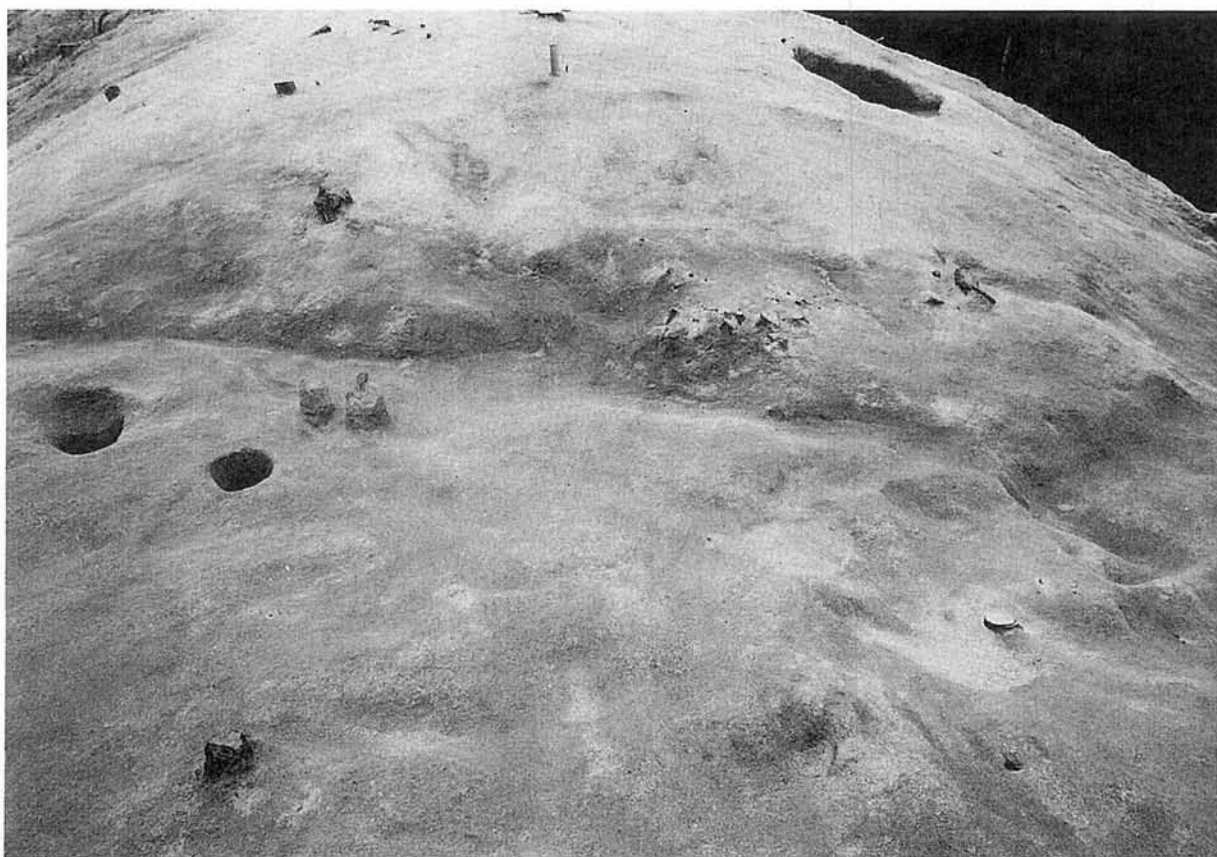
a. T 3 (西半分)



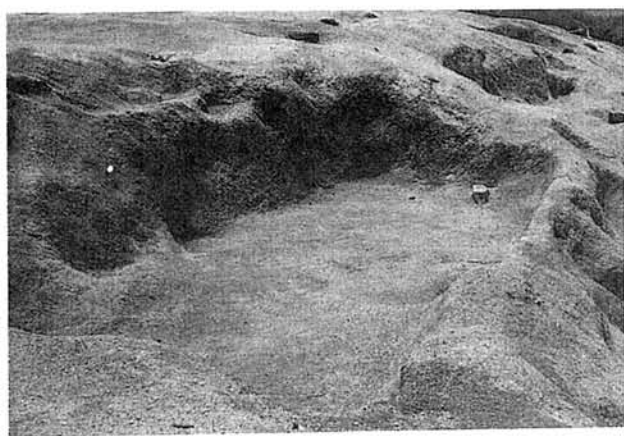
b. T 3 (東半分)



a. D1



b. D2



a. K1



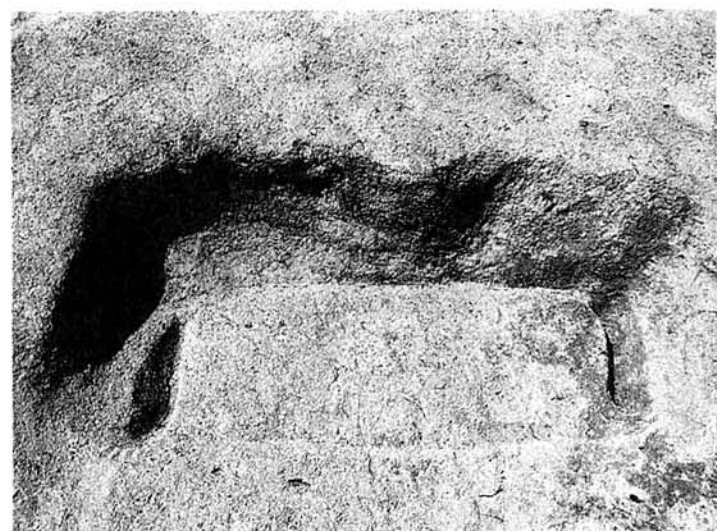
c. K3



b. K2



e. K5



d. K4



f. K6



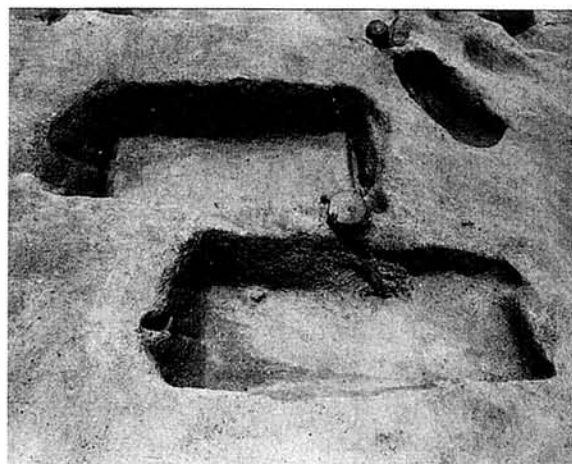
a. K7



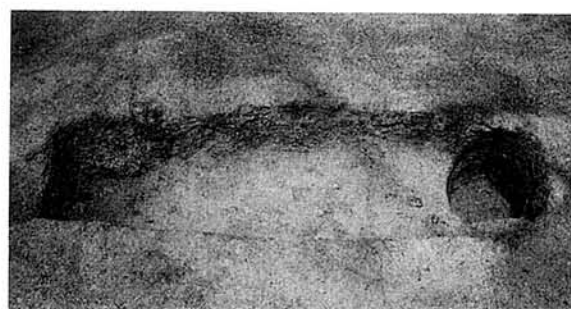
b. K8 • K9



c. K10



d. K11 • K12 • K13



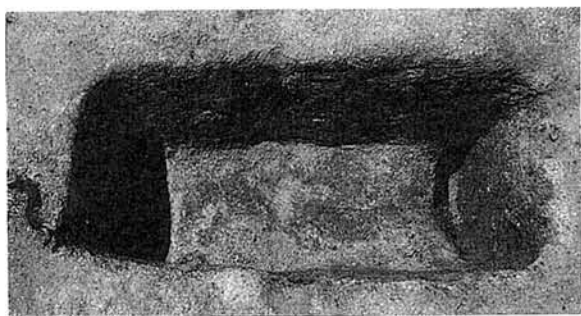
e. K14



f. K15



g. K16



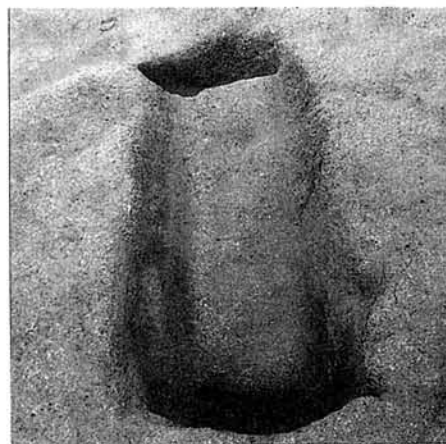
a. K17



b. K18



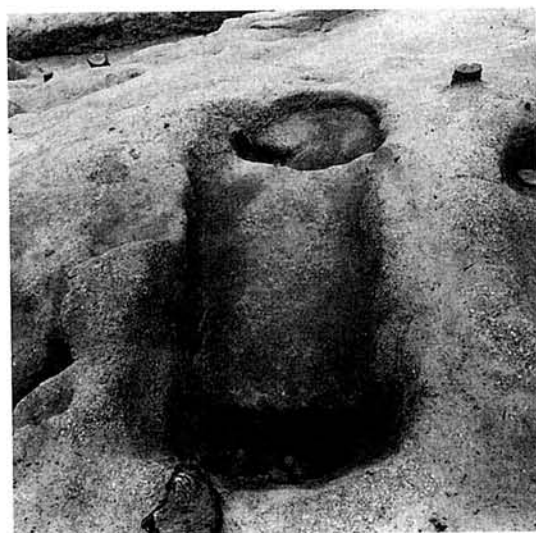
c. K19 • K20



d. K21



e. K22



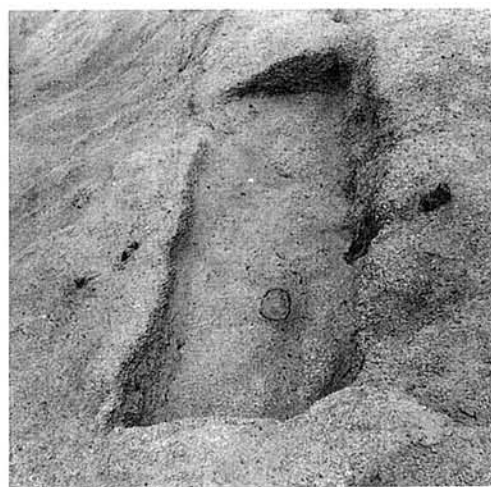
f. K23



a. K24



b. K25



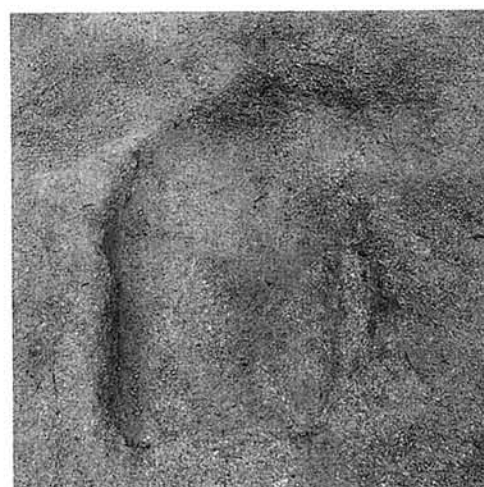
c. K26



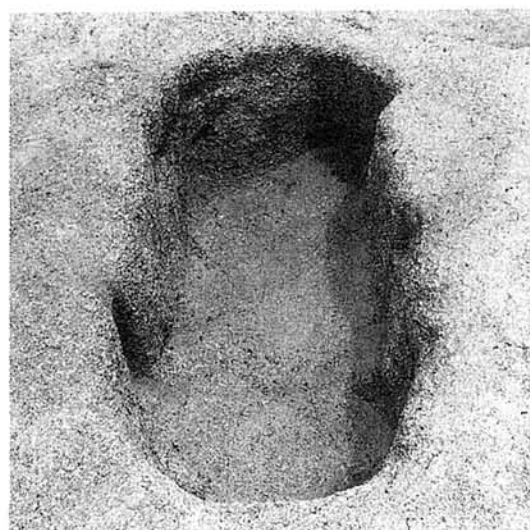
d. K27 • S 1



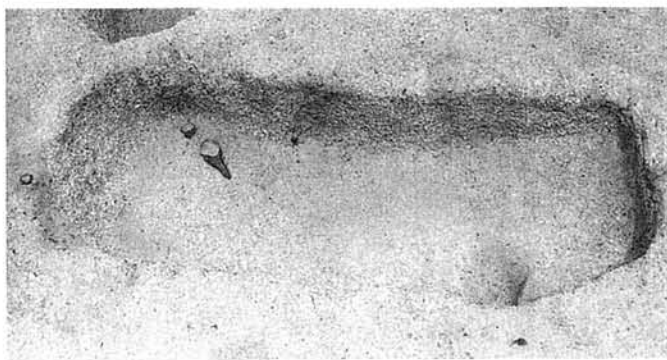
e. K28



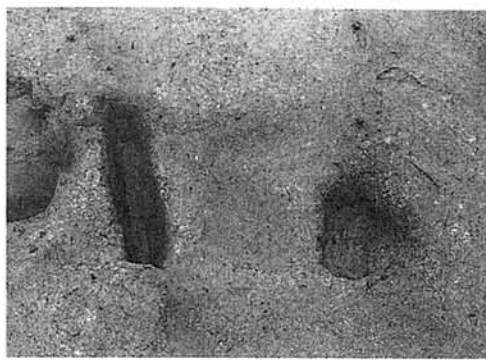
f. K29



g. K30



a. K31



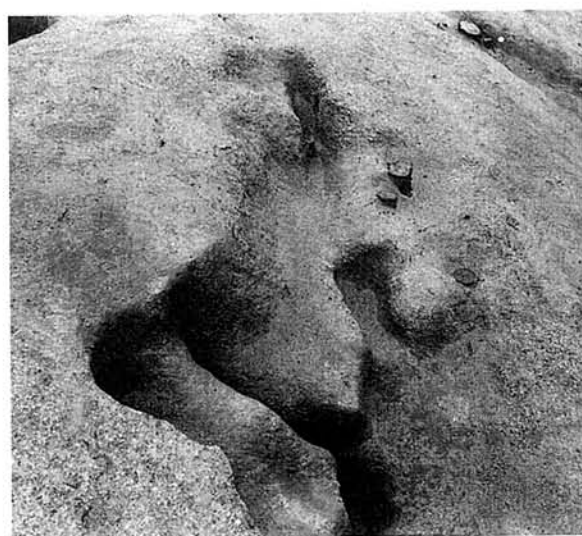
d. K34



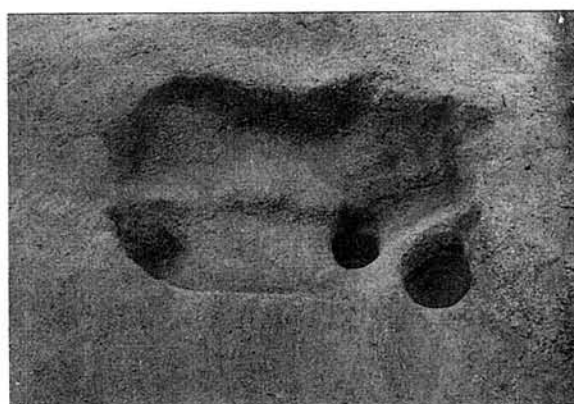
b. K32



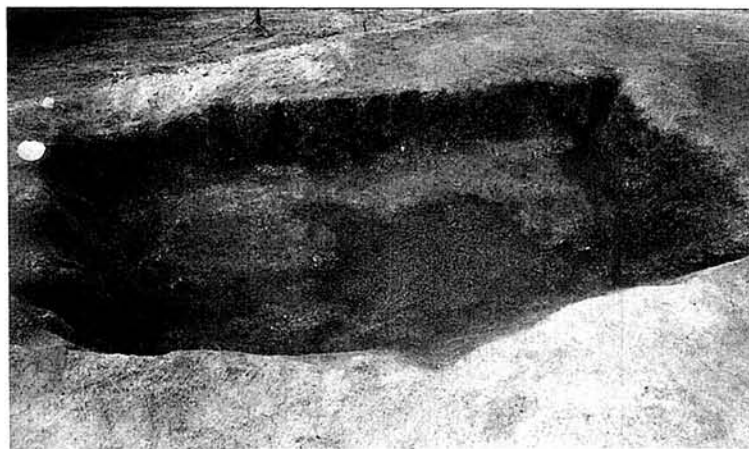
e. K35 • K36



c. K33



f. K37



a. K38



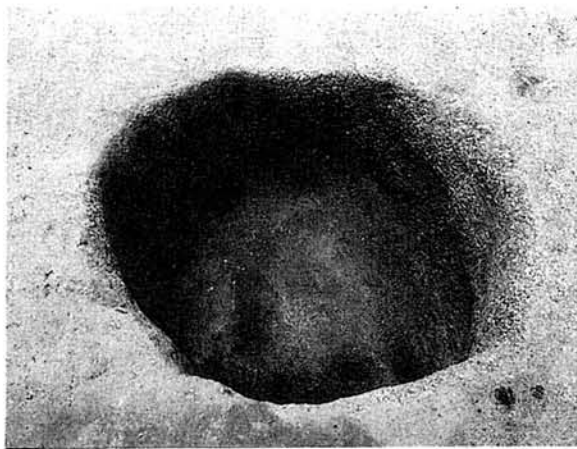
b. K39



c. K40



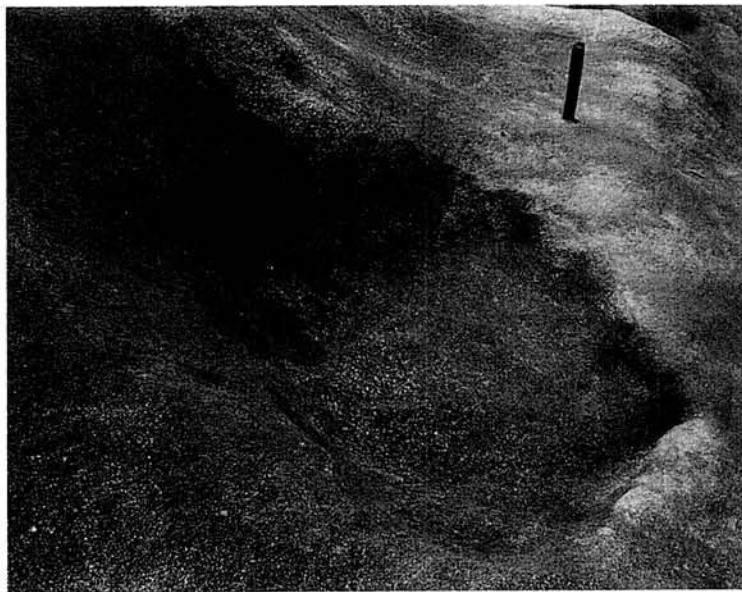
d. K41



a. S 2



b. S 3



c. S 4



d. X 1



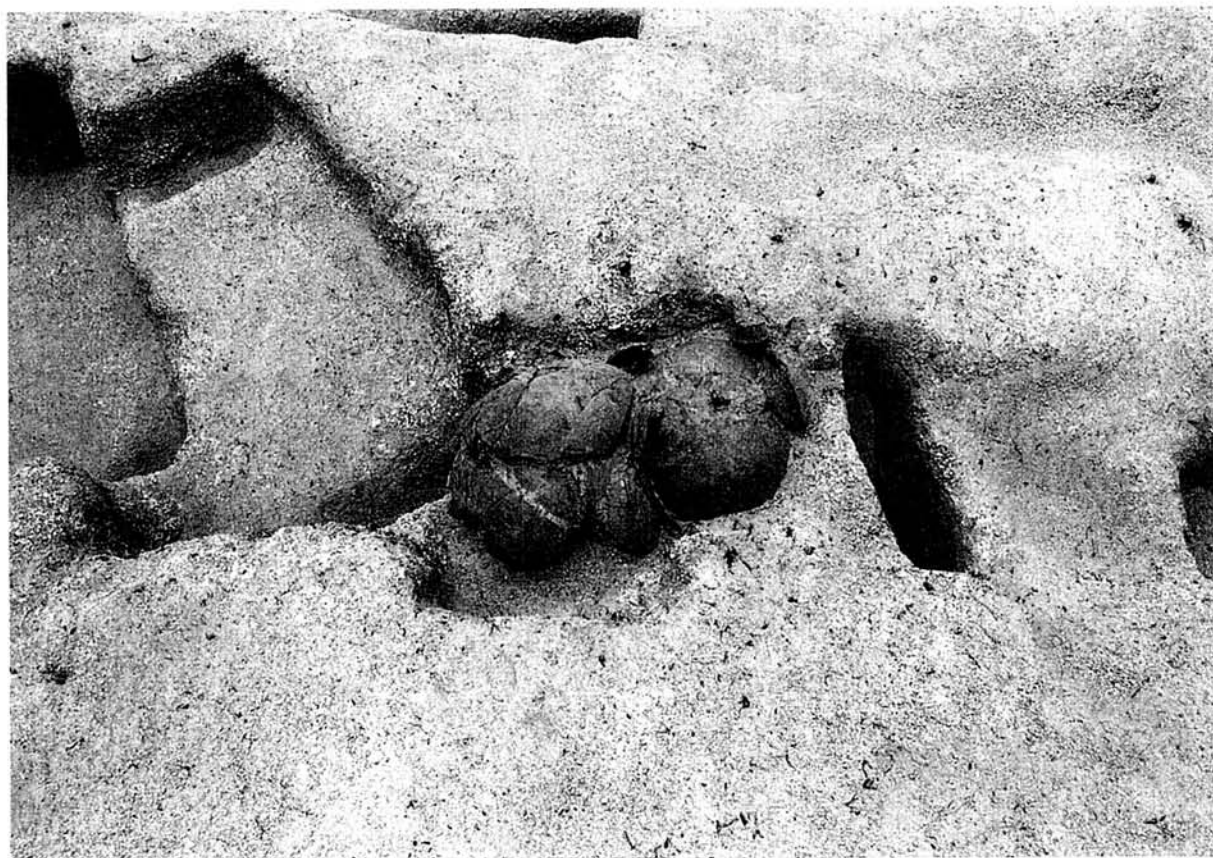
a. P o 1



b. P o 2



a. P o 3



b. P o 4



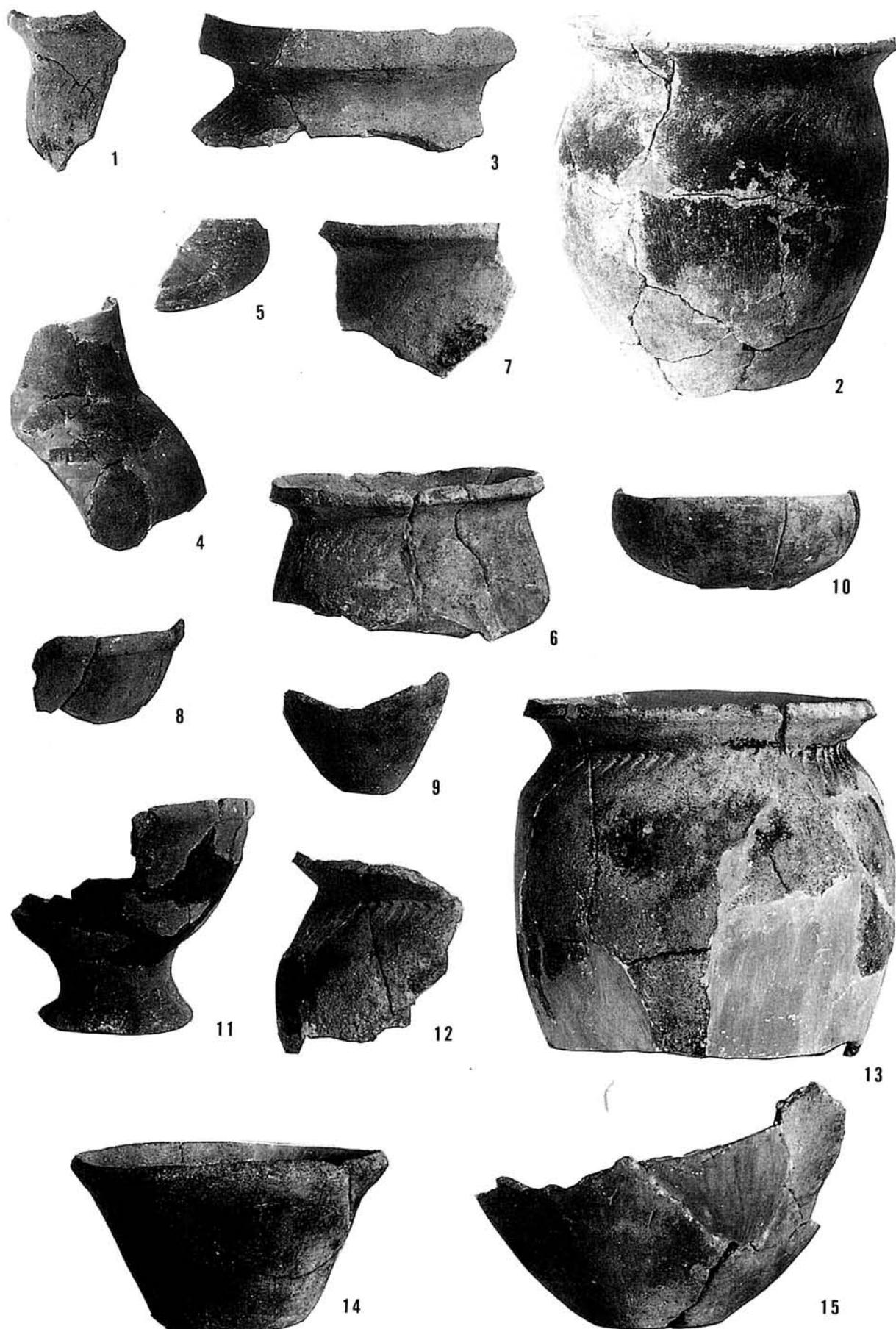
a. 第1土器溜まり



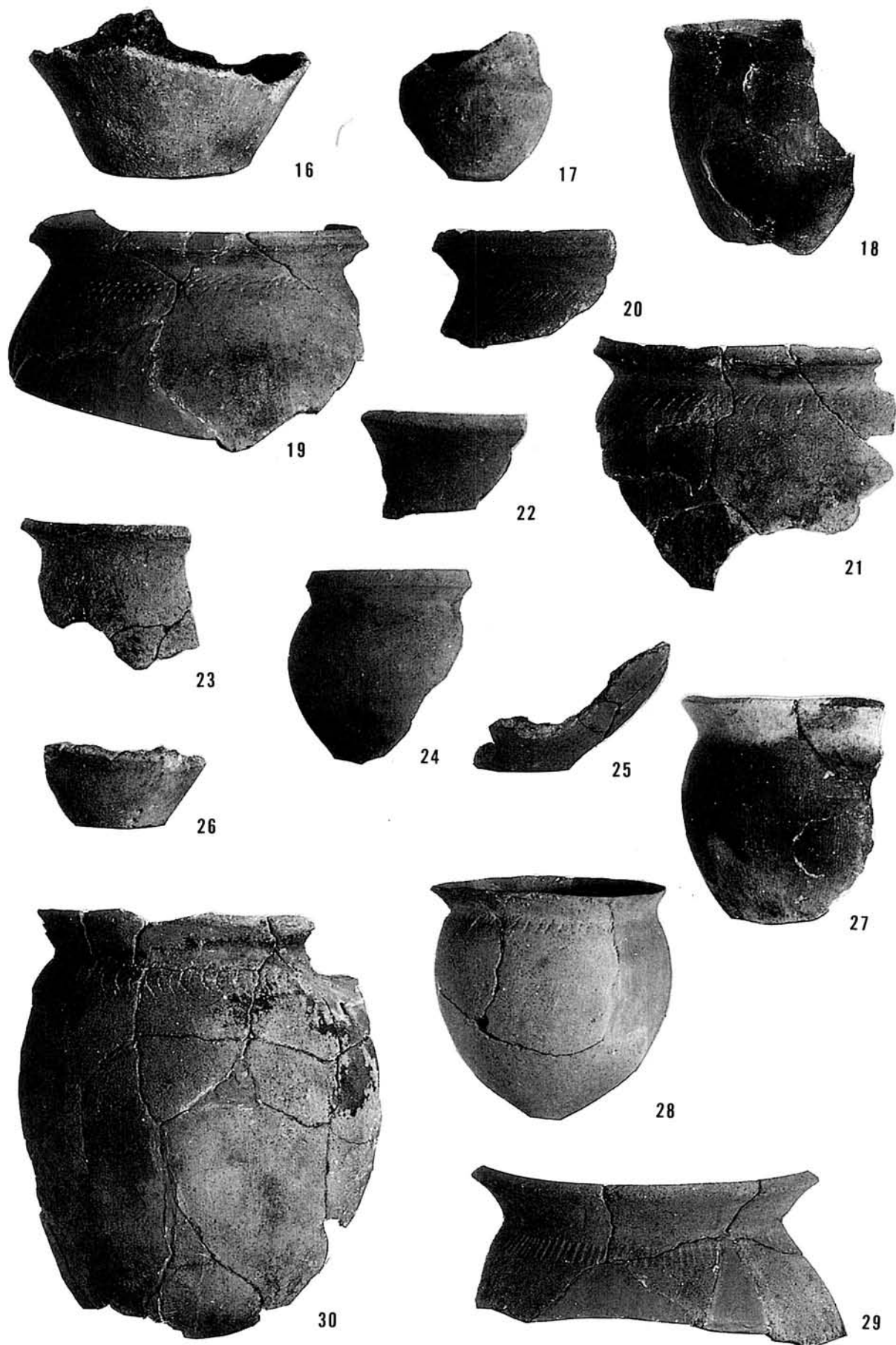
b. 第2土器溜まり



c. 第3土器溜り



出土土器(1)



出土土器(2)



31



32



33



34



35



36



37



38



39



40



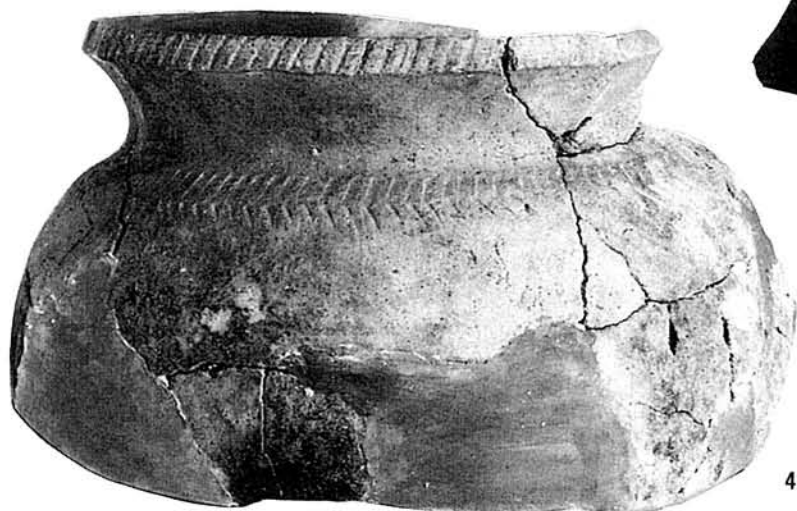
41



43



42



44

出土土器(4)



45



46



47



49



48

出土土器(5)



50



51



53



52



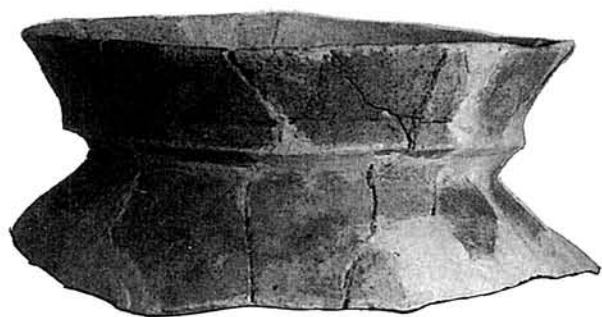
54



56



55



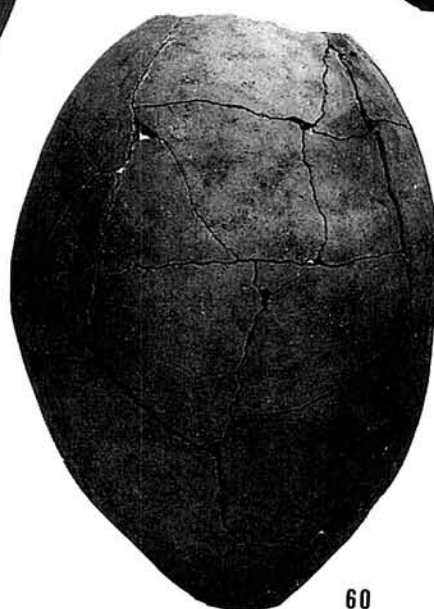
57



58



59



60



61



62



63



64

出土土器(8) (スケール 1/6)

(財)広島市歴史科学教育事業団調査報告書 第14集

広島市佐伯区五日市町所在

平尾遺跡発掘調査報告

1994年3月

編集発行 財団法人 広島市歴史科学教育事業団
広島市中区国泰寺町一丁目4番15号
TEL (082)248-0427

印刷 (有) 清 弘 社
広島市中区本川町二丁目3-8